

いばらさかも木の様な酒一刺逆茂木の如く刺すやうによくきく酒の意なるべし

庖丁料理

者、盃を出せ。▲冠者畏つてござる。▲しうとさらば、聲殿から参れ。▲シテいや〜、まづ舅殿から参つて下され。▲しうとそれなら、たべて進ぜう。太郎冠者、酌をせい。▲冠者畏つてござる。▲しうとさらば、この盃を聲殿へさしましよ。▲シテ戴きましよ。扱もく、よい酒でござる。▲しうと氣に入つたさうな。も一つ進ぜ。▲シテそれなら、も一つたべましよ。飲めば飲むほどよい酒でござる。そのまよいばらさかも木の様な酒でござる。祝うて三獻たべましよ。舅殿、をなも此中は、どうやら氣色がわるいと云うて、只梅漬ばかり食はれます。さらば、この盃を舅殿へさしましよ。もはや納になされ。▲しうともはや参らぬか。それなら納めましよ。太郎冠者、とれ。やい〜太郎冠者、汝に言ひつけておいた物出せ。▲冠者畏つてござる。▲しうとなう〜聲殿、この所の大法で、初めての聲殿には、庖丁の手元を見ます。聲殿にも一手なされ。▲シテ如何にも心得ました。さればこそ、彼の作法はこれぢや。をなく、こよへをりやれ〜。▲女何事でござるぞ。▲シテさあく、むづかしうなつた。今の書いた物讀うで見やれ。▲女心得ました。何々、相撲の

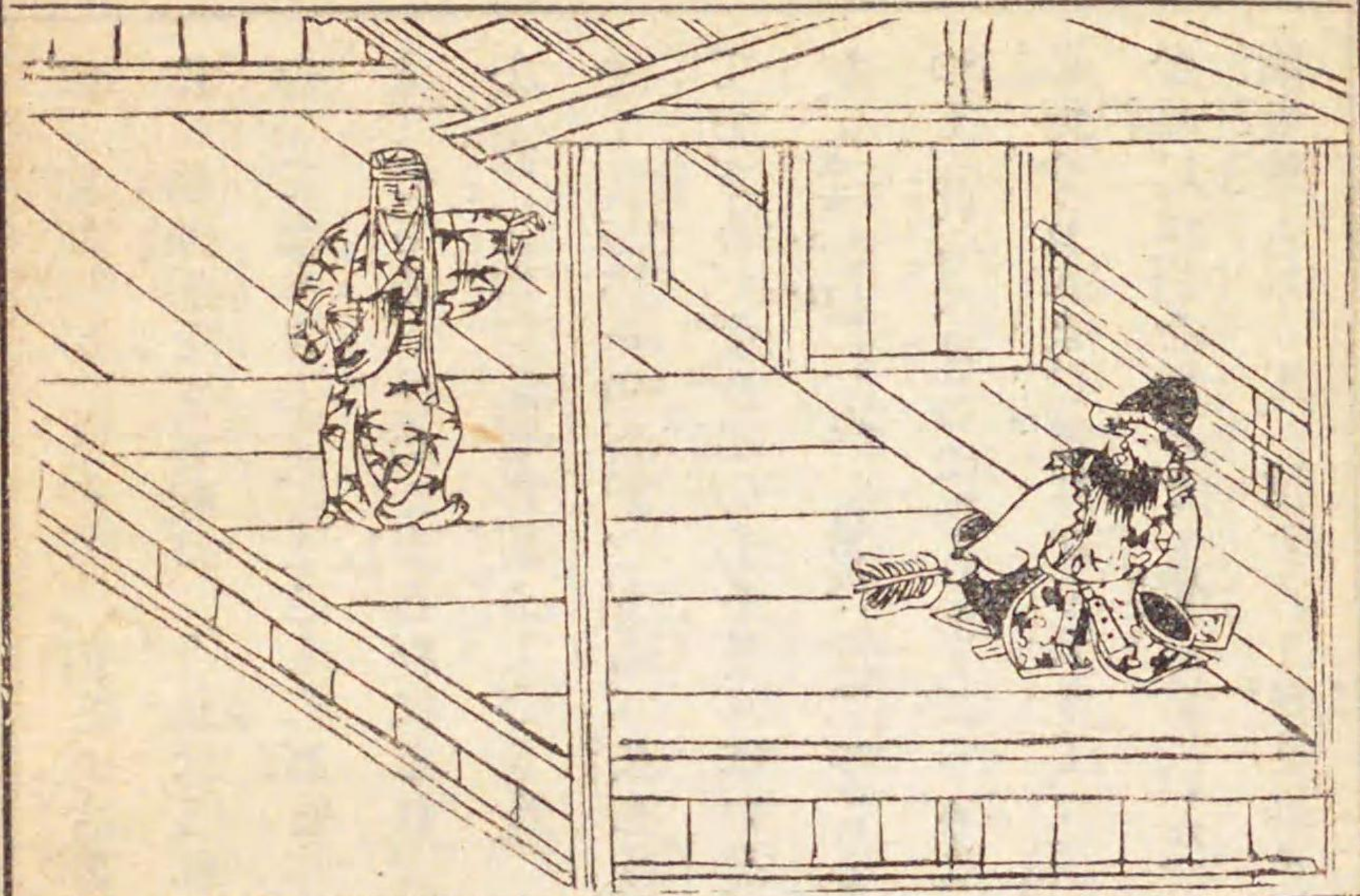
書のこと。まづ一番に烏帽子を脱ぐべし。▲シテ心得た。烏帽子脱いだ。さて何とある。▲女その次に上下小袖脱ぐべし。▲シテ何と、上下をぬぐか。なう〜嬉しやく〜。早う脱がう。扱々窮屈にあつたが、嬉しやく〜。さあその次を讀ましめ。▲女さて、真中へ出で力足を踏みて、相手あらば一番取るべし。▲シテ心得た。相撲は身共が好きぢや。取らうとも〜。▲しうとやい〜、太郎冠者。聲殿は律義な人と聞いた。定めて誰ぞなぶつて、あの様に教へておこしたものであらう。さりながら、身共も相手にならずは、舅はもの知らずぢやと云はれう。一番取らう程に、笑ふな。▲冠者畏つてござる。▲しうとさあく〜、是へ来て身拵させい。▲冠者心得ました。▲しうとさあく〜、太郎冠者行司せい。▲冠者畏つてござる。お手つ。▲一八やあく〜。▲女なう〜、悲しやく〜。こちの人と父様と喧嘩が出来た。何とせうぞ。▲シテやい〜、をな。足を取れ〜。▲女心得ました。▲シテ是は己が足ぢや。身共をこかしたら、内へよせぬぞ。▲女心得ました。▲シテおてつ。勝つたぞ〜。こちへをりやれ〜。▲女なう〜父様、祭には來ませうぞ。▲しうとあの

いたづら者め。親をこの様にして、何の祭よぼうぞ。やるまいぞく。

茶盞拜—原本茶盃とあり

縁につるれば云云—縁に縁につるれば唐土の物を食ふと云ふ遠の唐土に轉訛せしなりとぞ

よまひごと—獨ぶつ—云ふこと



六 茶盞拜

三人

シテ 唐人輕衫、唐人笠、扇持  
アド 小袖、薄びなん  
教手 長上下、小さ刀、扇持

▲女妾は、この邊の者でござる。まことに縁につるれば唐の物でござる。妾が夫は茶盞拜と申して、唐人でござる。こゝ許に、親類とては無い人でござるによつて、朝夕妾が馳走いたし、随分ねんごろに致します。何と致したことでござるやら、常常よまひごとばかりを云うて、涙をこぼし、泣き泣き致されます。妾も久々馴染みましたによつて、大方唐言葉も合點いたしますが、このよまひごと

は、如何様のことやら。何とも合點が参りませぬ。それにつき、こよに私の存じたお方に、物識がござる程に、今日はこれへ参り、この様子を尋ねて参らうと存じます。まづ急いで参りましょ。まことに縁と申しながら、唐人と夫婦になると云ふは、不思議なことでござる。やあ、参る程にこれでござる。ものも。御宿にござりますか。▲ものしりやあ、表に案内がある。何力でござる。やあ、わごりよか。これは何と申うてをりやつたぞ。▲女されば、その事でござる。久しう御見舞申しませぬども、又妾が用があれば参りましてござる。妾が男のちやさんはいを御存じでござりましょ。▲もの成程存じたが、息災なか。▲女如何にも、息災にはござりますが、つきましては、何とも合點の参らぬ事がござつて、此方へ尋ねに参りました。▲ものそれは何事でをりやる。▲女さればでござる。唯明暮何やらよまひ言ばかり云うて、涙を流して泣き泣き致されます。▲ものして、そのよまひ言には何を云ふぞ。覺はないか。▲女なるほど、覺えて居ります。日本人無心自我唐國妻戀と云うて、泣き泣き召されます。よい事でござるやら、又悪い事でござるやら、

存じませぬ。様子を云うて聞かしてくだされますなら、忝うござりましょ。▲もの何と、日本人無心自我唐國妻戀と云うて泣くか。▲女なか、さやうでござる。▲ものこれは知れたことぢや。歌に直して見れば、日の本の人の心のなかりせば、我からこくの妻ぞ戀ひしきと、云ふことぢや。つね、其方がつらう當るによつて、唐國の妻が戀しいと云ふことでをりやるわ。▲女なう、腹立やく。妾が唐人ぢやと思つて、常々ねんごろに致しますに、まだ唐の女が戀しいとは。なう、腹立やく。▲ものこれ、その様に腹を立ちやるな。只氣に入る様にして、いよくねんごろにしやれ。腹を立つる心なら、云うて聞かすまいもの。▲女これは私が誤りました。それなら、腹を立てますまい。さりながら、まだござります。▲ものそれは、何事でをりやる。▲女泣きましたあとには、茶盞拜々々と云うて、みなきくめされます。▲ものそれも、なるほど知れた事ぢや。常々よい茶酒も飲まいで、悲しいと云ふことぢや程に、随分今から酒肴も調へ、馳走さしましょ。▲女なるほど、心得ました。もはや歸りましょ。▲ものお行きやるか。さらば

みなきくー見泣きくか

唐の東下三字  
刊本不明

さらば。ようをりやつた。▲女はあ、忝うござる。なうく、嬉しやく。如何様の事ぞ  
と思ひました程に、歸られたら、酒肴拵へておいて、馳走いたしましたよ。何かと云ふ  
中に、歸りました。茶盞拜の戻られますを待ちましょ。▲シテ唐の東□□日本地に住  
めるなり。詞これは、唐土茶盞拜と申す者でござる。我十ヶ年以前に日本へ捕へれ、箱  
崎の浦に住居せり。日本人無心自我唐國妻戀々々。▲女なうく、腹立やく。今まで  
こそ知らなんだれ。それは妾も合點ぢや。これほど馳走するに、まだ唐の女が戀しいか。  
腹だちやく。▲シテ茶盞拜々々々。▲女なうく、それは尙合點ぢや。よい酒茶が飲みたい  
と云ふことであらう。今日は其方におませうと思つて、酒肴を調へておいた。まづ下に  
ゐて、一つ飲ませませく。さあ、この盃で飲ませませ。▲シテうらிரりやうすうらん。  
▲女さうでござる。一つ參れ。▲シテはよあふうれいらしや。▲女如何にも、よい酒を調へ  
て置きました。氣に入つたら、も一つ重ねさせられ。▲シテちんふんちやは。▲女妾にさ  
させらるゝか、戴きましょ。妾も一つ飲みました。又、此方へさしましょ。▲シテさるま

おませうー差上  
げやう

にやちやりさそ。▲女なかく、參れく。▲シテすうらいかほちや。▲女何とおしやるぞ。  
受持つた程に、妾に肴をせい。小舞をまへとおしやるか。▲シテしやがとくりんらい。▲女  
なるほど舞ひましょ。とかく此方の機嫌さへよければ、嬉しうござる。▲女舞謠あはれ、一  
枝を花の袖に手折りて、月をもともに詠めばやの望は残れり。この春の望残れり。▲シテ  
さらはにやまにはるちやそ。▲女また妾たべましょ。▲シテどんしやちやそ。▲女それなら  
も一つたべましょ。過ぎましょか知らぬ。なう茶盞拜殿。此方のいつも機嫌のよい時は、  
唐人の小歌を唄はせらるゝ。妾もうけ持ちました肴に、小歌を唄はせられ。わけは知ら  
ねども、聞きましょ。▲シテちうらいどんまんきん。▲女それは、面白ござらう。謠はせ  
られく。▲シテすうらんどんにこいてう、ぶゆがなんつるほろけ、なんかんこいもん  
かんごい、せつば。せいやらてう、おたら。▲女扱もく、わけは知らねど面白ごとでござ  
る。さあく、も一つ參れ。▲シテさらはにやしやりはらい。▲女いやく、是非とも參  
れく。それなら妾がをさめましょ。なうく茶盞拜殿。唐土には、樂を舞うて楽しむと

聞いてござる。此方も樂を舞うて見せさせられ。▲シテふうれいらしやてうらんすう。▲女何と、舞うて見せう。さあ〜、舞はせられ〜。▲シテ舞樂を奏して舞ひ遊ぶ。日本人無心自我唐國妻戀。▲女なう〜、腹だちやく〜。これほどにねんごろにして馳走するに、まだ唐の女の事云ふか、腹だちやく〜。▲シテらいれうちやるやそまかはん。▲女何の、許せとは。もはや堪忍がならぬ。こゝには置かぬぞ。出てゆけ〜。腹だちやく〜。

七人馬

三人

シテ 烏帽子、素襖、小さ刀  
アド 二人、半上下、腰帶

▲シテこの邊に隠れない大名。某の召使ふ者は只一人でござる。殊の外一人では不自由で、使ひ足らぬ。新座者を抱へうと存する。まづ、太郎冠者に申し付けう。やい〜太郎冠者、あるかやい。▲冠者はあ、お前に居ります。▲シテ念なう早かつた。汝呼び出すは、別の事でない。汝一人では人が使ひ足らぬほどに、今一人抱へうと思ふ程に、そちは上下の海道へ行て、よささうな者を抱へてこい。▲冠者畏つてござる。▲シテもはや行くか。▲冠者かう参ります。▲シテ聽て戻れ。▲冠者はあ。▲シテえい。▲冠者はあ。やれ〜、俄な事を仰せつけられた。まづ街道へ参り、何者ぞよささうな者が通らば、抱へて参らう。まことに只今までは、某一人で殊の外苦勞を致したが、新座が参つたら、身共もちと休息いたさうと存する。参るほどに、これぢや。この所に待つて居やうと存する。▲東國罷出

でたる者は、東國方の者でござる。この度思ひ立ち、都へ上り、こよかしこをも見物致し、又いささうな所があらば、奉公をも致さうと存する。まづ、そろくと参らう。皆人の仰せらるよは、若い時に旅をせねば、老いて物語が無いと仰せらるよにより、俄に思ひ立つてござる。▲冠者されば、これへよささうな者が参つた。なうく、これく。▲東こちの事か。何事でござるぞ。▲冠者なるほど其方の事ぢや。近頃聊爾な申し事ぢやが、若し其方は奉公の望ではないか。▲東なかく、私は奉公が望で上方へ上ります。▲冠者それは幸の事ぢや。某が頼うだお方は御大名ぢや。これへ肝入りて申し出さうぞ。▲東それは忝うござる。御肝入られて下され。▲冠者何と、只今でもをりやらうか。▲東参ります。▲冠者まことに。かりそめに詞を掛けて同道するは、よい縁でをりやる。▲東袖の振台ふも他生の縁とは、かやうのこととござらう。▲冠者やあ、何かと云ふ中に、これぢや。まづそれに待たしませ。▲東心得ました。▲冠者申し、頼うだお方、ござりますか。▲シテやあ、太郎冠者が戻つたさうな。太郎冠者、戻つたかく。▲冠者ござりますか。▲シテえ

い、戻つたか。▲冠者只今歸りました。▲シテ何とく、新座の者を抱へて来たか。▲冠者如何にも、抱へて参りました。▲シテ出かしたく。どこ許に置いた。▲冠者御門外に待たして置きました。▲シテ初あることが終あると。彼奴が聞く様にくわを云はう。汝は數多に答へ。▲冠者畏つてござる。▲シテやいく、太郎冠者居るか。▲冠者はあ。▲シテ床几をくれい。▲冠者はあ、お床几でござる。▲シテ何と、今の聲を聞かうか。▲冠者なかく、承りましょ。▲シテそれならあれへ行て、頼うだもの只今廣間へ出られた。あれへ出て目見えをせい、お目に入つたら、當座に御見参である、又お目も参らずは、五三日も逗留があらうと云うて、汝が云ふ分でこれへ出せ。▲冠者畏つてござる。なうく、をりやるか。▲東これに居ります。▲冠者頼うだお方、只今廣間へ出られた。あれへ出て目見えをめされ。御目がまるたら、當座に御見参である。御目も参らずは、五三日も逗留が参らう。さあ、お出やれ。▲東心得ました。▲シテやい、太郎冠者、居るか。▲冠者はあ。▲シテ今日はよい天氣ぢやなあ。▲冠者さやうでござります。▲シテ暮がよかる。暮に及うたら、若い衆

が鞆を遊ばさう。かよりへ水を打たせておけ。▲冠者はあ。▲シテえい。▲冠者新座の者でござる。▲シテ彼奴めか。▲冠者あれでござる。▲シテとつと利根さうな奴ぢや。さりながら、見掛けと違つて鈍な奴がある。彼奴に何も藝はないか。問うて来い。▲冠者畏つてござる。なうく、其方に何も藝は無いかと仰せらるよ。▲東いや、私は何も藝はござらぬ。▲冠者それは氣の毒ぢや。何なりとも藝があれば、抱へさせらるよが、何も無いか。思ひ出して見やれ。▲東いやく、何もござらぬが、若しこれも藝になりましよか。▲冠者何でをりやる。▲東人を馬にすることをえてるます。▲冠者これは變つたことぢや。その通申さう。申しまするは、何も藝はござらぬが、人を馬にすることを得てゐると申します。▲シテ何ぢや。人を馬にすると云ふか。▲冠者なかく。▲シテこれは珍しい藝ぢや。急いでして見せいと云うて、これへ出せ。▲冠者畏つてござる。さあくこれへ出て、急いで馬にして見しやれ。▲東畏つてござる。どなたなりとも、お人を下されませ。▲シテされば、誰を馬にせうぞ。誰彼と云うても人がない。太郎冠者馬になれ。▲冠者これは迷惑なことでござ

駒子馬の意

る。私も久々御奉公致しました。もはや御取立に預り、侍にもならうと存じます處に、馬になつてよいものでござるか。これは御免されませ。▲シテはて扱、主の爲には命さへ棄つる。急いで馬になれ。悪うは使まいぞ。▲冠者さやうに御意なされるれば、是非もござらぬ。なりませうか。扱もく迷惑な事かな。なうく、其方もまた藝能こそ多いに、馬を人にしてこそよかるけれ、人を馬にすると云ふ事があるものか。身共が馬になつたらば、其方口取をするであらう。必ず重い物を負せてたもるな。馬屋に獨居たらば寂しからう。どれぞ腰元衆の中を一人馬にして、身共が側に置いてたもれ。そのうち駒でも出くれば、頼うだ人の爲でをりやる。頼むぞ。▲東如何にも、氣遣召さるな。身共が悪うは致すまいぞ。▲シテさあく、早う馬にせい。▲東畏つてござる。これへ出やれ。▲東毛詞いでく馬になさんとて、まづ楊梅の皮を水にてとき、顔にぬれば、顔より馬にぞなつたりける。▲シテはあ、まことに顔から馬になつたわく。さあく、皆どこも馬にして見せい。▲東畏つてござる。今度は手足も皆馬に致しましよ。手綱を拵へ、乗る用意を

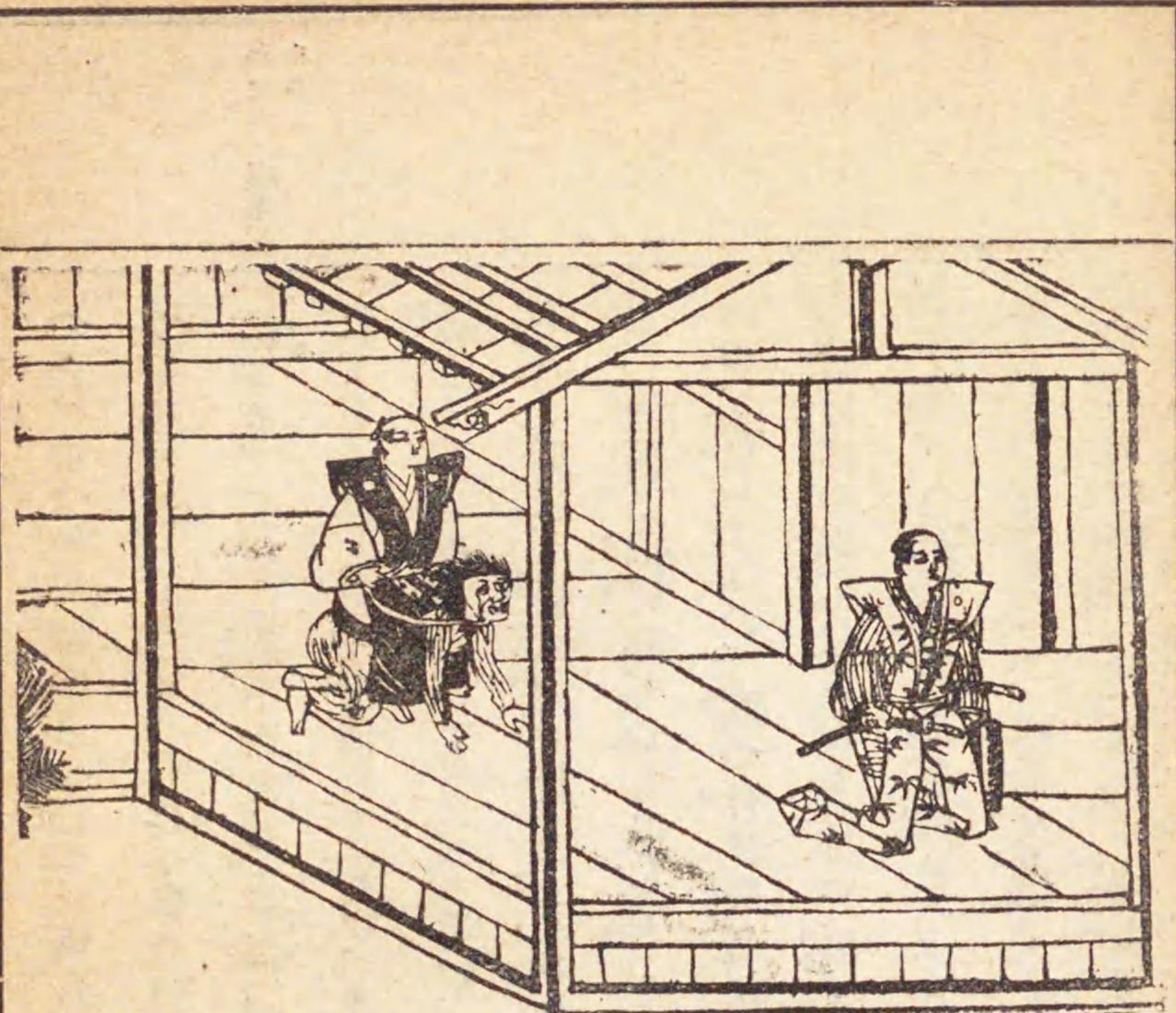
なされ。▲シテ心得たく。▲東色詞 尙々馬になさんとて、陳皮乾薑色々の、加薬を取りかへく塗りけれど、馬には更にならざりけり。▲東逃り ▲シテ どうくく。▲冠者申し、私でござる。▲シテ 太郎冠者か。▲冠者 なかく。▲シテ 最前の奴は、たらしめぢや。逃すな。やれ逃ぐるわ。やるまいぞくく。

師 たらしめ—詐偽

### 八 止動方覺

四人 主、伯父 中上下、腰帶  
馬 輕衫、黒頭、げせん

▲主 これはこの邊に隠れない者でござる。此中の方方に御參會は、夥しい事でござる。又今日は、山一つあなたへ茶の湯に參る。それにつき、太郎冠者を呼びだし、申しつくることをござる。やいやい、太郎冠者、あるかやい。▲シテ はあ、御前に居ります。▲主 念なう早かつた。汝を呼び出す事、別の事でない。今日は山一つ彼方に、各立ち寄り、茶の會がある。これへ參らねばならぬが、それに





わたし一磯茶壺のこと

つき。汝は伯父御の方へ行て、借る物がある。借つて来い。▲シテ畏つてござる。何を借つて参りましよ。▲主あれへ参り云はうは、今日は山一つ彼方へ茶の湯に参ります。それにつき、手前に茶をきらしました。御無心ながら極上一袋わたしに入れて、お貸しなされて下されと云うて借つて来い。▲シテ畏つてござる。▲主又、各馬上でござる。御馬も貸して下されと云うて借つて来い。▲シテ心得ました。▲主まだある。何れも太刀を持たせらるゝ程に、御太刀も貸して下されと云うて借つて来い。▲シテ畏つてござる。さりながら、如何に伯父御ぢやと申して、その如く様々の物を貸さうとは仰せられまい。▲主いや、苦しうない。追つ付け戻しましよと云うて借つて来い。▲シテ畏つてござる。▲主追つ付けはや御出なさるゝ程に、早う行て来い。▲シテ心得ました。▲主えい。▲シテはあ。やれ、これは急な事を仰せつけられた。さりながら、借りに参らざるはなるまい。急いで参らう。まことに、扱伯父御ぢやと云うて、この如くに、様々の物を貸さうとは仰せられまい。日頃頼うだ人が不嗜によつて、かやうの時、迷惑致さるゝことぢや、やあ、

重代一家傳の物

何かと申す中に、これぢや。ものもう。案内も。▲をぢ表に案内がある。どなたでござる。えい、太郎冠者か。ようこそ来たれ。只今は何と思つて来たぞ。▲シテその儀でござります。頼うだる方より、お使に参りました。今日、山一つあなたへ、各茶の湯の會がござる。是へ、頼うだ人も参られます。打節茶が切れて、ござりませぬ。此方の御茶を一袋わたしに入れて、お貸しなされて下されませいと、申しておこされました。▲をぢ如何にも安い事ぢや。幸挽かせておいた。貸してやらう。それに待て。▲シテそれは忝うござります。▲をぢこれ、太郎冠者、わたしに入れて貸すほどに、損はぬ様にして、役に立てたら戻しやれと云へ。▲シテ畏つてござる。まだござります。各太刀を持たせられます程に、お太刀もお貸しなされて下されませ。▲をぢ何と、各が太刀を持たせらるゝ。それなら持たせいでなるまい。貸してやる。さりながら、この度は貸してやる。侍の、太刀を持たぬと云ふことはないことぢや。拵やれと云へ。▲シテ畏つてござる。▲をぢこりやく、これは重代なれど貸すほどに、損はぬ様にして戻しやれと云へ。▲シテ畏つてご

とつて出る一跳  
ね出す也

ざる。まだござります。▲をぢそれは何ぢや。▲シテいづれも馬上でござります。とても  
 ことに、御馬も借つて参れと申されました。▲をぢなるほど尤ぢや。これも貸してやる。  
 こりやく、この馬を貸してやる。引いて歸れ。▲シテこれは、久しう見ませぬ中に、遅  
 しうなりました。定めて待ちかねて居られましよ。追つ付け歸りましよ。色々の物をお  
 貸しなされて下されて、忝うござります。もはやかう参ります。▲をぢやあ、その馬に  
 はちと癖があるわ。▲シテそれは如何様の癖でござる。▲をぢされば、その馬の後で咳拂す  
 れば、必ずとつて出るほどに、さう心得。▲シテそれは氣の毒にござる。私は承りまし  
 た、致しますまいが、さりながら、道で人などが致したら、何共氣の毒でござる。▲をぢ尤  
 ぢや。さりながら、その時は馬の鎖る文がある。教へてやらう。寂蓮童子、六萬菩薩、  
 鎖り給へ、止動方覺々々々と云へば、その儘鎖るわ。▲シテ是は調法な事でござる。覺  
 えましてござる。もはやかう参ります。▲をぢ行くか。用に立てたら早く戻せ。▲シテ畏つ  
 てござる。▲をぢよう來た。▲シテはあ。なうく嬉しやく。まんまと借り濟した。急い

ひつそつて一引  
添ひて也

で歸らう。扱もく、結構なお方ぢや。残らずお貸しなされて下さつた。よい伯父御ぢ  
 や。▲主太郎冠者めは何をして居る知らぬ。遅い事かな。もはや何れも御出なされた。  
 扱もく、憎い奴かな。▲主やい、其所な奴。おのれは今まで何をして居つた。各早御  
 出なされて、身共ばかりぢや。扱もく、憎い奴ぢや。▲シテ此方は聞えませぬ。この様  
 様の物を、色々と云うて借つて参つたに、まだ其様なこと仰せらるゝか。聞えませぬ。  
 ▲主何をぬかし居る。おのれは又酒がな食うて、口をきいて居つたものである。こちへお  
 くしをろ。その壺も太刀も持つて、早ううせい。▲シテ扱もく、聞えぬこと云はるゝ。  
 これほど色々の物を借つて参つたに、よう借つて來た、出かとは云はいで、腹を立て  
 らるゝ。▲主やい、其所な奴。おのれは其所に何をして居る。早ううせぬか。馬にひ  
 つそつてうせい。▲シテあ、心得ました。▲主これは如何なこと。ひつそつてと云へば、負  
 はれかゝるやうにし居る。後からうせい。▲シテ心得ました。▲主これはく、後からと云  
 へば、何をして居るやら、はてる事ではない。先へうせう。▲シテ心得ました。▲主やい

えへんく〜咳  
拂をして落馬せ  
しむ

やい〜。先へうせいと云へば、分量もなう早ううせをる。扱も〜、憎い奴ぢや。のれ歸つて何とするぞ。待てよ。▲シテこれは如何な事。さきへ行けば行くとおしやる。後から行けばさがるとおしやる。憎さも憎し、落してくれう。思付けた。えへんく〜、  
▲シテ寂蓮童子、六萬菩薩、鎮り給へ、止動方覺々々々。申し〜、何となされました。痛みますか。それへ参りたうござれど、御馬を乗り鎮めて居ります。もはや鎮りました。御馬に召しませ。▲主扱も〜、悪い馬かな。したよか腰をうつた。もはや乗るまい。徒歩で行かう。汝乗つて来い。▲シテいや勿體ない。私は乗られますまい。其上私が乗りまして、此壺からお太刀を持つて、口の剛いこの馬には乗られますまい。此方召しませ。  
▲主いや〜、乗る事は厭ぢや。それなら是非に及ばぬ。その太刀や壺は身共が持たう。汝乗つて来い。▲シテさやうにござらば、乗りましょか。▲主さあ〜、乗れ〜。身共が持つて行くぞ。▲シテ御免されませ。乗ります。▲主乗れ〜。ゆるすぞ。▲シテ申し〜、この如くにして参りますを、人が見ましては、此方を下人で、私が主かと存じましょ。▲主

のし切つて〜遠  
慮なく思ひ切つ  
て

如何様、知らぬ人が見たらばさう思ふである。▲シテそれにつきまして、ちと此方へ申し上げた事がござります。▲主それは何事ぢや。▲シテまづ私も、後々はお取立に預りまして、立身いたしましたらば、定めて馬に乗ることもござりましょ。▲主それ〜。▲シテその時には、人も使ひまするでござる。俄に使ひつけも致さいで、使ふも不調法にござる。その時の爲でござる程に、只今此方を下人にして、いや、もはやおきましょ〜。御免されませ。▲主いかにも聞き届けた。今度そちが立身にして、人を使ふ時の稽古に、今身共を内の者にして、使うて見たいと云ふ事か。▲シテいや〜、左様ではござりませぬ。御免されませ〜。▲主いや〜、苦しい。よかる。許すぞ〜。さあ〜、呼んで見よ〜。▲シテ何と、御免されますか。▲主なか〜、苦しい。許すぞ〜。▲シテそれなら呼んで見ましょ。やい〜、太郎冠者。▲主はあ。▲シテござりますか。いや〜、如何にしても、呼ばるゝ事ではござりませぬ。もはやおきましょ。▲主はてさて、ちつとも苦しい。許すほどに、思ひ切つて呼んで見よ。▲シテそれなら、のし切つて呼びま

しよ。御免されませ。▲主許すぞく。呼べく。▲シテやいくく。太郎冠者。▲主はあ。  
 ▲シテ居るか。▲主はあ。▲シテおのれは憎い奴の。今まで何をして居つた。何もはや御出  
 なされた。又酒飲うで口をきいて居つたか。扱もく。憎い奴かな。先へうせい。やい  
 やい、先へと云へば、むしやうに早ううせる。後からうせう。これはく。後からと云へ  
 ば、分量もなう後からうせる。とかくひつそうてうせう。憎い奴かな。何とせう知らぬ。  
 ▲主これはいかな事。餘りなことぢや。のきをろ。扱もく。憎い奴かな。おのれは、  
 最前の云ひかへしに云ひ居るなあ。▲シテ此方は許すと仰せられた。▲主いかにも、許せば  
 とて、今の様なことぬかすものか。早ううせう。▲シテ心得ました。やあ、又おどしてく  
 れう。えへんくく。寂蓮童子、六萬菩薩、鎮り給へく。▲主やあ、これは身共ぢや。  
 罰當何としをる。▲シテあゝ、許させられく。▲主やるまいぞくく。

九 拄 杖

三人 シテ 頭巾、衣、腰帶  
 アド 半上下、腰帶  
 女 箔小袖、ゆばうし

邊土一 片田舎  
 拄杖一 禪僧など  
 の持つ杖

▲シテ罷出でたる者は、邊土に住居致す僧でござる。某、いつぞや都へ用事ありて上り、  
 その次に、拄杖を誂へ置きました。漸う頃は出来時分でござる程に、とりに参らう  
 と存する。まづ、そろくくと参らう。やれく、出家ほど世に樂なものにござらぬ。今  
 日も又、行先にどれになりとも逗留いたし、佛詣をして戻らうと存する。やあ、参る程  
 に、彼の拄杖屋はこれにござる。ものもう。御亭主内にござるか。▲亭主表に案内がある。  
 どなたでござる。▲シテいや、身共でござる。▲亭やあ、これはいつぞや、拄杖誂へさせ  
 られた御坊か。▲シテなかく、さやうでござる。何ともはや出来ましたか。▲亭如何に  
 も、よう出来ました。それに待たせられ。見せましょ。▲シテ心得ました。見せて下さ

れ。▲亭これく、これでござる。▲シテ扱もく、これはよう出来ました。身共の誂に  
 少も違はないさうな。▲亭随分念の入れました。それにつき、此方はいつぞや御目に掛つ  
 た時より、如何にしても殊勝に存する。何とこの拄杖について、一句持つて参らうか。  
 ▲シテこれは亭主奇特でござる。何とく。▲亭如何なるかこれ白木の拄杖。▲シテ漆な  
 ければ塗ることもなし。▲亭善哉々々。▲シテ扱は花塗になさるよか。▲亭この拄杖折れて  
 の後は如何に。▲シテ一念はつくとも二念をつかず。▲亭扱もく、此方は愈殊勝千萬に  
 ござる。身共もかやうの職を致しますれど、常々出家の志でござる。まづ奥へ通らせ  
 られ。一飯も進ぜ、その上、愈ありがたい教化にも預りたうござる。まづ通りせら  
 れ。▲シテ如何にも、人を勧むるは、出家の役でござる。なるほど通りましよ。その拄杖  
 もこれへ下され。心得ました。▲亭なうく御出家、内々私も只今申す通、出家の望  
 でござるほどに、此方の弟子になされて下され。ともくくに、國々修行いたしたうござ  
 る。▲シテ如何にも、身どもの弟子にいたして、只今髪を剃り、出家に致すは、何より易

い事でござる。さりながら、かやうのことは、とくと親類兄弟又は御内儀とも、よう相  
 談召され。かりそめに、ふと出家しても、後悔することもあるものでござる。出家にな  
 れば、それくの法を勤め、經陀羅尼も覚えねばならず、身持がとつとむづかしうござ  
 る。さりながら、勤むべき事さへ勤むれば、外に心に苦勞はない。どれへなりとも参り  
 たい方へは、心の儘に参り、とまりたいところにはとまる。何につけても、惜しい欲し  
 いと思ふ貪慾を離れてからは、なかく、心に苦がなうて、この世からの佛でござる。▲亭仰  
 せられた通でござる。それ故、私も俄のことでもござらぬ。常々の望でござる。なるほ  
 ど萬事心得て居ます。是非とも弟子にして下され。▲シテ何と、篤と合點が参つたの。▲亭  
 なかく、合點致しました。▲シテそれなら、剃刀をあてましよ。親類衆お内儀も同心で  
 ござるか。▲亭なるほど、女どもも日頃に云ひ聞かせて置きました。身共次第でござる。  
 ▲シテそれならようござる。さらば用意なされ。▲亭心得ました。月代を揉みましよ。▲女  
 こちの人は、最前拄杖を誂へた出家が、取りに参られた。表へ出られたが、何をして居

そのつれ一其様  
な事  
うせた一来た  
うせぬか一行か  
ぬか

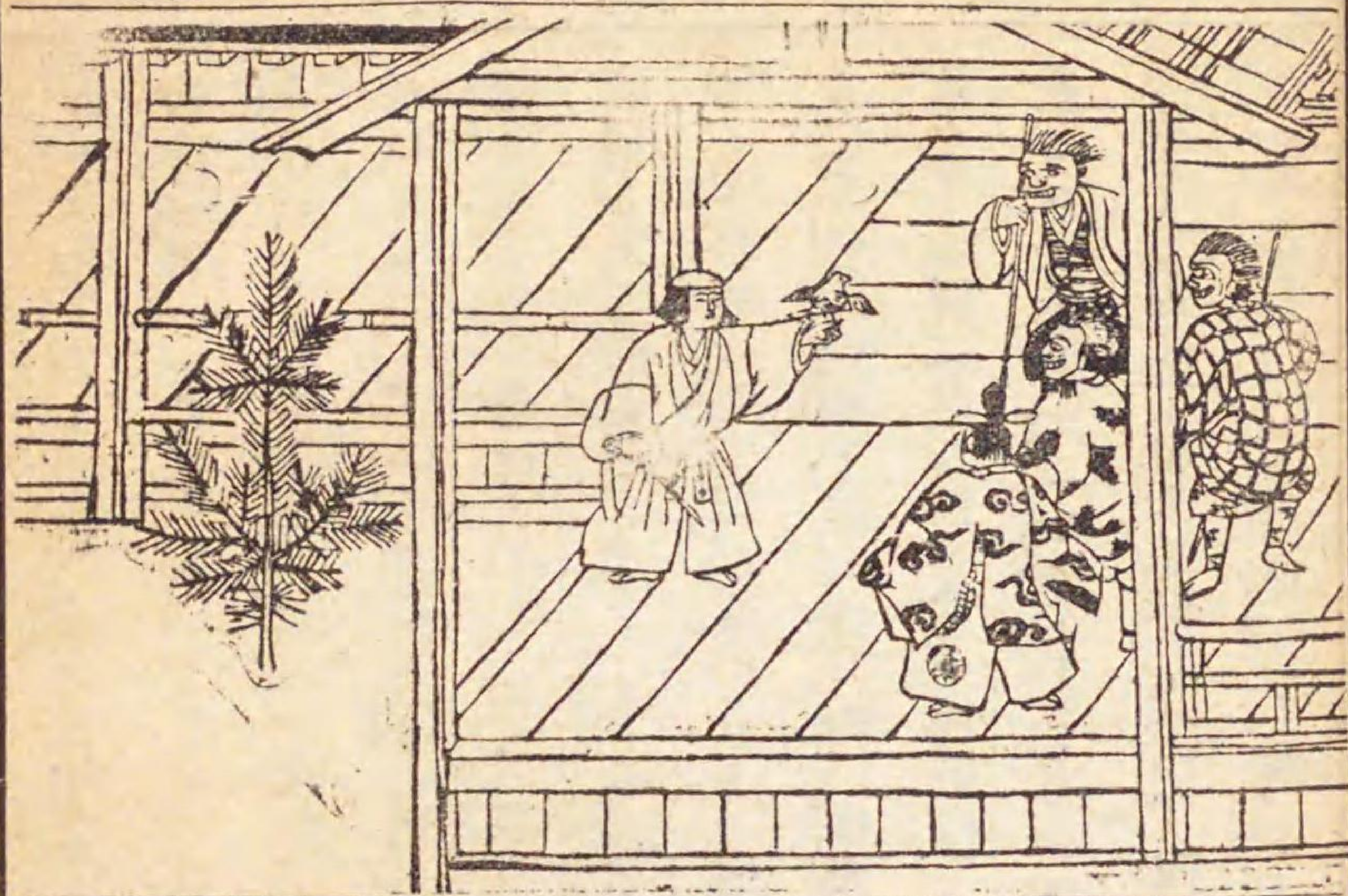
らるよ。暇ひまがいる。見みに参まゐりましよ。やあ、これはこちの人ひと、わごりよは坊主ぼうずになるか。それは誰たれに問とうてなるぞ。ことな坊主ぼうずも、よう髪かみを剃そらうと思おもふなあ。腹はらだちやく。まづこの剃刀かみそりをこちへおこせ。▲シテこれは何なにと召めさる。お内儀ないぎも合點がてんぢやと云いはれた。▲女メまだそのつれを云いふか。妾わらはを何なにとせうと思おもふぞ。坊主ぼうずになる。おのれはまづ何所どこからうせた。あちへうせぬか。去いなぬか。▲シテこれは何なにとするぞ。身みどもは無理むりに勸すすめはせぬ。内々望ないくのぞみぢやと云いはれた。▲女メまだその様やうな事こと云いふか。おのれ賣まい僧坊主そうぼうずめ。やらぬぞ。▲シテあゝ悲かなしや。許ゆるせ。▲女メやい、わ男おとこ、よう妾わらわに合點がてんもさせいで、坊主ぼうずにならうと云いうた。妾わらはは何なにとなれと思おもうて。腹はらだちや。▲亭ていいや、最前さいぜんの出家しゅつげが、坊主ぼうずは樂らくな者ものぢや、なれと云いうたによつて、剃そらうかと思おもうて。▲女メまだそのつれなこと云いふか。おのれ何なにとせうぞ。腹立はらだちやく。▲亭ていもはや思おもひ止とまるぞ。やれ許ゆるせ。▲女メあゝ腹はらだちやく。どちへうせる。やるまいぞ。なう腹はらだちやく。

十 餌差十王

五人 シテ 白水衣、半袴、竿持  
鬼 頭巾、半袴

▲えんま 次第ぢだい 地獄ぢごくの主閻魔王あるじえんまわう、六道だうたうにいざや出いでうよ。やい、眷屬けんぞくども、居ゐるか。▲三人鬼さんにんおにはあ、これに居ゐります。▲えん 罪人ざいにんが参まゐつたら、地獄ぢごくへ責せめ落おし候うへ。▲三人畏おそつてござる。▲シテ次第ぢだい 罪つみも作つくらぬ罪人ざいにんの、誰たれかは寄よつて塞せかうよ。詞ことばこれは娑婆しゃはに隠かくれもない、清頼せいらいと申まをす餌差えさしでござる。われ壽命じゆみやうのほども、定さだりけるか、無常むじやうの風かぜに誘さそはれ、只今ただいま冥土めいどへ赴おもひ候う。謠うた住すみなれし、娑婆しゃはの名残なごりを

餌差十王一名  
政頼  
十王一冥府の王  
十あり閻魔はそ  
の一也



清頼一政頼齊頼  
など書く後冷泉  
の朝の人出羽國  
司にて鷹飼の達  
人たり  
餌差一鷹の餌と

なる小鳥を捕る人

興がつたなり  
面白風體

ふりすててく、足に任せて行く程にく、六道に早く著きにけり。詞これははや六道の辻に著いてござる。これより見計ひ、極樂へ参らばやと存する。▲おにはあ、いかう人臭い。さればこそ、罪人が来た。まづこの由申し上げう。如何に申し候。一段の罪人が参りて候。▲えん 急ぎ責め落し候へ。▲おに 畏つて候。如何に罪人。地獄遠きにあらず、極樂遙なり。急けくところ。やいく、汝は常の罪人と變り、興がつたなり。娑婆では何と云うた者ぞ。▲シテ 某は、娑婆に隠ない清頼といふ餌差でござる。▲おに 餌差ならば、明暮殺生して罪が深からう。地獄へ責め落して呉れうぞ。▲シテ いやく、某はさやうに罪の深い者ではござらぬ。極樂へやつて下されい。▲おに いやく、まづ閻魔王へ伺はう。如何に申し候。▲えん 何事にてあるぞ。▲おに 罪人は、娑婆に隠れもない餌差にてあると申すほどに、一入殺生して罪が深くござあらうする間、地獄へ落さうと申し候へば、さやうの者にてなきと申し候が、何と仕らうするぞ。▲えん さあならば、その罪人の、此方へ呼び候へ。▲おに 畏つて候。こりやく、閻魔王の召す。此方へ來り候へ。▲シテ 畏

死出の山—冥途の山

ましろ—ませう

つてござる。▲おに 罪人の召して参り候。▲えん 如何に罪人。汝は娑婆にて明暮諸鳥をさし、大悪人にてある間、地獄へ落さうするぞ。▲シテ 仰御尤に候へども、鳥をさし、鷹と申すものに食はせて養ひ候ほどに、餘り科にてはなく候。▲えん さては、鷹と云ふも、同じ鳥にてあるよな。▲シテ なかく、さやうでござる。▲えん それならば、餘り汝が科でもない。▲シテ 御意の通、鷹が科でござれ、私の科ではござらぬ。極樂へやらせられて下され。▲えん それならば、この閻魔王も、終に鳥と云ふ物の味を知らぬほどに、鳥と云ふ物が、死出の山に澤山にある程に、汝が持った竿でさいて、閻魔王に振舞へ。それなら、汝が望のやうにして取らせうぞ。▲シテ それは何より安い事でござる。さらば、鳥をさいて進上申しませよ。謠いでく諸鳥を差さんとて、地く、死出の山路の南原より、鳥どもあまた飛び來るをば、見るより早く、中にて差いてぞ取つたりける。さらばこの鳥を焼鳥にして進ませましろ。さらば参りませ。▲えん どりやく、食うて見よ。めりよくめりよ。扱もいかう旨い事かな。▲シテ さらば眷屬達も参れく。▲おに 心得たく。めり

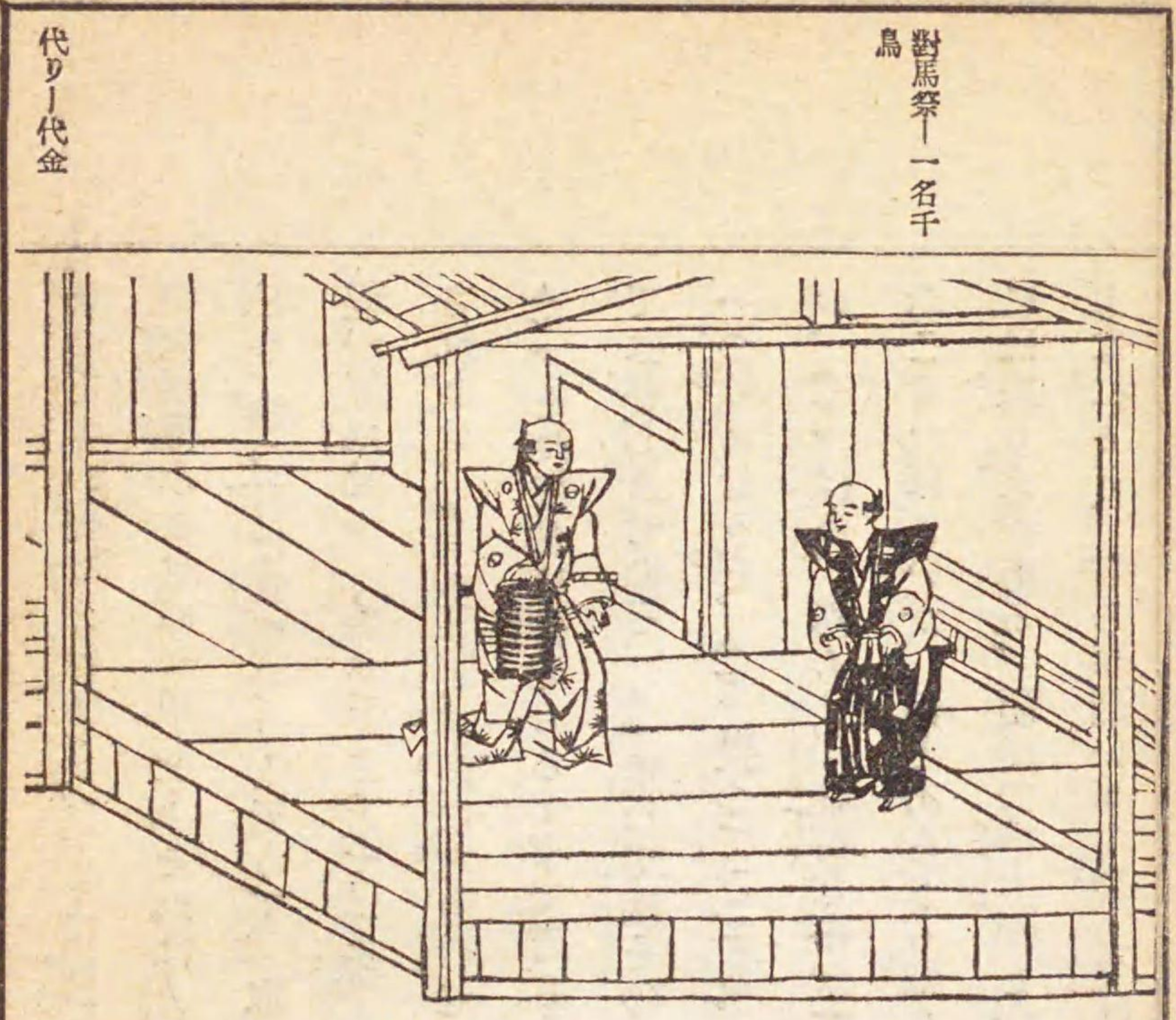
りくく。これはく、旨いことかなく。▲えん扱もく、いかう旨いものぢや。この様な旨い物をくれたほどに、暇を取らするぞ。娑婆へ歸り、三年が間諸鳥をさいて暮らせ。▲シテこれはありがたい事でござります。▲えん誦いでく、暇を取らせんとて、地く、娑婆に歸り、三年が間諸鳥をさして、鶴、雁、雉子、鴨、小鳥も慥に届くべしと、仰を委しく承りて歸りければ、閻魔王も名残を惜しみ、玉の冠を清頼に與へ給ひければ、忝くも頂戴いたし、く、二度娑婆へぞ歸りける。

卷之五

一對馬祭

三人 シテ 半上下、腰帶、扇さす  
 ワキ 長袴、小さ刀  
 アド 長袴、小さ刀

▲主これは、この邊に住居いたす者でござる。俄に客來ござる程に、太郎冠者に、いつもの酒屋へ酒を取りに遣さうと存する。やい、太郎冠者あるか。▲シテはあ、これに居ります。▲主汝を喚び出すこと、別の事でない。俄に客がある。汝はいつもの酒屋へ行て、酒を一樽取つて來い。▲シテ畏つてござる。代物を遣されませ。▲主いや、代りは遣ひ



對馬祭一名千鳥

代り代金



切つてない程に、いつものやうに通で取つて来い。▲シテその義でござる。只今までの通の面が濟みませぬと申して、それはく酒をおこす事ではござらぬ。▲主それは尤なれども、追つ付け算用せうと云うて、取つて来てくれ。頼むぞ。▲シテいやく、唯今まで何程か算用せう、濟まさうと云うて騙しましたによつて、もはや合點しませぬ。代りを遣されませ。▲主身共も手前に有り合せぬ。どうぞ、代りなしに取つて来てくれ。頼むぞ。▲シテそれほどに仰せらるゝ事でござる。なにとぞ致して、随分取つて参りましよ。重ねては存じませぬぞ。▲主重ねてはその時のこと、まづ今日は早う取つて来てくれ。汝にも一つ飲ませうぞ。▲シテ畏つてござる。かう参ります。▲主頼て早う戻れ。▲シテはあ。▲主えい。▲シテはあ。扱もく迷惑な事かな。さりながら、取りに参らずはなるまい。酒屋がおこすればよいが、何とあらうも知らぬ。まづそろりくくと参らう。さりながら、ものには取りえがある。酒屋の亭主がとつと話好きで、その上身共とは合口でござる。今日もなにとぞ、有る事無い事を取り集め話して、そのうちに隙を見て取つて退かうと存ず

る。やあ、参るほどにこれでござる。ものも。内にござるか。▲酒やあ、聞いたやうな聲ぢや。案内とは誰ぢや。▲シテ私でござる。▲酒やあ、太郎冠者、そちに逢ひたうをりやつた。▲シテそれは何ごとでござる。▲酒や何事とは。唯今までの通の埒は何とするぞ。▲シテさればく。けふは持つて来う、明日は算用せうと存ずれど、私がすきと隙なしで、おそなはります。明日は急度算用いたさうぞ。▲酒何時逢うても、何かと云うて埒が明かぬ。必ず明日の違はぬやうにめされ。▲シテもはや違はござらぬ。持つて参らう。▲酒いかにも頼むぞ。▲シテ心得ました。扱、今日参るは別事でござらぬ。頼うだ人が俄に客がある。又いつもの様な、よい酒を一樽詰めて下され。▲酒扱もく、こよな者が言出す事は。今までの算用さへ濟まぬに、その上に又遣らるゝものか。▲シテ身共も定めてさうおしやらうと思つて、今日のばかりは代りを持つて来ました。▲酒何と、今日のは持つて来た。▲シテなかく。▲酒それなら詰めて遣らうぞ。▲シテよい酒を詰めて下され。▲酒心得た。これく、これは随分念を入れ詰めて置いた。餘所へ行く酒なれど、そちが急ぐさうな。

分限一富貴の意

取つて行きやれ。▲シテ過分にこそござれ。何とよう詰りましたか。▲酒なかく。▲シテ扱こなたは、愈仕合でござる。近年こなたの酒がよくなつた。少しでも入るならば、取りに遣らうと、何方でも、この沙汰ばかりでござる。▲酒それは身共も満足ぢや。▲シテ是はこなたの、いよく分限にならせられう瑞相ぢや。▲酒やいく、それは何所へ持つて行く。▲シテまことに、私はいつもの様に通の合點いたした。さらば代りを渡しましよ。▲酒何と見えぬか。▲シテされば、不思議な事でござる。代りを持つて來ましたが、はあ、思ひ出しました。是へ参るとて、帯を仕直しましたが、柵の端に忘れて置いた。取つて参らう。▲酒やいく、とりに行くなら、この樽を置いて取りに行け。▲シテはて氣遣はない。今の間に取つて來ます。▲酒いやく、それでも遣る事はならぬ。こちへおこせい。▲シテはて扱、きつしくな人ぢや。▲酒きつしくなとは、そちは聞えぬ事ぢや。總じて代りがあれば、他所へ取りに行き、又代りがなければ、これへ取りに來る。どうした事ぢや。▲シテいやく、終に他所で酒を取つた事はござらぬ。なぜにさうおしやるぞ。▲酒い

きつしくな人一  
律義者

對馬祭一津島町の牛頭天王の祭也例祭六月十五日神事船上にて催さる

やく、他所で取ればこそ、この十日餘見えなんだわ。▲シテ扱はこの十日餘参らぬを、他所で取ると思召すか。▲酒なかく。▲シテこの間は頼うだ人の御供を致して、尾張の對馬祭を見物に参つた。▲酒それは内々聞き及うだ祭ぢやが、河と面白い事か。▲シテこなたはまだ見ずか。それはく、見ると聞くとは違うた事でござる。面白いともどうとも、云はれた事ではござらぬ。まづ伊勢浦へ参れば、子供が集つて千鳥をふせるが、扱面白ござる。▲酒それはどうした事ぢや。さあく、話して聞かしやれ。▲シテいかにも話しましよ。とてもこのことに、その様子をして見せましか。▲酒それはよかる。仕形でして見しやれ。▲シテ如何にも、して見せませうが、相手が入ります。▲酒それはむづかしいか。▲シテいや、むづかしい事はござらぬ。扇をかざして、こちらを見ぬ様にして、はんま千鳥の友呼ぶ聲は、と仰せらるゝ分でござる。▲酒それほどのことは云はう。さあさあ、早うして見しやれ。▲シテ心得ました。さあ囃させられ。ふせませぞ。▲酒はんま千鳥の友呼ぶ聲は。▲シテちりくちりく。ちりりちりり。ちりりちりり。ちりと

はんま千鳥一濱千鳥の濱をはんまと云ふ山をやんまと云ふ類也

山一山鉾

んだり。▲酒やい〜、その樽は何所へ取つて行くぞ。▲シテいや、真中にあつて妨になる。退けて置かうと思ひます。▲酒いや〜、邪魔になれば己が退くる。こちへおこしやれ。何とこれはこの分か。▲シテなか〜、この分でござる。▲酒これはあまり面白くない。▲シテいや〜、この次に對馬祭が面白うござる。まづ山を作り、船に載せ、片端から押す。引く。囃子物には鼓、太鼓、鉦で囃し立つる。扱々面白いこととござる。▲酒それは面白かる。さあ〜、して見せい。▲シテなるほど、して見せましよ。これにも對手が入ります。こなたは扇擴ろけて、ちやうさようさあと仰せられ。▲酒心得た。云はうぞ。▲シテ幸ぢや。此樽を山にして引きましよ。樽を卷いた繩がある。さあ〜囃させられ。引きますぞ。▲酒囃すぞ〜。ちやうさ、ようさ。▲シテえいとも〜なあ。▲ちやうさ、ようさあ。▲シテえいとも〜なあ。▲酒やい〜、それは何所へ取つて行く。▲シテこれは小路へ引き入れた所でござる。▲酒いや〜、どうやら樽を取つて去なうとする。面白くない。▲シテそれはこなたの氣が廻つてぢや。▲酒何と、これもこの通か。

面白こと面白ることの誤なるべし

して退き居つたしては巧に騙しての意

▲シテなか〜。この分でござる。▲酒それなれば、是も面白くない。もはや面白ことはないか。▲シテこの次に、流鏝馬と云うて、馬に乗つて駈ける内に、的を射ることとござるが、なか〜面白うござる。▲酒さあ〜、その面白い事が見たい。して見せい。▲シテして見ませうか。これも相手が入る。こなたは先へ廻つて、馬場退け〜と云うて、馬場な人を退けさせられ。身共が馬に乗つて、御馬が参る〜と云うて駈けますぞ。▲酒心得た。さあ〜馬に乗れ。▲シテこれに竹がござる。竹馬に乗りませう。さあ乗りました。▲酒馬場退け〜。▲シテ御馬が参る〜。▲酒馬場のけ〜。やい〜、それは何所へ取つて行く。▲シテこの樽か。▲酒なか〜。▲シテ御馬が参る〜。▲酒これはさて、又して退き居つた。横著者、遣るまいぞ〜。▲シテ御馬が参る〜。

二 蛸たこ

三人  
シテ 頭巾、腰帶、扇持  
ワキ 頭巾、水衣、半袴  
アヒ 長袴、小刀

▲ワキ 次第茶がはりもなき往來の、く、行末何となるらん。詞これは筑紫方より出でたる僧にて候。われいまだ都を見ず候程に、路次すがら鉢を開き、都へ上らばやと存じ候。謠筑紫人、空言するとや思ふらん、く。われはまことの修行にて、しみづのうらに著きにけり。詞急ぐ程に、この所は清水の浦と申すけに候。▲シテなうく、あれなる御僧に申すべきことの候。▲ワキこなたのことにて候か、何事にて候ぞ。▲シテこれは、こぞの春みまかりたる蛸の幽靈なり。かまへてくよくくお弔ひあれと、かきけすやうに失せにけりく。▲ワキあまり不思議なる事にて候間、所の人に尋ねばやと存ずる。所の人の御入り候か。▲問所の者と御尋は、如何やうの御事にて候ぞ。▲ワキ近頃、聊爾なる申

鉢を開き一評鉢  
 すること  
 筑紫人空言す  
 此謠曲藍染川  
 にも出づ  
 清水の浦一駿河

し事にて候へども、去年の春の頃、この所にて、蛸など御取りありたることはなく候か。▲問なかく。去年の春のころ、この浦へ大蛸の上りたるを、この浦の者ども寄り合ひ、賞翫仕り候處に、その蛸を引き上げたる者共に祟をなして候間、これなる標を立て置き、弔ひ申し候が、何と思召し御尋にて候ぞ。▲ワキ尋ぬること、別のことにもなく候。某この所に著きて候處に、いづくとも知らず、愚僧に申すべきこと候と申すほどに、其方を見申して候へば、去年の春の頃みまかりたる蛸の幽靈なり、跡をとひてたべと申し、搔消すやうに失せて候間、こなたへ不審申すことにて候。▲問それは疑ふ所もなき、蛸の幽靈なるべし。御僧も逆縁ながら、弔うて御通りあれかしと存じ候。▲ワキさあらば逆縁ながら弔うて通らうするにて候。▲問又御用のこと候はど、重ねて仰せられ候へ。▲ワキ頼みましょ。▲問心得ました。▲ワキ詞色扱も幽靈蛸の丞が、佛事は様々多けれど、心經をもつて弔ひけり。あのくたこ三百三錢で買うて、佛にこそは手向けけれ、く。なまだこくく、なまんだこ。▲シテあよらありがたの御弔やな。あらありがたや候。▲ワキふ

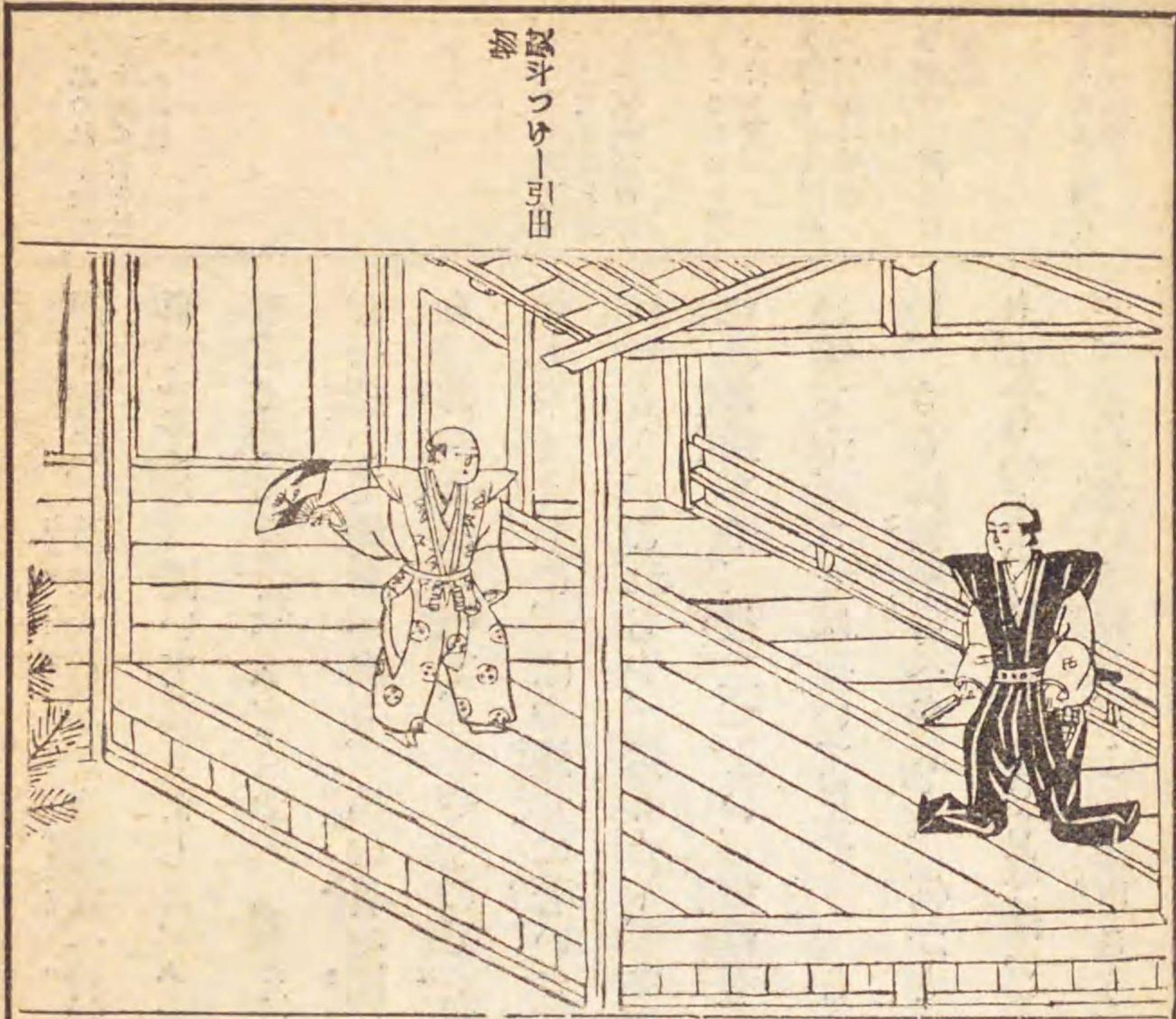
心經一般若心經  
 あのくたこ一阿  
 耨多羅三藐三菩  
 提のもどり  
 なまだこ一南無  
 阿彌陀佛のもどり

しぎやな。人家も見ゆる晝中に、人かと思へば人でもなし、如何なるものぞ名を名乗れ。▲シテこれは、最前御僧に言葉を交したる蛸の幽霊なるが。御弔のありがたさに、これまで現れ出でて候。▲ワキさては蛸の幽霊なるか。最期のありさま語り候へ。尙々後を弔ひ候べし。▲シテさあならば最期のありさま語り申さん。後をとって給はり候へ。詞扱もわれこの浦に年久しく住んで、獵師の網を彼方此方遁れしに、去年の春は、大網を沖の方より置きまはし、遁れもやらで引き上げられ、削りたてたる俎の上に引き据ゑられて、後より、地く、庖丁を押當てらるれば、眼もくらみ息つまつて、うつぶしに押伏せられて、頭をはいてぞふしたりける。▲シテ而して起き上がれば、地く、或は四方へ張蛸の、照る日にさらされ、足手をけづられ、鹽にさよれて隙もなき、苦みなるを、妙なるみのりの、庭に出て、佛果に至るありがたさよ。唯一聲ぞ、南無阿彌陀佛。只一聲ぞ、なまだことて、かきけすやうにぞ、失せにける。

三鐘の音

二人  
主 シテ 半袴、腰帶  
長袴、小さ刀

▲主 これは、相摸の國三浦に住居致す者でござる。某は世倅を數多持つてござるが、どれくも、殊の外成人いたしてござるほどに、元服をさせ、その上、鬘斗つけに刀を拵へて取らせうと存する。まづ太郎冠者を喚び出し、申し付くことがある。やいく、太郎冠者あるか。▲シテはあ、お前に居ります。▲主 汝を喚び出すこと別の事でもない。汝が知る如く、世倅どもが殊の外成人した。此度名をもかへ、又鬘斗つけに、刀を作つて取らせうと



鬘斗つけ引出物

かねのね—金の値と鐘の音と取違ふる也

五大堂—明王院又は大行寺と云ふ將軍賴經の祈願所  
なりのよい—形の好き意  
壽福寺—五山の—開山は榮西  
極樂寺—開山は良觀  
じやもふ—鐘の音の形容

思ふ程に、汝は大儀ながら鎌倉へ行て、かねのねを聞いて來い。▲シテこれはおめでたい事でござる。聞いて参りましよ。▲主その儀なら、はやう行て來い。▲シテ畏つてござる。▲主頼て戻れ。▲シテはあ。▲主えい。▲シテはあ。やれく、俄な事を仰せつけられた。まづ急いで鎌倉へ参り、鐘の音を聞いて参らうと存ずる。扱もく、めでたい事でござる。御成人なされて、かやうに刀を作つて遣さるよは、めでたい事でござる。やあ、何かと申すうちに、はや鎌倉に著いた。まづ、どれから先へ参つて聞かうぞ。まづ五大堂へ参らう。これぢや。扱もく、なりのよい鐘かな。さらば撞いて見やう。くわん。これは破鐘ぢや。役立つまい。壽福寺へ参らう。はやこれぢや。いかさま、是もなりのよい鐘ぢや。さらば撞いて見やう。こん。はあ、これは餘り固い音ぢや。これではなるまい。さらば極樂寺へ参らう。何かと云ふうちにこれぢや。扱もく、これはどれくよりのなりのよい鐘ぢや。さらば撞いて見やう。じやもふもうく。はあ、これがよい音ぢや。まづ急いで歸り、この通申さう。定めて頼うだ人の待ちかねてござらう。やあ、こ

れぢや。申しく、頼うだお方がござりますか。太郎冠者歸りました。▲主やあ、太郎冠者が戻つたさうな。太郎冠者戻つたかく。▲シテ唯今歸りました。▲主何とく、かねの音を聞いて來たか。何程するぞ。▲シテされば、まづ私も五大堂へ参り、聞いて見ましたが、何とやら破鐘の音でござる。これはなるまいと存じ、壽福寺へ参り、聞いて見ましたが、是は殊の外固い音でござるほどに、これでも役に立つまいと存じ、極樂寺へ参り、聞いて見ましたが、これがなるほど訝えたよい鐘でござる程に、極樂寺の鐘になされたらようござらう。▲主これはく、苦々しいことかな。刀を黄金作りにして取らすほどに、鎌倉へ行て、黄金の値を聞いて來いと云ひ付けたに、おのれ撞鐘のことを誰が聞いて來いと云うた。▲シテそれなら黄金と、初めからおしやつたがようござる。▲主まだそのつれな事を云ひ居るか。あちへうせい。▲シテこれは如何なこと。身共の存じたとは格別違つた。▲主扱もく、憎い奴でござる。彼奴が様な奴は、せめて撞鐘の音なりと聞いて、うせたらようござる。それも鎌倉へも行きも致さず、参つたと申すやら知れますまい。様

入相鎌倉へ入ると云ふを鐘の縁にて入相と續けたり  
建長寺一五山の師  
一開山は大覺禪

子を尋ねうと存する。やい其處な奴。おのれ鎌倉へ行たが定ならば、こゝへ來て、様子を云うて聞かせい。▲シテ 畏つてござる。とてもものことに、拍子にかよつて申しましたよ。謠まづ鎌倉につうと入相の鐘これなり。東門にあたりては、壽福寺の鐘これなり。諸行無常と響くなり。南門にあたりては、五大堂の鐘これなり。是生滅法とひどくなり。扱西門は極樂寺、これ又生滅々爲の心、北門は建長寺、寂滅爲樂と響き渡れば、いづれも鐘の音聞きすまし、急いで上るか、また立ち歸り、子持が方への土産にせんと、紅皿一つ買ひ持ちて、急いで上る心もなく、さもあらけなき主殿に、そくびを取つて撞鐘の、そくびを取つてつき鐘の、ひどきにはなをぞなをりける。詞 これも鐘の威徳でござる。▲主 何でもないこと、あつちへうせい。▲シテ はあ。▲主 えい。▲シテ はあ。

四 腰 祈

三人 シテ 兜巾、篠懸、水衣、珠數持  
祖父 頭巾、腰帶  
冠者 半上下、腰帶

▲シテ山伏 貝をも持たぬ山伏が、く、みちくうそを吹かうよ。詞 これは、出羽の國羽黒山より出でたる山伏でござる。某 大峯葛城山の役目を相勤め、只今本國へ罷下る。まづ急いで參らう。又こゝに身どもの祖父御を持つてござるが、久々見舞ひませぬ。此度は見舞はうと存する。總じて山伏と申すは、難行苦行をいたすによつて、行力さへ達すれば、忽ち飛ぶ鳥も祈り落す事でござる。やあ、はやこれぢや。まづ案内を乞はう。ものも。案内もう。▲冠者 表に案内とある。何方でござる。▲シテ いや、身共ぢや。▲冠者 やあ、郷の殿でござるか。ようこそお出なされました。ひさしく御目にかよりませぬが、御息災でおめでたうござります。▲シテ それく、わごりよも無事で一段ぢや。何と祖父御には

郷の殿山伏の未だ部屋住にて院號などなきを云ふとぞ

御無事でござるか。▲冠者なかく、御息災にござります。明暮こなたの事ばかり、仰せ出されまますぞ。▲シテさうである。まづ御目にかよりたい。身共の参つた通をおしやれ。▲冠者畏つてござる。その通申しましょ。それにござりませ。申し祖父御様、郷の殿の御見舞なされてござる。▲もほぢ何と云ふぞ。今日はよい日和ぢやと云ふか。▲冠者いや、さやうではござりませぬ。郷の殿の御見舞なされてござる。▲もほぢ何と云ふぞ。郷の殿が見舞つた。身どもは、もはや年寄つたれば腰が痛い。床几をくれい。▲冠者畏つてござる。お床几でござる。▲シテ申し祖父御様、郷の殿が御見舞ひ申しました。▲もほぢ何ぢや。郷の殿が見舞つた。わごりよはどち風が吹いて見舞はしました。あの、郷の殿は、飴が好きであつた。飴をとらせ。▲シテまだ身どもが幼少の時のことを、忘れずに仰せられます。私も、毎年々々大峯葛城の山の役を相勤めますにより、一圓暇を得ませいで、御見舞も申しませぬ。やあ太郎冠者、見れば祖父御の腰が殊の外屈うだが、あれは何時もあれか。▲冠者なかく、何時とてもあの如くでござる。殊の外屈ませられて、御苦勞

どち風が吹いて  
いかなる風の  
吹廻して也

なと仰せられます。▲シテさうである。あれは御苦勞にある。身どもが日頃の行力で、あの腰を祈り直して進ませうとおしやれ。▲冠者畏つてござる。申し祖父御様、郷の殿の仰せられますは、こなたの御腰が屈ませられて、御苦勞に見えます。行力をもつて祈り直して進ませましょと仰せられます。▲もほぢ何と云ふぞ。この祖父が腰を、郷の殿が行力で、祈り直さうと云ふか。▲冠者さやうでござります。▲もほぢなにとぞ行力で直ることなら、祈つてくれさしめ。▲シテ畏つてござる。追付祈りまして、よう致して進ませましょ。それ山伏と云つば、山に起き臥すによつて山伏なり。兜巾と云つば、布切一尺ばかり黒く染め、髷を取りて戴くによつての兜巾なり。又この珠数は、苛高にては無うて、むざとした珠數玉を繋ぎ集め、いらたかと名づく。かほど貴き山伏が、一祈祈るものならば、などか奇特の無かるべき。ほろおんく。いろはにほへと、ほろおんく。何とく太郎冠者、奇特を見たかく。▲冠者扱もく奇特千萬、驚き入りましてござる。▲もほぢやいく太郎冠者、久しうて月星を拜うで、この様な嬉しい事はない。あゝ嬉し

奇特一覽

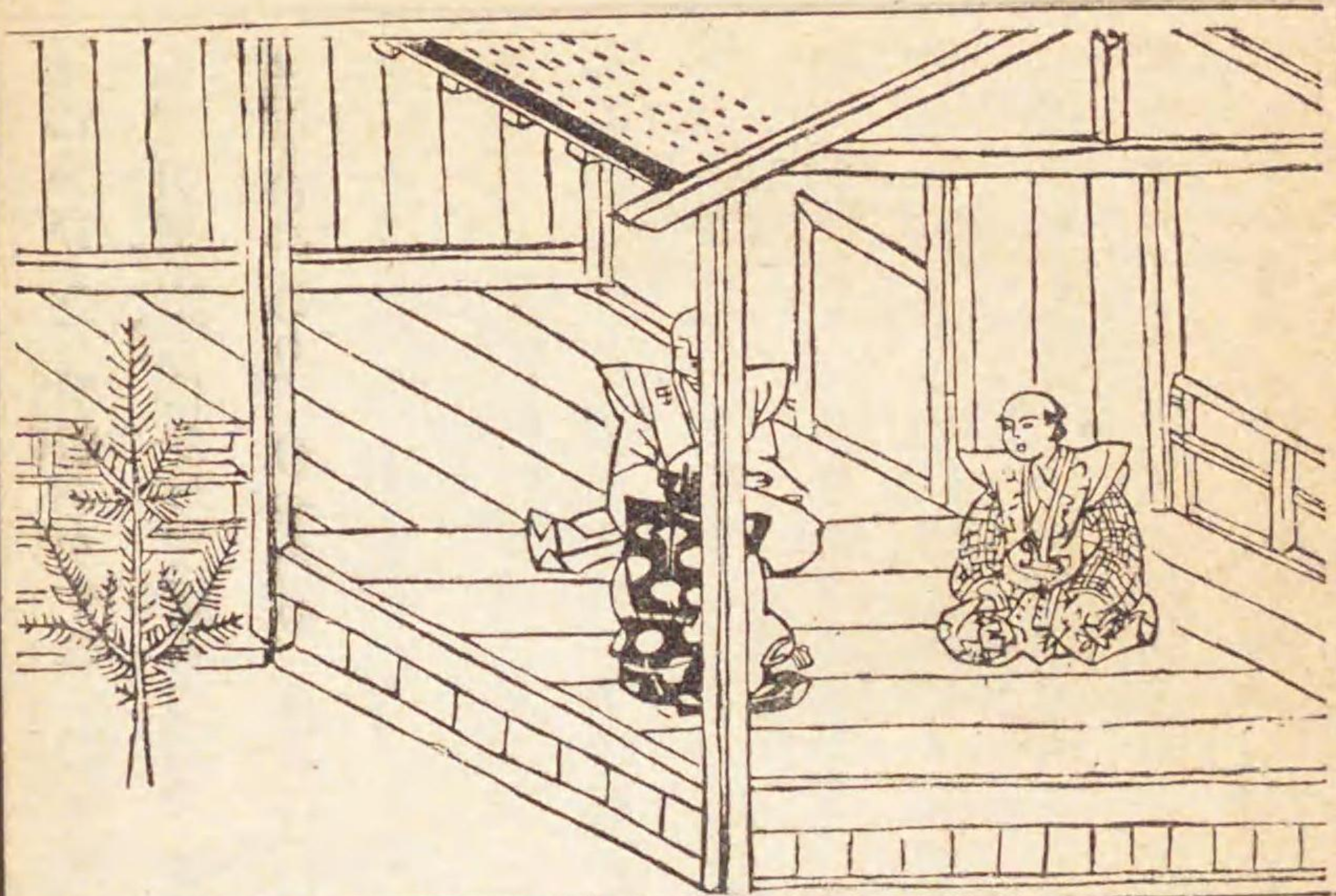


加持祈禱

やく。▲冠者申し、殊の外御機嫌でござります。▲シテいかにも、身共も満足ぢや。  
 ▲もほぢやい、太郎冠者。これは何時までかうして置くことぢや。▲シテ何時までも、  
 こなたの一生さやうでござります。▲もほぢなう、輕忽やく。此様にして一期居らる  
 るものか。元の様にして返せと云へ。太郎冠者。▲冠者申し、只今語られたを御聞き  
 なされましたか。▲シテなるほど聞いた。餘り身どもが行力が強さに、祈り過ぎた。こん  
 どは後から祈つて、よい加減にして進ぜう。▲冠者申し、この度は後から祈つて、よ  
 い加減にせうと仰せられます。▲もほぢ早う祈れ。▲シテさらば祈らう。行者は加持に  
 參らんと、役の行者のあとをつぎ、苛高珠数をおし揉んで、も一祈祈るなら、などか奇  
 特のなかるべき。ほろおん。橋の下の菖蒲は、誰が植ゑた菖蒲ぞ。ほろおん。  
 これは、又祈り過ぎた。▲もほぢやい、郷の殿は、祖父を見舞には來いで、蹴りに來  
 たと見えた。元のやうにして返せと云へ。あゝ悲しやく。▲シテこれ、太郎冠者、こ  
 れはまた祈り過ぎたと云へ。某が行力が強さぢや。又前から祈らうほどに、汝は後から

よいかけんに突張をかやれ。▲冠者畏つてござる。▲シテ如何に悪心の深い祖父の腰なりと  
 も、明王の索にかけて祈るなら、などか奇特の無かるべき。ほろおん。  
 ▲三人ひやあり、ひやあり、ほつばい、ひやろ、ひい。

地頭一莊園の領主



五 佐渡狐

三人 シテ 半上下、腰帶  
奏者 長袴、小き刀  
アド 半上下、腰帶

▲アド 罷出でたる者は、越後の國の百姓でござる。毎年都の地頭殿へ、御年貢を納めに上ります。只今もいつもの如く、上らうと存ずる。まづ急いで参らう。まことに、この如く相變らず上るは、めでたい事でござる。▲シテ これは佐渡の御百姓でござる。毎年都へ御年貢を納めに上ります。當年も上らうと存ずる。やれ〜いつも相變らず、この如くに上るは、めでたい事でござる。▲アド やあ、こ

れに似合うた道連が参つた。言葉をかけ同道いたさう。なう〜、これ〜。▲シテ やあ、こちらの事か。何事でをりやる。▲アド なか〜、そなたの事ぢや。わごりよは、どれから何所へ行かします。▲シテ 身共は、佐渡の國の百姓でをりやるが、都の地頭殿へ、御年貢を納めに上るわ。▲アド それは一段の連ぢや。身共は越後の國の百姓ぢや。身共も都へ年貢を納めに上る。いざ、同道いたさう。▲シテ それは似合うた連ぢや。いざ同道致さう。まづ、さきへお行きやれ。▲アド それなら、身共が先ぢや程に、参らうか。▲シテ なか〜。行かします。▲アド さあ〜、をりやれ〜。▲シテ なか〜。参る〜。▲アド なう〜、世間には似合うた連もある、似合はぬ連もあるが、そなたと身共のやうな連は有るまいぞ。▲シテ いかにもその通でをりやる。あはれ御館も一つ所であれかしの。▲アド さうでをりやる。歸りにも又同道して下らうもの。やあ何かと云ふ内に、身共の御館はこれでをりやるわ。▲シテ 扱はこれか。身共が御館はとつと上ぢや。▲アド それなら、これで御暇申さう。下りには最前の所で待ち合せて、又同道して下らうぞ。▲シテ なか〜、さやうに致

さう。▲二人さらばくく。▲シテとは云うたが、身共の御館もこれでをりやる。▲アドは  
て扱わりよは、戯言をいふ人ぢや。扱お奏者は決つてあるか。時の上りさします  
か。▲シテいかにも、時のお奏者でをりやる。▲アドそれなら、そなたから上げさしませ。  
▲シテ心得てをりやる。ものもうく。▲奏者何者ぢやく。▲シテはあ、これは佐渡の國の  
御百姓でござる。毎年の如く御年貢を納めます。上へはお奏者の御心得をもつて、よろ  
しう仰せ上げさせられ下されませ。▲奏いかにも聞き届けた。お藏の前へ納めませい。  
▲シテはあ、畏てござる。さらくく。なうく。越後の、居さしますか。▲アドなかく、こ  
れに居ます。▲シテ身共は上げた。そなたも上げさしませ。▲アド心得た。さらば上げう。も  
のもうく。▲奏何ぢやく。▲アドはあ、これは越後の國の御百姓でござる。いつもの如  
く、御年貢を納めます。▲奏ようこそ持つて参つた。御藏の前へ納めませい。▲アドはあ、畏  
つてござる。さらくく。なうく。上げてをりやる。▲シテそれは一段のことでをりや  
る。▲奏申し上げます。兩國の百姓、毎年の如く御年貢を納めます。あゝその通申し渡し

ましよ。やいく。兩國の百姓ども。▲二人はあ。▲奏仰せ出さるよは、毎年々々相變らず  
御年貢を納めますとあつて、上にも殊の外御機嫌ぢや。いよく又來年も、早々納めに  
のほりませい。▲シテはあ、畏つてござる。▲奏又いつは下されねど、御通を下さるよぞ。  
▲二人はあ、有難うござります。▲奏さあく、これへ寄つて飲め。身共が酌をするぞ。▲二人  
これは慮外でござります。これは有難い仕合でござります。それならもはや御暇申しま  
す。又明年参りましよ。▲奏なかく。明年相變らず参りませい。▲二人はあ、有難うござり  
ます。▲シテさあく、をりやれく。いざ下らう。▲アドなうく、何と當年はよい首尾で  
をりやるの。▲シテなかく。残るところもない、よい仕合でをりやる。▲アドそれにつ  
き、わごりよに尋ぬる事があるわ。▲シテ何事でをりやる。▲アドそなたの國の佐渡は、最  
もよい國なり。何不足もないが、狐が無いと云ふが、定か。▲シテいやく。それは虚言ぢ  
や。なるほど居りやる。▲アドいやく。確か無いと聞いたが、有るが定か。▲シテなかく、  
有るわ。▲アドそれなら狐は、どの様な物ぢや。▲シテはて、狐は犬のやうな物ぢやわ。▲アド

かけるく一賭祿也勝負事に何物かを賭けにする也

すれば、有るにきはまつたが、さりながら、犬とは違うた所があるが、知つて居やるか。  
 ▲シテなかく、存じた。まづ顔が犬より細長うての。▲アドいかにも。▲シテ尾がふつさり  
 として。▲アドそれく、これも合うた。扱はよう合うたが、有るが定か。確に佐渡には無  
 いと聞いたが合點いかぬ。やあ思ひつけた。尋ねる事がある。これく。▲シテ何事ぞ。  
 ▲アドどうでも、無いにきはまつた。何とかけるくにして、有るが定なら、身どもも國に牛  
 を持つたほどに、これをそちへ遣らう。又無いならば、そなたも牛があらう、おこしや  
 れ。▲シテいかにもさう致さう。違はないぞ。▲アド必ずその極めでをりやるぞ。▲シテさ  
 やうでをりやる。▲アドそれなら、問ふ事が一色あるわ。狐があるなら、狐の啼く聲は何と  
 云うてなくぞ。▲シテはてさて狐は、ものと云うて啼くわ。▲アド何と。▲シテまづ、それに待  
 ちやれ。はあ、何とやら云うて啼くが。▲アドこれく、早うおしやれ。何と啼くぞく。  
 ▲シテはあ、思ひ出した。物と啼くわ。▲アド何と。▲シテ物と。▲アド何と。▲シテちよくわいと  
 啼くわ。▲アドそりや違うたぞ。そちが牛を取るぞ、く。▲シテあよ許してくれ。牛は遣

る事ならぬぞく。▲アドいやく、どうでも牛を取るぞ。やるまいぞく。

六 八尾地藏

二人

シテ 鬼頭巾、半袴、杖つき出る  
アド 頭巾、白水衣、半袴

八宗九宗一八宗  
は律俱舎成實法  
相三論華嚴天台  
眞言也禪を加へ  
て九宗となる  
ぞろめく一歩き  
行くこと  
がしん一餓死

▲シテ 地獄の主閻魔王く、邏齋にいざや出うよ。詞これは地獄の主閻魔王なり。扱も、今は人間が利根になつて、八宗九宗に法を分け、彌陀の淨土へ、ぞろくとぞろめくにより、地獄のがしん、以ての外。それ故只今この閻魔王が、六道の辻へ罷出で、罪人が來つてあらば、地獄へ責め落してくれうと存する。謠 住みなれし、地獄の里を立ち出でて、く、足に任せて行くほどに、く、六道の辻に著きにけり。詞 急ぐ程に、こればはや六道の辻でござる。まづこの所に待つて、罪人が來らば、一責責めて責め落さばやと存する。▲罪人 罪科もなき罪人を、く、誰かは寄つて責めうよ。詞これは河内の國八尾の近所に住居致した者でござる。某 不圖無常の風に誘はれ、只今冥土へ赴く。そろりくと參らう。▲シテ あら、いかう人臭い。されば罪人が來た。地獄へ責め落

八尾の地藏一初  
日山常光寺本尊  
小野眞作地藏菩薩

えんもじ一閻魔  
の頭字を女房詞  
にて書く

南瞻部洲一南閻  
浮提に同じ須彌  
山の南の國なり  
みたむなかる一  
見ともなからう  
にて容貌の醜き  
意

してくれうぞ。いかに罪人、急げくとこそ。やい、汝がその差し出す物は何ぢや。▲罪人 是は娑婆に隠れもない、八尾の地藏よりの御文でござる。見させられい。▲シテ さればその古、この閻魔も地藏と懇したによつて、その文をば用るたれど、今は地獄もがしんぢやによつて、用るる事はならぬ。今一責責めてくれうぞ。いかに罪人、地獄遠きにあらす、極樂遙なり。急げくとこそ。やい、汝は餘り文を差出すほどに、見てとらせう。まづ床几くれい。▲罪人 心得ました。▲シテ その文をおこせ、見やう。さあ、汝も是へ寄つて、ともぐくに讀め。▲罪人 心得ました。▲シテ まづ言上書を見やう。えんもじ様參る、地よりと書かれた。これはまだ古のことを忘れずに、書いておこされた。▲二人 謠 そもく、南瞻部洲、河内の國八尾の地藏の爲には旦那、その名を又九郎と申せし者のためには、この罪人は小舅なり。扱は汝は又九郎が小舅か。それならば又九郎が女房も推量した。汝に似たらば、みたむなかる。▲罪人 いや、私は似ませぬ。美しくござる。▲二人 小舅なり。われを信じて月詣で、佛供をそなへ歩を運べば、我が爲一の旦那

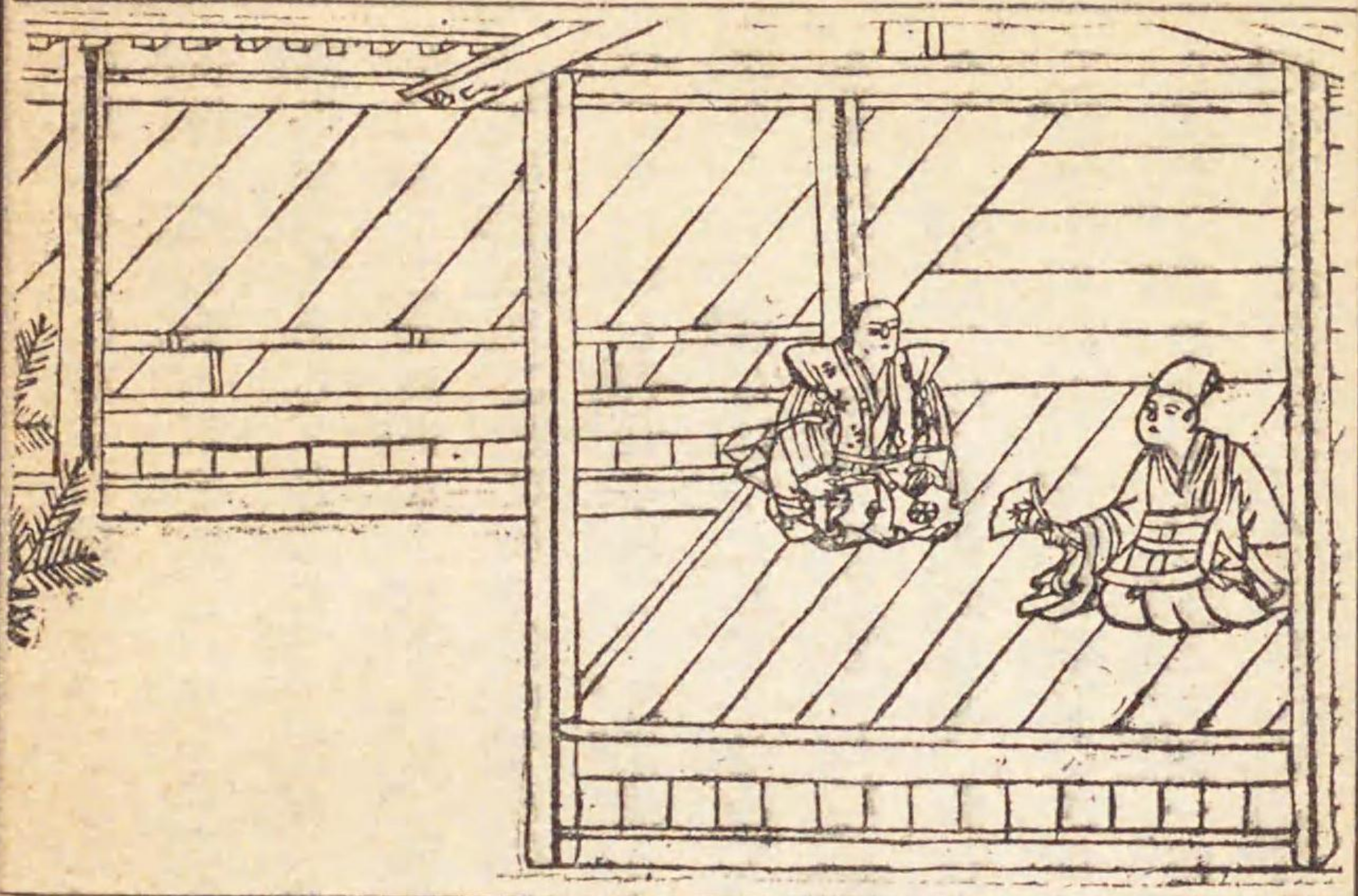
九品極樂往生の等級にて上中下の三品に各上中下の三生あり上品上生が最上也  
がうけばつたる剛け張りたるか強力の意なるべし

那なり。しかるべくは閻魔王、この罪人の、九品の淨土に送り給へ。それもならずは、地獄の釜をば蹴破るべし。おう、がうけばつたる罪人かなく。▲シテこの上は力なし。▲二人この上は力なしとて、罪人の手を執つて、閻魔王の案内者にて、九品の淨土へ送り給ひ、それより地獄へ歸りしが、又立ち歸り、さるにても、あら名残惜しの罪人や、くとて、鬼は地獄にかへりけり。

布施ない一名  
布施無と經

常齋一朝の食事

勤一讀經



七 布施ない

二人 シテ 頭巾、袈裟、衣、珠數持  
アド 長袴、小さ刀

▲シテこれは、當寺の住僧でござる。今日は誰どのと申す方へ、常齋に參る筈でござる。參らうと存する所に、又さる初めてのお方から、參つてくれいと仰せられ、餘儀無うてこれへ參り、只今歸りました。常齋のこととござる。定めて待ち兼ねてござらう程に、只今からなりとも參り、勤ばかりなりと致して歸らうと存する。又これへ參れば、定めて鳥目十疋づつの布施物を下さるよ。一つはこの下心もござり、まづ、そろく參らう。まこと

非時—午後の食事  
貧僧の重ね齋—  
諺

に思ふやうにならぬ世の中でござる。どちらぞを非時にすればようござるに、ちやうど貧僧の重ね齋と申すが、これでござる。参るほどにこれぢや。ものもう。案内もう。▲アド表に案内とある。どなたでござる。▲シテいや、私でござる。▲アドやあ、お住持様でござるか。ようこそお出なされました。今朝は待ち兼ねて居りました。▲シテさうでござらう。私も常齋のことなり、参らうと存する所に、さる初めてのお方から、是非とも齋に参つてくれいと仰せられて、餘儀無うこれへ参り、只今歸りました。定めて待ち兼ねてござらう。遅なはつたれど、せめて、勤ばかりなりと致して歸らうと存じ、参りました。▲アドようこそお出なされました。御勤をなされて下され。まづかうお通りなされませ。▲シテ心得ました。通りましょ。申し、こなたには、何時参つても持佛堂を綺麗にして置かせらるよ。奇特な事でござる。▲アドいや、さやうにもござりませぬ。▲シテさらば勤を始めましょ。如是我聞一時佛在須菩提王、三千大千世界。やあ、日外は見事な花を下されました。▲アドされば、進せましたが、御役に立ちましてござるか。▲シテ折節寺

奇特—神妙

に容がござつて、佛前にたてましたれば、扱も見事な花ぢやと云うて、皆褒物でござつた。▲アドそれは役に立ちまして、満足に存じます。▲シテさらやく。佛説功德布施且息災延命。詞やあ、あの花は庭前にござるか。またどれからぞ貰はせられたか。▲アドいや、私の庭前にござります。▲シテそれなら、あの花の種を貰うて植ゑましょ。▲アドいかに進せましょ。▲シテ必ず忘れさせらるよな。▲アド心得ました。▲シテ經南無きやらたんのふとらやく。もはや勤をばしましました。かう参ります。ちと寺へもお出なされ。▲アド畏つてござる。参りましょ。▲シテさらば。▲アドようござりました。▲シテこれは如何なこと。お布施の沙汰がない。忘れられたものであらう。但し今日は遅う参つたによつて、くれられぬか知らぬ。いや、このやうな事は、必ず例になりたがるものぢや。教化にこと寄せて取つて参らう。申し、ござるか。▲アドやあ、これはまだお歸りなされませぬか。▲シテいや、もはや歸りますが、何時ぞはこなたに教化を致さうくと存じますれど、終に教化致したこともござらぬ。何と、今日はお暇ではござらぬか。

教化—説教

▲アドなか〜。暇ひまでござる。忝かたじけなうござる。教化けうかなされて下されませ。▲シテそれなら、まづ通りましょ。▲アドお通りなされませい。▲シテ扱けうけ教化と申して、別べつして格別かくべつな事もござらぬ。まづ人間じんけんの果敢はかないことを申さば、電光でんくわう、朝露てうろう、石の火、風の前の燈火とうび、朝顔あきがほの花はななどにも喩たとへおかれてござる。朝顔あきがほの花と申すものは、御存ごぞんじでござらう、早朝さうてうに開ひらき、日の出でれば濁しほみ、夕ゆふべにははらりと落おつる、果敢はかない物でござる。▲アドなか〜。左様さやうでござります。▲シテまだ朝顔あきがほの花は、朝開あさひらけ夕ゆふを待まつ、樂たのしもござる。人間じんけんの果敢はかないことを申さば、出る息い、入る息いを待またぬ世よの中でござる。果敢はかないことのでござる。▲アド最もつと左様でござります。▲シテ又佛説ぶつせつにも、傳法でんほふせんと欲ほつせば、供佛くぶつ、施僧せそう、捨身しゃしんの専もつほらとせよ。雲くもとなり雨あめとなる不晴ふせい々々の時ときと、説ごかせられた。かう申しては合點がてんが参まるまい。これを一夕やほら和やけて申す時は、傳法でんほふせんと云ふは、よき法はつを傳つたへんと思はど、佛ほつに佛具ぶつぐを供そなへ、施僧せそうと申して、我等われら如ごときの貧僧ひんそうに、何なんでも施ほこすを施僧せそうと申す。又捨身しゃしんを専もつほらにせよと云ふは、身みを捨すつると書いた字じぢや。さういうて、この身みを淵河ふちかはへ持つて行いて、

不晴—布施ほしをきかす

捨すてるではない。唯世たを厭いとふと厭いとはぬ事ぢや。後世ごせのことならば、身みも命いのちも惜をしまず、財さい寶ほうも擲なげつて後世ごせを願ねがへと云ふ事ことでござる。又雲くもとなり雨あめとなる。これは世間せけんにある事ぢや。或あるひは只今ただいままでこれをあの人に何程なんぢやうやらうと思おもうたを、不圖ふと惜をしいと思おもうてやらぬ心こころが出來できる。その惜をしいと思おもふ心の出來できたところが、晴天せいてんに叢雲むらぐものかよつたやうに、雲くもとなり雨あめとなりでござる。▲アド尤もつとでござります。▲シテ何なんと、合點がてんが行いきましたか。▲アドなか。合點がてん致いたしました。▲シテ又不晴ふせい々々の時ときと申すは、晴はれやらす、晴はれやらぬ時ときと云ふことことでござる。唯今ただいまも申ますごとく、彼かの遣やるものは、さらり〜とはれやり、又取とるものもさらり〜と取とつて、とかく晴はれやつたがようようでござる。又先さきの貴もろふ者の身みになつて見たみたがようようでござる。いつも、物ものを何なん歎なげくれらるらるよが、今日けふは忘わすれられたか、但たゞし惜をしいと思おもうてかと、心こころに千萬せんまんの罪つみを作る。すれば大きな科しがぢや。その科しがを作る者の科しがではござらぬ。いつも遣やる物ものをやらぬによつて、とやかうと作つくる故ゆゑ、皆みなそのやらぬ者の科しがになります。とかく遣やる物ものは、さらり〜と晴はれやらしやれ。▲アド畏おそつてござる。▲シテまづ



遇ふ時は云々！  
出典未詳

参らぬ一酒を飲  
まぬ  
こんりー嫌離歎

教化と申すも、これまででござる。又寺へも御出なされ。重ねて教化いたしましたよ。合  
 點が参つたの。▲アドなかく、合點いたしました。▲シテ合點が行けばようござる。さら  
 ばかう参らう。なうく、不圖おもひ出した。或歌にもござる。遇ふ時は、語りつくす  
 と思へども、別となれば残る言の葉と、申して、遇ふ時には忘れて居て、必ず別になれ  
 ば、何を云はうもの、いや、ものを遣らうものと思ふものぢや。何も忘れさせられた事  
 はござらぬか。▲アドいやく、何も忘れは致しませぬ。もはや御歸りなされますか。▲シテ  
 さらばでござる。▲アドちと御酒でも参つてござりませぬか。▲シテはて扱こなたは、氣を  
 つけさうなことには附けはせいで、身共がどこに酒を飲みます。▲アドまことに参らぬを  
 忘れしました。▲シテもはや参る。▲アドござりまするか。ようござつた。▲シテはあ、これは如何  
 なこと。今のほどに手を執つて引き廻はす様に云うても、合點しられぬ。何とせう。合  
 點しましたくとあれば、何を合點した知らぬ。扱も是非もないことかな。いやく、  
 もはや思ひ切らう。まことに受けこひぬれば、こんりいたす。受けこはぬ時は、長く生

錢の周ーこれも  
布施を調する語  
ふせー留ふ意よ  
り布施をきかす

死に落つる。彼の十疋の布施物を二つに押し切り、大海へさらりくと投げ、無有も無  
 もなうして往ぬるに、何の往なれぬことかあらう。あよしない事を、くどく思つた  
 ことかな。往なうくとは思へど、又彼の十疋の布施物を取ると取らぬは、愚僧が身の  
 上では大分の違ぢや。何とぞして取りたいが、やあ、思ひつけた。方便の以て取らう。申  
 しくござるか。はて不思議な事かな。▲アドやあ、まだ歸らせられぬか。何ぞ見えませ  
 ぬか。▲シテされば、不思議な事でござる。最前教化をいたす時、私は袈裟をかけて居ま  
 したとも覺えます。又とつて下に置いたとも覺えますが、若し跡にはござりませぬか。  
 ▲アドされば、存じませぬ。尋ねませう。▲シテいやく、尤も私の袈裟には印がござる。  
 出たらば後から持たして下され。他所から歸つて、竿の端に掛けて置きましたれば、鼠  
 がちやうど錢の周ほど食ひました。それを小僧が、十疋のふせ物を、あちらへふせやり、  
 こちらへふせ起し致しました。これが印でござる。いつそ此穴をふせ縫がう、ふせ縫ひ  
 にいたさうと存じました。今につきもいたさぬ。出ましたら後から持たして下され。も

はやかう參る。▲アド申し、それにつき、ちと用がござる。まづ待たせられ。▲シテ心得ました。▲アドやれ、いつも十疋の布施物を遣します。これを忘れてやらぬにより、何かと云うて歸らるよ。遣さうと存ずる。申し。▲シテ何事でござる。▲アド忘れたことがござる。いつも進ませます布施物を、はつたと忘れました。取つて歸らせられて下され。▲シテ忘れたと仰せらるよは、これでござるか。▲アドなか。▲シテはて扱こなたは律義な。それを今日取らぬと申して、何と存じましよ。重ねてついでもござらう。もはや歸ります。▲アドいや、進ねば氣にかよります。是非とも取つてござれ。▲シテいや、何程仰せられても、今日は取られぬ事がござる。▲アドそれはどうした事でござる。▲シテ最前から教化を致さうの、袈裟が見えませぬのと申して歸つたは、この布施が欲しさにと思召す前もござる。どうあつても取られませぬ。▲アドいや、是非共に。▲シテいや、こなたへ預けます。▲アドいや、どうでも取つてござれ。はあ、申し、これ袈裟が出ました。▲シテはあ、扱もめでたい事がござる。▲アド何事でござる。▲シテ御布

前―手前に同じ

やくたもない―  
扱も無い、つま  
らぬ

施を下されたれば、袈裟まで出ました。▲アド何のやくたもないこと。とつととござれ。▲シテはあ、面目もござらぬ。なう、恥かしや。

八米市

七人

シテ 半上下、棒擧げ出る  
アド 皆々長袴、小き刀

▲シテこれは、この邊の者でござる、一日々々と暮す程に。今日ははや、大晦日になつてござる。世間を見ますれば、仕舞好うして、歳暮の禮などに歩く人もあるに、私は仕舞ふことは措いて、何を一色、年とり物を調へもいたさぬ。氣の毒な、しまひかねた事でござる。又こよに誰殿と申して、私に御目をかけらるゝ御方がござる。何時もこれから定めて、年とり物を御合力なさるゝが、今に沙汰がない。これから参らねば、何とも年を取らうやうもない。只今から参つて、御氣の附くやうに申して、貰うて参らうと存ずる。その下心で、この棒を持つて参る。まづ急ぎ参らう。やれ〜誠まことに、來る年も〜、この如くにしまひかねて、迷惑めいわくな事でござる。まるるほどに是ぢや。ものもう。御案内も。▲アド 表おもてに案内とある。誰ぢや。▲シテ いや、私わたくしでござります。▲アド やあ、わごりよか。

御合力御加勢の意あめぐみ

晩じた一暮れた  
ふせいー不精也  
精を出さぬこと

半石の又半石一  
五斗の半分なり  
二斗五升也

定めてしまつて、歳暮の禮せいはに出られたか。▲シテ いや、まだ仕舞ひましたやら、しまひませぬやらでござります。▲アド はて扱、今日は大晦日、もはや日も晩ばんじたに、まだしまはぬとは。それも常々働がふせいなによつてぢや。▲シテ 私も随分常にも稼かせぎますれど、何と致しましたやら、この如くにしまひかねまして、迷惑めいわく致します。▲アド はて扱、それは苦にがしいことぢや。それにつき、いつも其方へ遣つかはす合力米は行たか。▲シテ いや、まだ参りませぬ。▲アド 何と、まだ行かぬか。それなら云ひつけてやらう。▲シテ それは忝かたじけなうござります。▲アド やい〜、いつも誰へ遣つかはす合力米はやつたか。何と、藏くらをしめ松飾まつかざりをした。ちとでも出たはないか。何と、半石の又半石出たがあるか。それは少すくないなあ。なう、藏くらをはや締めて、飾かざりをしたによつて、出たが無いと云ふが、半石の又半石あるが、これなりともまづ遣らうか。▲シテ それは忝かたじけなうござる。それ程ほどござれば、ざつと年を、夫婦めづの者が取ります。▲アド それなら、遣らうほどに、まづそれに待ちやれ。これ〜、これを遣る程に取つて行て、姥おばにも見しやれ。▲シテ 忝かたじけなうござります。取つて歸り、喜よろこばしま

もごう様一女の  
尊稱也こゝは奥  
様のこと

しよ。▲アド又春、藏を開いたら、早々遣らうぞ。▲シテそれは愈忝うござります。それ  
につきまして、今日路次で、近附に逢ひましたれば、棒を言傳てました。棒にかけて参  
りましょ。▲アドいかにも、よかる。▲シテ申し、これ程なものが、此方にも一つござれ  
ばようござるが、片荷すつて持たれませぬ。▲アドさうであらう。▲シテやあ、幸どれから  
ぞ負うて参つたやら、負繩がござる。負うて参りましょ。▲アド一段よかる。手をかけて  
やる。さあ立て。▲シテはあ、丁度よいわ。▲アドまづ早う歸つて仕舞やれ。▲シテ毎年々々御  
陰でしまひます。忝うござります。もはや御暇申します。▲アドお行きやるか。ようをりや  
つた。▲シテはあ。なうく、嬉しやく。まんまとまづ合力米は貰うた。さりながら、い  
つもおごう様から、女ども方へ、古著の御小袖を下さるよ。これは忘れさせられたか、  
沙汰がない。これも序にお氣の附くやうに申して、貰うて参らう。申し、ござります  
か。▲アドやあ、わごりよはまだ往なぬか。▲シテもはや歸りますが、女どもが、おごう様へ  
お言傳申しましたを、失念致しました。▲アドそれは何と云ふ言傳ぞ。▲シテまづ近い正月

でござります、定めて正月お小袖が、出来ましたでござりましょ、姥らは寒うてこそ居  
りますれ。春暖になりまして、お小袖を見に参りませうでこそござりますれと申して、  
御言傳を申しましてござります。▲アドそれはようこそ言傳をしられた。それにつき思ひ  
付けた。いつもおごうが方から、其方の女房へ古著を遣すが、それは行たか。▲シテい  
や、まだ是も参りませぬが、それはようござります。▲アドいや、よいと云ふ事はある  
まい。云ひつけてやる。これく、いつも遣る物忘れた。さあく、取つて行かしめ。お  
ごうが方から、著古したれど遣すと云うて、女房衆へやりやれ。▲シテこれは結構なお  
小袖を、忝うござります。女どもに見せて喜ばしましょ。さてこれを、どうして持つて参  
りましょ。後の俵と相應致さぬ持物でござる。▲アドまことに相應せぬが、やあ、致しやう  
がある。こちへおこしやれ。此俵に打ちかけてやらう。これく、ようをりやる。それ  
では俵もかくす、その儘人を負うた様なわ。▲シテやあ、人を負うたやうなと仰せられます  
が、時分柄でござる。若し道で人が咎めましたら、何と致しましょ。▲アドそれはよいこ

俵藤太云々藤原秀郷を俵(元は田原)藤太と云ふよりこゝはその秀句を用ゐたる也

とがある。若し人が咎めたらば、俵藤太のお娘御、米市御寮人の御里歸りぢやとおしやれ。▲シテさてもく、まづは俵につき米市、面白うござります。それなら女共も、待ち兼ねて居りましょ。かう参りましょ。まづは御蔭で年を取ります。春は早々夫婦連で御禮に参りましょ。▲アドいかにも、早々御出やれ。さらばく。▲シテはあ。なうく、嬉しやく。まんまと二色ながら貰うた。まづ歸つて女共に見せて喜ばせう。まことに結構なお方ぢや。あの様な人が無ければ、身共は立たぬ。はあ、大勢歳暮の禮に行く人が来るよ。▲立衆何れもござるか。▲立衆四人皆々これに居ります。▲立衆いざ、歳暮の禮に参らう。▲四人なかく、参りましょ。▲立なうく、あれを見させられたか。人を負うて参る。何人ぢや。尋ねて見ましょ。▲四人ようござろ。問はせられ。▲立これく其處な人。▲シテこのことか。何事ぢや。▲立其方の負ひまして居るは、どなたぢや。▲シテ何と、この御方か。▲立なかく。▲シテ是は俵藤太のお娘御、米市御寮の御里歸ぢや。▲立衆夫ならちと用がある。待つてくれさしませ。▲シテ用はあるまいが、待てなら待たう。さればこそ咎むる

人體―相當の柄

聊爾―粗相

なか―てもない―勿論盃はならぬの意

わ。▲立なうく何れも、米市御寮は承り及うだ美人ぢや。いざ盃を望みましょ。▲四人一段ようござろ。▲立これく、御寮人のことは承り及うだ美人ぢや。盃を戴きたいと皆云はるよ。どうぞ頼む。盃をさしてたもれ。▲シテはてさて、わごりよ達は人體と見えたがこ、の途中で、その様な事がなるものか。それはならぬぞ。▲立尤もさうでをりやれども、これはよい所で御目にかよつた。どうでも盃が戴きたい。どうぞ好いやうに申して、さしてたもれ。▲シテはてさて、聞き分もない。その様な聊爾なことがあるものか。それはならぬことぢや。さりながら身共はさう思へど、又お御寮の何と思召すも知らぬ。まづ伺うて見よ。とつとそちへ寄つて居りやれ。▲立心得たく。伺うて、なるやうにしてたもれ。▲シテ必ずこちを見やるな。申し、あれに居られます若い衆が、こなたのと聞き及び、是非とも御盃を戴きたいと申されます。はあ、御尤でござります。私もさやうに存じました。その通申しましょ。これく若い衆、伺うたれば、たとへ人が云ふとも、その様なことを取り次ぐものか、なか―てもないと云うて、殊の外おむづかる

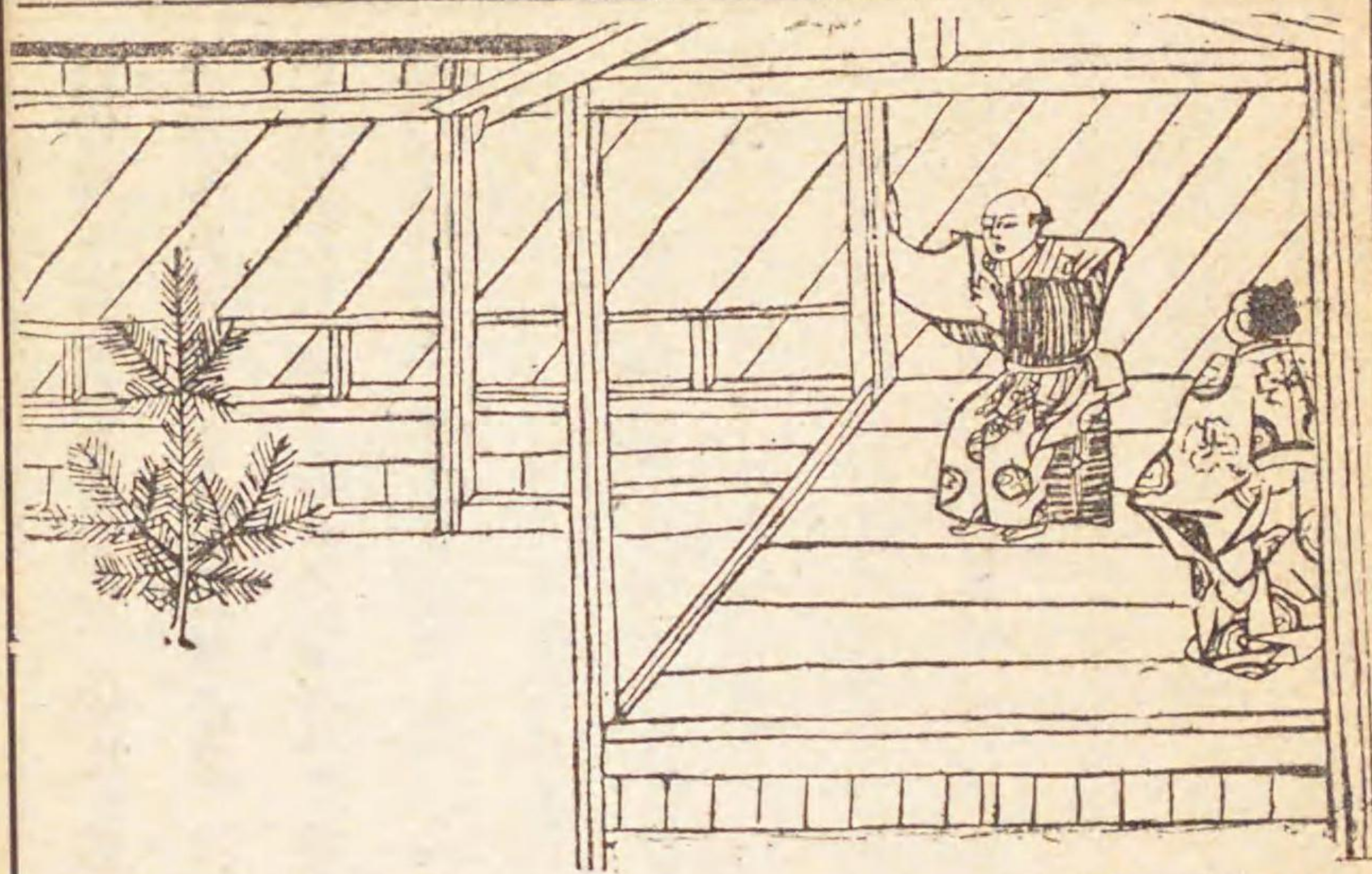
如才一原本如在  
に作る

によつて、ならぬぞ。▲立はてさて、それは聞えぬ。其所をわごりよに頼む。よいやうに申して、是非とも、御盃をさしてたもれ。▲シテ身共も如才でない。ならうかと思つて申し上げたれど、おむづかるによつてならぬ。思ひ切りやれ。ならぬぞ。ふつつりとならぬ。▲立やあ、わごりよは、若い者共が、これ程いろくくと最前から頼むに、聞えぬ。此上は厭でも應でも、盃をせねばならぬ。若しならねば、目に物見せうぞ。▲シテそれは無理な事を云ふ。目に物見せだてしたと云うて、何程の事があらう。おいてくれ。▲立悔むなよ。▲シテ悔むことはないぞ。▲立おのれ憎い奴の。たつた今思ひ知らせうぞ。さあさあ、いづれも、とかく埒が明かぬ。皆寄せさせられ。▲四人心得ました。▲五人えいとうえいとうく。▲シテおのれら何程の事があらう。▲五人扱もく、強い奴でござる。何とせうぞ。▲立これく、身共は後から廻つて、あの御寮人を連れて参らうほどに、又いづれもは、も一度寄せさせられ。▲四人心得ました。えいとうくく、▲シテえいとうく、えいく、おう。▲四人さてもく、強い奴でござる。▲立はあ、これは騙された。俵ぢや。

何の役に立たぬものぢや。何れも歸らせられく。▲四人扱もく、騙されたことかな。▲シテやいく、これと盃がなるならせいだな。▲立おのれ、これと盃がなるものか、いらぬやい。▲シテやあく、盃をせいだな。さうもをりやるまい。それなら、これは身共取つて歸つて、年取物にするわやい。

鏡一名鏡腹巻

御道具競一道具  
を見せ合ふこと



九 鏡よろひ

三人  
主シテ 半上下、腰帶  
長袴、小刀  
アド 長袴、小刀

▲主 罷出でたる者は、この邊あたりに住居致す者でござる。この間の、彼方あなた此方あなたに御道具競お道具くらべは、夥おどろしい事ことでござる。それにつき、この度は鏡よろひをくらべさせられうとある。身共みどもが内に、鏡よろひが有るか存せぬ。まづ太郎冠者たろうくわんじゃに尋ねうと存ずる。やい、太郎冠者あ在るかやい。▲シテはあ、御前おまへに居ります。▲主 念ねんなう早かつた。汝お喚び出すは別の事べつでない。このごろの、彼方あなた此方あなたに、御道具競お道具くらべは、夥おどろしい事ことで

はなかつたか。▲シテ 御説ごせつの通とお、夥おどろしい事ことでござる。▲主 それにつき、この度は鏡よろひをくらべうと仰おほせらるゝが、身共みどもが藏くらに鏡よろひがあるか。▲シテ されば、御道具お道具は残のこらず預あづかりましたが、鏡よろひと申す物は存ぞんじませぬ。▲主 汝おが知らずは有るまい。何と都みやこには有らうか。▲シテ なかく、都みやこにはござりましょ。▲主 その義ぎなら、汝おは都みやこへ上のぼり、鏡よろひを求もとめて来こい。▲シテ 畏おそつてござる。▲主 序ついでに、ざつくと著きてをどす物ものも買かうて来こい。▲シテ 心得こころえました。▲主 もはや行くか。▲シテ かう参まゐります。▲主 行いたらば頓やがて戻もどれ。▲シテ 畏おそつてござる。▲主 えい。▲シテ はあ、やれ、俄にわかなことを仰おほせつけられた。まづ都みやこへ上のぼり、鏡よろひを求もとめて参まゐらうと存ぞんずる。まづ、そろく参まゐらう。都みやこへ上のぼつてござらば、これを序ついでに致いたして、此所こゝ彼所あそこを見けん物ぶつ致いたさうと存ぞんずる。やあ、何かと申すうちに、これが都みやこでござる。南無三寶なむさんぼう忘わすれた事ことがある。かの鏡よろひと云いふ物が、どの様ようなものやら、又何所どこ許もとにあるも知らぬ。何と致いたさう。やあ、流石さすが都みやこぢや。知らぬ物は呼よばはつて廻まれば、調しらふと見みえました。私もこれから呼よばはらう。なう、其所そこ許もとに鏡屋よろひやはないか。鏡買かはう。▲アド これは、都みやこに隠かくれもない、

をどす物一鏡の  
藏(をどし)の事  
と人を嚇す事と  
を間違ふる也

南無三寶一これ  
はしたりの意

心も素直すなほに無い者でござる。見れば田舎者いなかものが、何やらわつぱと申す。ちと當つて見やうと存ずる。なうく、これく。▲シテやあ、こちの事か。何事でござる。▲アドなかく。其方の事ぢやが、何やらわつぱと云うて尋ねらるゝが、何でをりやる。▲シテ私は田舎者でござるが、鎧が求めたさに、この如くに呼ばはります。▲アド何と、其方は、その鎧と云ふを見知つてをりやるか。▲シテやら、此方には都人みやこびととも覺えぬ。夫を見知れば是を求むると申せども、存ぜぬ故ゆゑにこの如くに呼ばはります。▲アドこれは身共が誤つた。其方は仕合しあはせな人ぢや。身共は鎧屋よろひやの亭主ていしゅぢや。鎧が望のぞなら賣つてやらう。それに待たしめ。▲シテそは忝かたじけうござる。見せて下され。▲アド心得こころえたく。やれく田舎者で、何も知らぬと見えたる。これに鎧よろひの注文ちうもんがある。是を鎧ぢやと申して、賣つてやらうと存ずる。なうく田舎衆いなかしう居ゐりますか。▲シテこれに居ります。▲アドこれく、是が鎧よろひでをりやる。これを讀よんで見れば、鎧よろひの仔細しさいが知れる。その上、是を頭かしらに戴いたげば甲かぶせ胸むねに當つれば腹卷はらまき、こてに當つれば籠手こてあて當あ、臍すねに當つれば臍當すねあてでをりやる。▲シテいかにも合點あてん致いたしました。さて、ざ

腹卷—鎧の如くにして袖無き物

路次—途中  
代り—代金

つくと著つておどすものも欲ほしうござる。▲アドそれもなるほどある。賣つてやらう。それ待ちやれ。▲シテ心得こころえしました。▲アドこれく、このなかにおどす物が入いれてある。必ず路次ろじで明あけて見やるな。持つて歸り、頼たのうだ人の前まへで明あけて見やれ。▲シテ忝かたじけうござる。二色ふたいろの代物だいぶつは何程でござる。▲アド萬疋まんぢきでをりやる。▲シテいかにも求めましょ。代りかは明日あ三條でうの大黒屋だいこくやで渡わたしましょ。▲アドなかく。あれで受取うけとらう。もはやお行きやるか。▲シテなかく。▲二人さらばく。▲アドようをりやつた。▲シテはあ。なうく、嬉うれしや嬉うれしや。まんまと二色ながら求めた。まづ急いで歸り、御目おめにかけう。定さだめて待ちかねてござる。これを見せたらば、御機嫌ごきげんであらう。歸るほどにこれぢや。申し、頼たのうだ御方おかたござりますか。▲主まやあ、太郎冠者たろうくわじやが戻もつたと見えた。戻もつたか。▲シテござりますか。唯今いま歸かへりました。▲主まやれく骨折ほねをりや。何と鎧よろひを求めて來たか。▲シテなかく。求めて參まゐりました。急いそいで御目おめにかけましょ。▲主ま早はやう見せい。▲シテ畏かしこまつてござる。申し、是こゝが鎧よろひでござる。▲主ま何と、それが鎧よろひぢや。▲シテなかく。▲主まその書かいた物を鎧よろひと云ふ



緋緘—好き日と  
續けたり紅絲に  
て緘すこと  
著香長—鏡のこ  
と  
小櫻緘—紅白の  
絲を交へて緘し  
又は小櫻革(藍  
染の地に白く小  
き櫻花の模様あ  
る革)にて緘し  
たる鏡  
卯の花—卯の花  
緘は白絲を用ゐ  
る  
洗革—桃色に染  
めたる革  
勝色—褐色、軍  
に勝つ意に續け  
たり

には仔細があるか。▲シテなかく、仔細がござる。これを読みますれば、鏡の仔細が知れます。よう聞かしましよ。▲主それなら讀うで聞かせい。▲シテ畏つてござる。鏡へ恐れでござる。床几にかけて讀みましよ。さらば讀みます。よう聞かせられ。語初春のよき緋緘の著香長は、小櫻緘となりけり。さて又夏は卯の花の、垣根の水に洗革。秋になりてのその色は、何時も軍に勝色の、紅葉にまがふ錦革。冬は雪けの空晴れて、甲の星も菊の座も、皆華やかにこそをどし毛の、馬の上にて、無手と組み、くみの上帯引締めて、思ふ敵をうち糸や、長くわが名はあけまきの、いはるの上の塵とりて、大づつしめくわい据る并べ、唄ひ、酒もり、舞遊び、弓は袋を出さずして、劍は箱に納むれば、治まる御代とぞなりにけり。秘すべしく、口傳にあり。▲主尤も聞えた。その口傳にあると云ふは、どうしたことぢや。▲シテその事でござる。これをこの如く卷きまして、頭に頂けば甲、手にあてますれば籠手、腹に當つれば腹巻、臍に當つれば臍當でござる。▲主さては調法な物ぢや。又ざつくと著て、をどすものを求めて來たか。▲シテなかく、

錦革—紫地に白  
く模様を染出せ  
る革  
甲の星—兜の鉢  
の粒状の物  
菊の座—胃の頂  
上八幡座のこと  
あげまき—鏡の  
背につけたる總  
角結のこと我が  
名は上ぐと續け  
たり  
いはるの上—岩  
井の水とあるべ  
きか  
大づつ—大筒は  
鏡の胴の事と云  
ふ  
しゆくわい—手  
蓋か籠手當のこ  
と  
口傳—口づから  
與儀を傳授する  
こと

求めて参りました。お目にかけましよ。いで、食はうく。▲主なうく、怖しやく。太郎冠者が鬼になつたく。▲シテいで、食はうく。▲主あゝ悲しやく。▲シテ取つて嚙まうく。▲主なうく怖しや。許せく。▲シテいで、くらはう。

十 雙六僧

三人

シテ 角帽子、水衣、大口、太刀佩く  
ワキ 水衣、頭巾  
アヒ 長袴、小さ刀

遠近の云々―道  
行誦也曲にかゝ  
る  
どうす袋―未詳

▲ワキ次第 我は貴く思へども、く、人は何とか思ふらん。詞これは東國方の者でござる。  
某諸國修行申さず候間、この度思ひ立ち、北國にかより、それよりまた西國修行い  
たさばやと存じ候。遠近のたづきも知らぬ修行者を、く、たれか哀とおもふらん。彼  
方此方で鉢開き、知らぬ所に著きにけり。謠やあ、これなる石塔を見候へば、どうす袋  
を數多かけ置かれて候。これは如何様仔細の候べし。所の人に尋ねばやと存じ候。所の  
人の渡り候か。▲間所の者のお尋は、如何なる御用にて候ぞ。▲ワキこれなる石塔を見申せ  
ば、どうす袋を數多かけ置かれ候。いはれの無きことは候まじ。教へてたまはり候へ。  
▲間御不審御尤にて候。あれは古、この所に雙六僧と申して、雙六打の候ひしが、ある

目―賽の目也

一聲―謠ぶし  
もくれを打つ―  
不詳

時雙六の上にて口論の致され、對手を切り殺し、その身も當座に相果て申され候。即ち  
その僧の標にて候。それにつき、不思議なる事の候。この石塔に袋をかけ候へば、雙六  
の目が、思ひのまゝに出ると申して、今において、かやうに袋を掛け申すことにて候。  
御僧も逆縁ながら、弔うて御通あれかしと存じ候。▲ワキ懇に御教へ、満足申し候。さ  
あらば、逆縁ながら弔うて通らうするにて候。▲間又御用候はど、おほせられ候へ。▲ワキ  
頼みましよ。▲間心得ました。▲ワキ謠扱は雙六僧の舊跡かや。いざ、跡とひ申さんと、鉦  
からくと打鳴らし、今宵はこゝに旅寝して、かの御跡をとふとかや、く。▲シテ一聲 雙六  
のおくれを打つ、その心、半一つばかりのたのみなりけり。▲ワキ不思議やな。これなる  
塚のかけよりも、まほろしの如く見えたまふは、如何なる人にてましますぞ。▲シテ詞こ  
れは雙六僧と申す雙六打の幽靈なるが、御弔ひのありがたさに、これまで現れ出でた  
るなり。▲ワキ 雙六僧の幽靈ならば、最期のありさま語りたまへ。跡をば弔ひ申すべし。  
▲シテ詞さあらば、昔のありさま、語りて聞かせ申すべし。跡を弔うて給はり候へ。さて

朱三云々以下  
曲にかゝる朱  
三、五六、三六  
などをすべて賽の  
目の名

四の二一死にの  
意に言掛く  
五二一鬼と言掛  
く

も、ある徒然のことなるに、例の友達打ち寄りて、競ひおくれを打ちけるに、對手の曲者石を撒き散らす。こは如何にと怒りて、腰の刀に手をかくる。朱三さらりと引抜けば、地く、五六のやうなる相手もぬき持ち、白黒になつて、追うつまくつつ、鎬をけづり、切つつ切られつ、われはおくれになりしかば。▲シテ敵はじと思ひて、地かなはじとおもひつと、三六かけにかどむ所を、つどけ切に切り立てられて、われは其所にて四の二けり。四三をはなれて五二となつて、修羅道に落ちにけり。▲シテあゝら、ものくし、いざ、うたう。あゝら、苦しや。かやうに、苦を受くる事、雙六の、地、最期の一念悪鬼となつて、修羅道の苦しみななるを、助け給へや御僧よ、くくと、云ふかと思へば失せにけり

狂言記外編

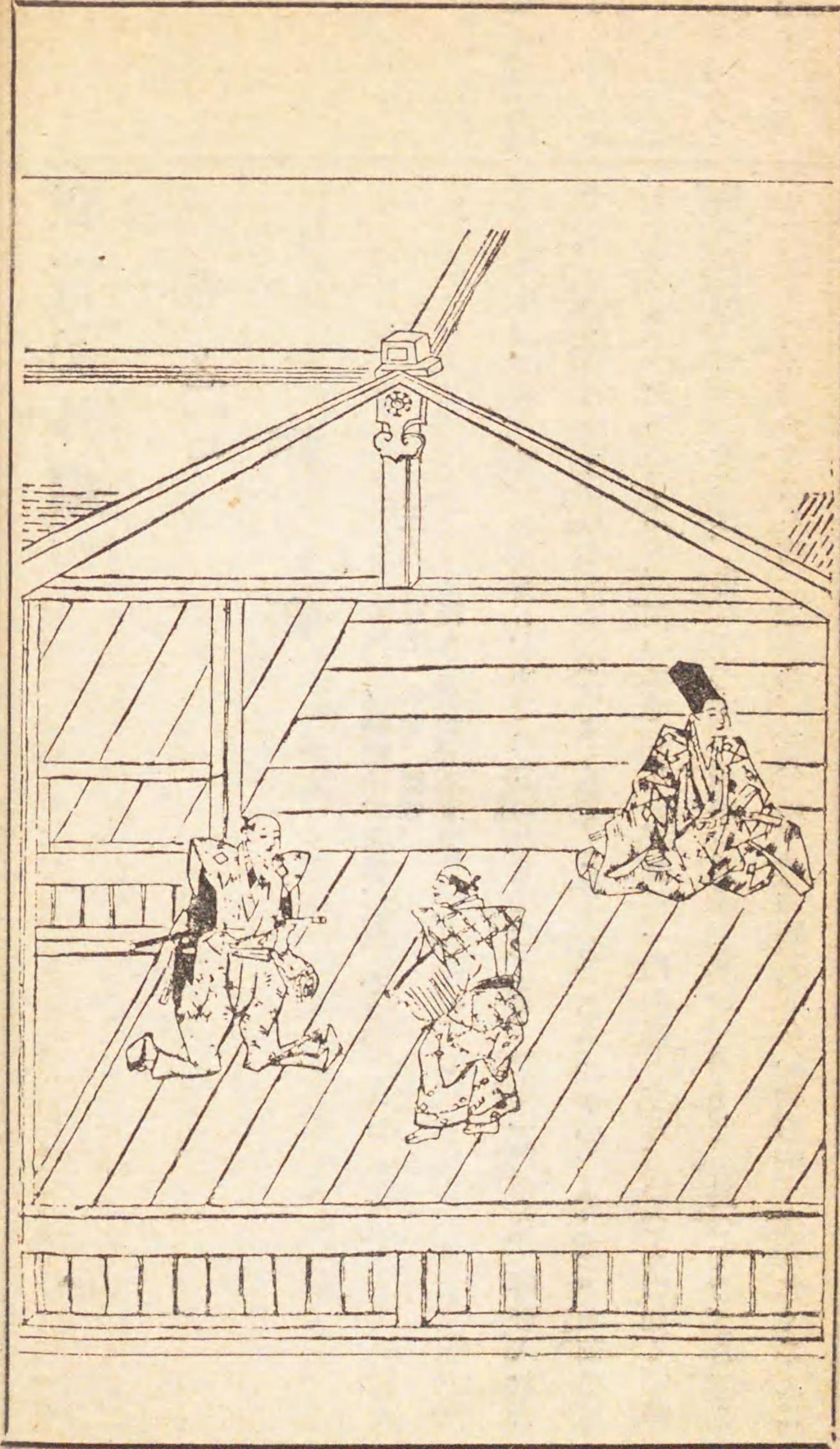
卷之一

一張 蛸

三人 大名 立烏帽子、素襖、袴、小き刀  
冠者 半袴、腰帶、  
盗人 長袴、小き刀

呼び入れ招待  
まうせうませ  
う也  
張蛸一干蛸のこ  
と  
隠れもない物  
有名なる物

▲大名御存じの者。天下をさまり、めでたき折からでござる。毎年一門中を、呼び入れます。太郎冠者を呼び出し、申しつけまうせうと存ずる。あるかやい。▲くわじやお前に居ます。▲大名そちを呼ぶも、別の事でもない。毎年一門振舞をする。いつもの如く、張蛸を高盛にせう。そちは、都へ上つて、張蛸を買うて来い。▲くわじや、畏つてござる。さりながら、どのやうなる物でござる、存ぜぬ。▲大名隠れもない物ぢや。疣がたくさんに



あるものぢや。買かうて来こい。▲くわじや 心得こころました。▲大名だいめいやがて戻もどれ。▲くわじや 畏おそつた。▲大名  
 えい。▲くわじや はあ、旦那だんなのやうに、急きふに物をいひつけて、只今ただいまから都みやこへのほり、はりだ  
 こを買かひ取とつて参まゐれと申まをさるよ。さりながら、上のぼらずばなるまい。まづ、そろりく、上のぼり  
 まうせう。参まゐる程ほどに都みやこさうな。まづ 賑にぎやな事ことぢや。さてく、はつたと失念しつねんした。はり  
 だこのあり所ところを問とうて参まゐらなんだ。何なにと致いたさうぞ。さてもく、都みやこの者ものは、知らぬこと  
 は呼よばはつて通とほる。某それがしも呼よばはつて歩あきませう。張はりだこ蝟か買かひませうくく。▲盗人たうじん都みやこに  
 隠かくれもないすつばでござる。田舎者いなかものが、何なに事ことやら、呼よばはりまする。この者に、あたつ  
 て見みませう。これく。▲くわじや 何なに事ことぞ。▲盗人たうじん其方そのほうは、何なにを呼よばはつて通とほるぞ。▲くわじや  
 某それがしは田舎者いなかものでおぢやるが、はりだこを買かひたい處ところで、呼よばはりまする。▲盗人たうじんそなた  
 仕合人しあはせびとぢや。▲くわじや なぜに仕合人しあはせとおぢやるぞ。▲盗人たうじん某それがしがはりだこを賣うる亭主ていしゆぢや。  
 ▲くわじや まことに、お目めにかよつた事は、仕合人しあはせぢや。はりだこ見みせて下くだされ。▲盗人たうじん其方そのほう  
 ははりだこ見み知しつたか。▲くわじや いやく、見たことことはをりない。▲盗人たうじん追付おつつけお目めにかけま

合人仕とあやぢ  
 るぞ一刊本かく  
 あり仕合人と仰  
 (あしや)るぞ  
 か或は仕合人で  
 あぢやるぞか

疣があるわし  
の足の疣と太鼓  
の胴の筋とを間  
違ふる也  
きびのよい一氣  
味好く云ふがま  
まにあつさりと  
買へる意

うせう。▲くわじや 早うく見せて下され。▲盗人心得た。田舎者で、何をも知らぬ。こよに  
古い太鼓がある。はりだこぢやと云うて賣らう。これく。▲くわじやこれがはりだこか。  
▲盗人其方のいふは、はりたこ。左様ではござらぬ。はりだいこと云ふ物ぢや。▲くわじやそ  
れなれば、おほえぞこなうてござる。張太鼓でござるか。▲盗人なかく。この如く、皮  
を引張り申するによつて、張太鼓と申す。▲くわじやまた、疣がたくさんにあると申されて  
ござる。▲盗人これく、疣こそあまたござれ。▲くわじやあと、疣があるわく。買ひませ  
うが、代物はいか程ぞ。▲盗人五百疋でござる。▲くわじや 則ち、五百疋に買ひまうせう。  
▲盗人代物は、何方で受取らうぞ。▲くわじや 三條の大黒屋でわたしませう。▲盗人めでたう、  
大黒屋でうけとりませう。そなた程、きびのよい買手もない。みやけに、主の機嫌直し  
する囃子物教へまうせう。▲くわじやそれは何より忝ない。何と。▲盗人 耳のはたに  
これ、今の如くにおしやれ。▲くわじやおほえました。忝なうござる。▲盗人さらばく。  
▲くわじややれく、うれしい事かな。早う持つて下らう。まるる程にこれぢや。申しく、

ぬかれて―だま  
されたること

冠者が歸りました、く。▲大名やれく、戻つたか、く。はりだこ求めて来たか。早  
う見せい。▲くわじや 心得ました。これく。▲大名そちは、子供へみやけに、太鼓を  
持つてきたか。まづ、はりだこ見せい。▲くわじや はりだこではござらぬ。張太鼓が本でござ  
る。即ちいほも澤山にござる。▲大名 おのれめは、都の者にぬかれて来た。▲くわじや いや  
いや、ぬかれはしませぬ。▲大名 はり蝟と云ふ肴物ぢや。▲くわじや 肴ならば肴と、とうから  
云うたいものでござらぬか。▲大名 その様にぬかれて、まだものを云ふか。あちへうせ  
い。▲くわじや 頼うだ者が叱らるとは尤ぢや。これが、高盛にはならぬ筈ぢ  
や。都者ぢや。たどもぬかずに、この如くに、主のきけんが悪うならうと思つて、きけんな  
ほしの囃子ごとを教へた。急いで囃しまうせう。囃子物 張太鼓と申すはく、中に木を押  
し入れ、兩に皮を引つぱつて、まはりに疣の候へば、張太鼓と申すよ。けにもさあり。  
やよ、けにもさうよのくくくくく。▲大名 某の機嫌直しに、囃子物をする。こ  
とばをかけませう。いかにやくくくくくくくくく。太郎冠者、だまされたるはにくけれども、囃子物が面

諸白一酒の極上

白い。内に入りて、泥鰯の鮓をほつばつて。諸白を飲めやれ。▲くわじや 兩に皮をひつばつて、まはりに疣のあるをこそ、はり太鼓と申すよ。▲大名なにかの事もいるまいぞ。内に入りて餅食へ。▲くわじや けにもさあり。やよ、けにもさうよのく。  
おとしや  
ざりどめ

二 口眞似 聾

四人  
舅 長袴、小さ刀  
冠者 半袴、腰帶  
聾 烏帽子、素襖、袴、小さ刀  
權六 長袴、小さ刀

わせる一來られ  
るの意

▲しうとこのあたりの者。今日は最上吉日でござる所で、聾どのお出ぢや。冠者に申し  
つけまうせう。在るか。▲くわじやお前に。▲しうと今日吉日で、聾がわせる。その分を心  
得。▲くわじや 畏りました。▲むこ人のいとしがる、かくれもない花聾。今日吉日で聾  
入仕る。あなたへ無心申し、こなたへ頼うで、かやうにこしらへを仕つた。聾入に、  
いろく辭儀作法があると申す程に、こゝに權六殿とて、お目かけらるゝ人がある。参  
つて、習うてまるらう。まづそろくまるらう。これぢや。案内もく。▲權六 誰ぢや知  
らぬ。誰ぞ。▲むこ 某でござる。▲權六 何として来たぞ。▲むこ 今日吉日で、聾入しまする。  
▲權六 めでたい事ぢや。用があらばおしやれ。▲むこ 方々へ御無心申して、この如くにこし



うちこかして、お手つてテうて入るなり。

三 今

参

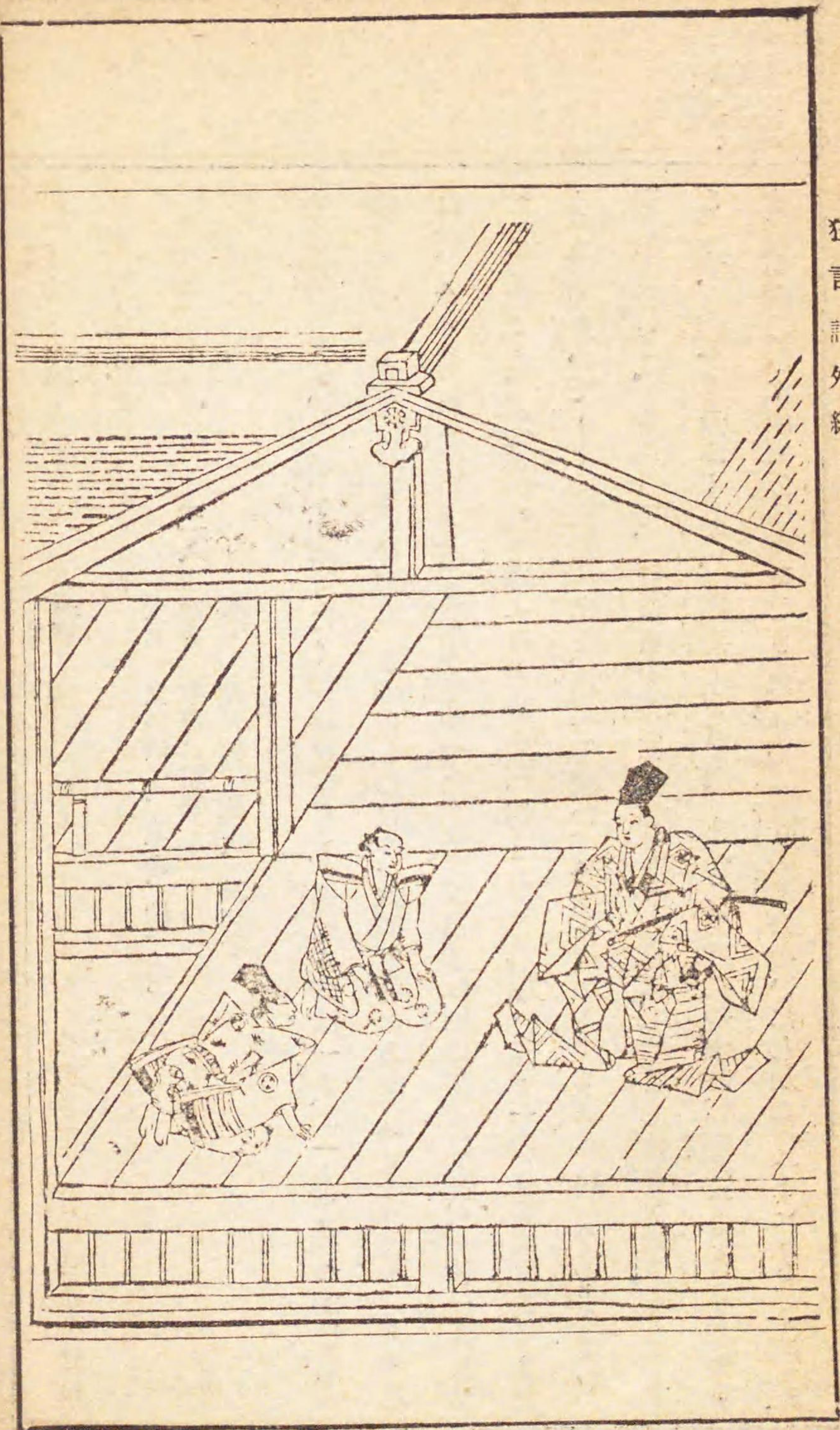
三人

大名 立烏帽子、素襖、袴、小き刀  
冠者 半袴、腰帶  
参り 括り袴、腰帶、烏帽子

阪東方一開東  
いたしからひて  
十致し枯して即  
しつくして杯の  
義歟

▲大名 隠れもない大名。かやうにくわは申せども、召使ふ者は一人、一人ではつかひ足らぬ。まづ太郎冠者を喚びいだし、まづ申しつけう。太郎冠者あるか。▲くわじや はと。▲大名 たか。▲くわじや お前に。▲大名 念なう早かつた。汝よび出すは別の事ではない。汝一人ではつかひたらぬ。新座の者を抱へうと思ふが、何とあらう。▲くわじや 一段とようござりませう。▲大名 急いで上下の街道へ出て、抱へて来い。▲くわじや はと。▲大名 えい。▲くわじや まづ、急いで参らう。やあさて、新座者を抱へてござらうならば、すこし休息を致さうと存する。や、何かと云ふうちに、街道でござる。まづこの所にやすみ、抱へて参らうと存する。▲今参 これには阪東方の者でござる。某、國許の奉公をいたしからひてござる。この度





同心一同登

庖丁料理

やつと参つた一  
相模劍術などの  
勝負事  
秀句一口合謎な  
どの類  
しんく秀句を  
辛苦と誤解する  
なり

都へ上り、奉公をいたし、その後、國許へ歸らうと存ずる。やあさて、若い時旅をせねば、老いての物語がないと申すによつて、思ひ立つてござる。▲くわじやなうく。▲今参は、こちの事でござるか。▲くわじやいかに、そなたの事ぢやが、どちへ行くぞ。▲今参某は、奉公の望で都へ上る。▲くわじや身ども抱へうぞ。▲今参それは忝うござる。▲くわじやさて、今でもおぢやるか。▲今参参りませう。▲くわじややあさて、ふと詞をかけたに、同心めされで、このやうな嬉しい事はない。さて、そなたの國はどこぞ。▲今参坂東方でござる。▲くわじや何も藝はないか。▲今参いや、藝と申すほどの事ではござらぬが、このやうな事も、藝になりませうか。▲くわじや何でござるぞ。▲今参弓、鞠、庖丁、碁、雙六、馬のふせおこし、やつと参つたを致す。▲くわじやもし、秀句はならぬか。▲今参いやもし、最早参るまい。▲くわじやそれはなぜに。▲今参参りませぬ先から、しんくなどと仰せらるゝによつて、参るまいと云ふ事でござる。▲くわじや夫は聞きやうが悪い、秀句でおぢやる。▲今参いや、秀句はなりませぬ。▲くわじや教へては。▲今参習うてならぬと云ふ事が、あるものでござる

今参一新参の召  
使をりそへ一居り  
候へ也  
あいやれ一も云  
ひなさい也  
静かに一静御前  
の事を言掛く

か。▲くわじやそれならば、あれへいたとも、今参と名がつくであらう。今参々々、あれへをりそへ。これへをりそへと仰せらるよであらう。その時、あれへこれへと御説候へども、御座敷を見れば、破れ窓とおいやれ。この心はと仰せられたらば、るどころが候はぬと云はしませ。又、今参々々、早うをりそへ、くと仰せらるよならば、判官殿の思ひ人。また、心はとお尋ねならば、静かに参らうと云はしませ。▲今参かやうに申せば、ようござるか。▲くわじやこれでは、頼うだ者の氣に入る事でござる。いや、何かと云ふ内に、これでをりやる。それにまたしませ。▲今参心得ました。▲くわじや頼うだお方ござるか。▲大名 太郎冠者が戻つたさうな。▲くわじやござるか。▲大名もどつたかく。▲くわじやえい。ござります。▲大名さてく骨をりや。新座者を抱へたか。▲くわじや抱へました。▲大名どれにゐる。▲くわじや門外に居ります。▲大名やい、始あることが、終までであると云ふほどに、ちとくわを云はう。汝あまたに答へ。▲くわじや畏つてござる。▲大名 太郎冠者。▲くわじやはあ。▲大名 床几をくれい。▲くわじやはあ、御床几。▲大名やい、今のは聞かうか。▲くわじや大

お目に参る一お  
氣に入ること

かくり一蹴鞠の  
場  
ござかしい一利  
口ぶりたること

音でござりました程に、承りませう。▲大名あれへ行て云はうは、大名の事なれば、御目に参つたらば、奉公がすむであらう。又、お目がまるらずは、五日十日も逗留であらうと、汝が分でうかどはせ。▲くわじや畏つてござる。なうく、只今御立關へおいでなされた。大名の事なれば、目がまるつたらば、奉公がすむであらうと、目がまるらずは、五日も十日も逗留であらうほどに、心得させませ。▲今参 奉公の習ひでござるによつて、苦しうござらぬ。▲くわじやあれへ行かしませ。▲今参 心得ました。▲大名やいく、太郎冠者、此中の五十疋の馬を引き出して、湯洗をさせい。又、若黨たちには、矢の根を磨かれいと云へ。や、今日は暮が好ささうな。各鞆をなされうほどに、かよりの掃除して、水を打たせいと云ひ付け。▲くわじや畏つてござる。しんざの者。▲大名あれか。さてくござかしい者ぢや。あの者が心ばせを目でつかうて見よほどに、これへ出と云へ。▲くわじや畏つてござる。さて、そなたの心ばせを、目でつかうて見やうと仰せられた。お前へ出させませ。▲今参 心得ました。▲くわじやはあ、新座の者。▲大名やいく、太郎冠者、みども

が目でつかへば、あちへちろり、こちへちろり。さてくござかしい者ぢや。さて、何  
 も藝はないか。▲くわじや 弓、鞠、庖丁、碁、雙六、馬のふせおこし、やつと参つたを致  
 します。▲大名さてくござかしいものぢや。中にも得た物は何ぢや。▲くわじや 中にも秀句を  
 えて居ります。▲大名やい、ゆくゆくは名をも付けうけれども、當分今参つてくる。これ  
 へ出と云へ。▲くわじや はあ。秀句を聞かうと仰せられる程に、出さしませ。▲今参 心得ま  
 した。▲くわじや 今参。▲大名今参々々、あれへをりそへ、これへをりそへ。▲今参 あれへこ  
 れへと御説候へども、御座敷を見ればやぶれまど。▲大名このころはいかに。▲今参 居所  
 が候はぬ。▲大名今参々々、早うをりそへ。▲今参 早うくと御説候へども、判官  
 殿の思ひ人。▲大名この心はいかに。▲今参 武藏坊辨慶。▲大名 退り居ろく。▲くわじや 何と  
 なされました。▲大名判官殿の思ひ人とぬかすによつて、しづか御前のことを云ひだすか  
 と思うて、心がおもしろかつたに、判官殿と、辨慶のいつちぎりやつた。あのやうな  
 者は去なせ。▲くわじや 畏つてござる。▲今参 やい、水でもくれたらば、とりかへせ

いつちぎり一言  
ひ契りか

かみ一烏帽子の  
中の髪と祠の中  
の神とを掛く  
かきう眉一未詳  
槍願一長く突出  
てたるもとがひ  
也

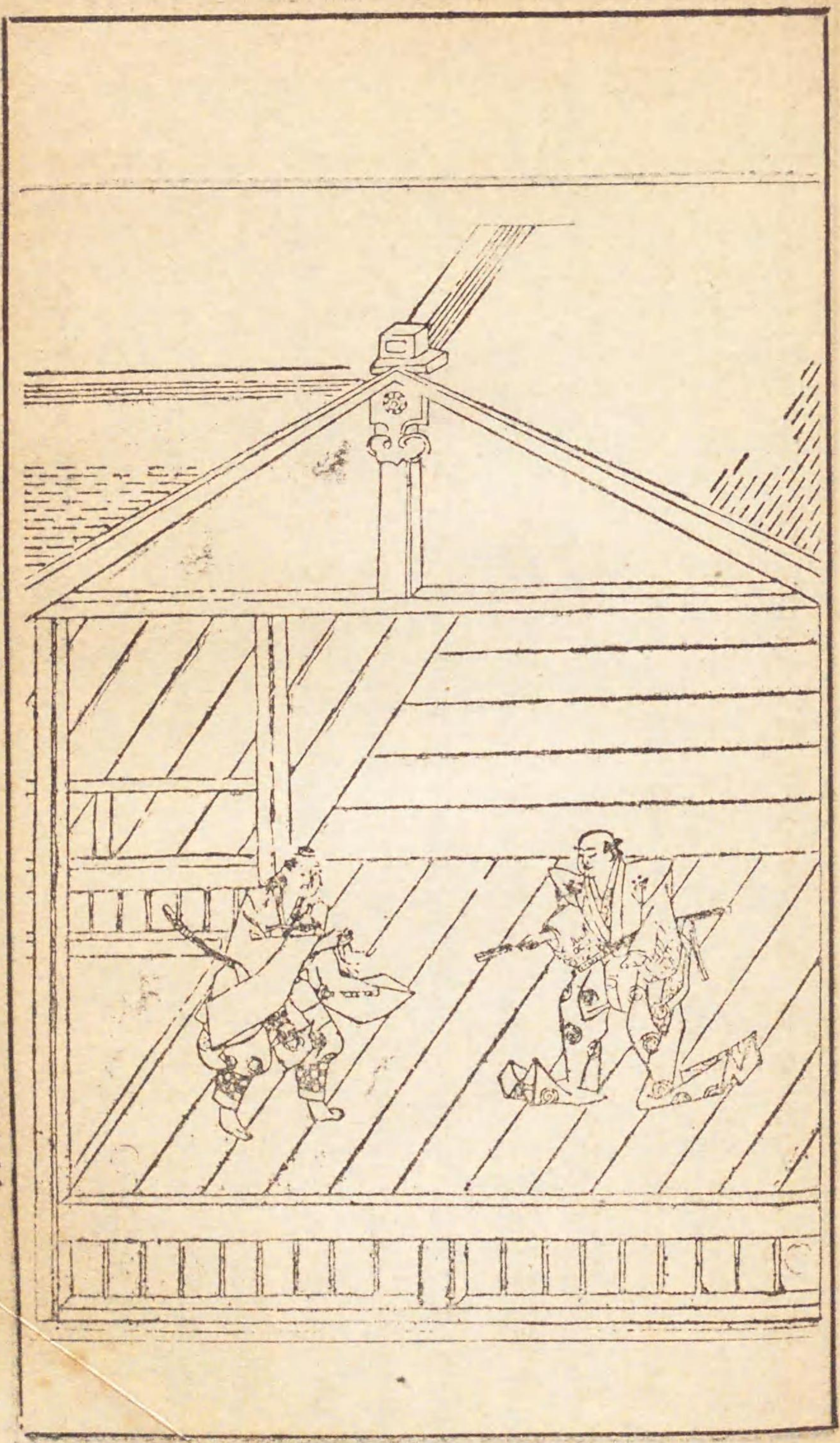
▲くわじや はあ。そなたは何事を云はしますぞ。▲今参 いや、お目の内がくるく致しまし  
 たによつて、御威勢におそれ申しそなうてござる。かさねては如何様にも答へうと  
 云はしませ。いや、なうく、身共の國のならひで、問ふ事も答ふる事も、拍子にかよつ  
 て申します。頼うだお方も、拍子にかよつてお問ひなさるよならば、忝うござらう。  
 ▲くわじや 心得た。申し、國の習で、問ふことも答ふることも、拍子にかよつて申します。  
 ▲大名 やい、あの者が著た烏帽子のなりが面白い。烏帽子について問はうほどに、出とい  
 へ。▲くわじや 畏つてござる。さあ、行かしませ。▲大名今参々々、参が著たる烏帽子は、  
 祠にも似てす。▲今参 それはさも候。中にかみの候へば。▲大名くはへたりや。でかした。  
 眉は何故に屈うだ。▲今参 かきう眉で候へば。▲大名 腰こそは細けれ。▲今参 蟻腰で候へば。  
 ▲大名 願がさし出た。▲今参 槍願で候もの。▲二人 槍願で候もの。ほつぱい、ひうろ、ひ。

四 菌山伏

二人 男 長袴、小さ刀 山伏 兜巾、篠懸、括り袴、腰帶、太刀、珠數

くさびら一草の類  
九識一靜坐思惟  
するごと眼識耳  
識等九あり  
十乘一坐床觀行  
の法に十種あり  
瑜伽一切諸法  
を云ふ水に譬ふ  
三密一身體意の  
三密あり修行の  
道也月に譬ふ

▲男 このあたりの者。わたくしが庭に、くさびらが俄に生えた所で、取りて捨て申すれば、あとから生えく仕る。あまり不審な。つねに御懇の山伏殿がある。頼うで見えて貰ひまうせう。急いで参らう。ものも。お山伏殿は内にござるか。▲山伏 九識の窓の前、十乗の床のほとりに、瑜伽の法水を湛へ、三密の月を澄ます所に、案内申さんとは誰ぢや。▲男 それがしでござる。▲山伏 何と思つてお出ぞ。▲男 此中、某の庭にくさびらが生えましてござる。取りて捨てますれば、また生えく致す。不審にござる。お出なされて、御祈禱をなされて下されい。▲山伏 心得た。他所へは参らぬが、そなたの事ぢや、参りてやらう。▲男 追付お出なされませい。▲山伏 心得た。▲男 これく、このくさびらでござら。▲山伏、これはくさびんのわざぢや。一斬してやらう。▲男 忝なうござる。▲山伏の如く、山伏



卷之一 菌山伏

きもつぶす。祈る程四つ五つ菌いづる。後山伏の耳ひく。眞つまむ。山伏いやがり、逃げてはいる。

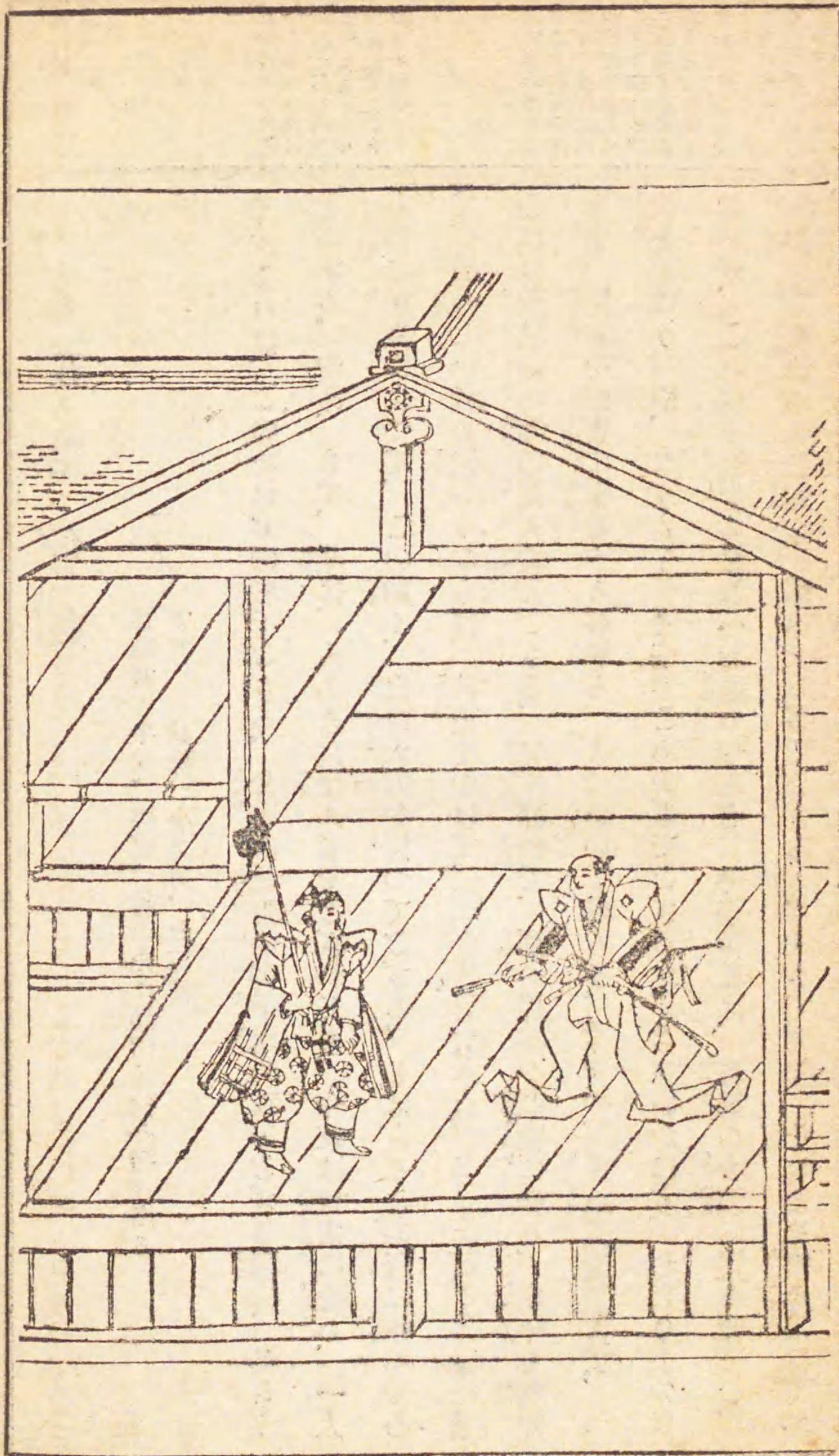
五 昆布賣

二人 昆布賣 半袴、腰帶、竹の先に烏帽子挟み擔げ出る  
アド 長袴、小き刀、太刀持

▲アドこれは、このあたりの者でござる。今夜は北野の御手水の夜でござる程に、参らうと存する。やあ、さて、某は、人あまた使ふ者でござれども、今夜は皆使に遣し、一人も内に居ぬによつて、この如く、自身太刀を持つてござる。しばらくこの所に休んでるて、似合しい者も通らうならば、言葉をかけて、太刀を持たせて参らうと存する。▲こぶ賣これは若狭の小濱の昆布賣でござる。毎年嘉例で、都へ昆布を商賣に参る。當年も相變らず、昆布を商賣に上らうと存する。まづ急いで参らう。▲アドや、重疊の者が参つた。詞をかけう。や、なうく。▲こぶ賣こちの事でござるか。▲アドいかにも、わごりよの事ぢやが、これはどれからどれへお通りやるぞ。▲こぶ賣私は、若狭の小濱の昆布賣でござるが、毎年こぶを商賣に、都へ上る事でござる。▲アドさてく、それこそ重疊の事よ、

北野の御手水の夜—推州府志に七月七日松梅院主一人入内々陣御手水とある神事也

若狭の小濱の昆布賣—和漢三才圖會に昆布は松前津輕南部共に名有り並に若狭に傳送す小濱の市人之を調製して四方に送るとあり  
嘉例—吉例  
重疊の者—至極好き者



御仁體—身分ある人

某も都へ上る者ぢや。同道致さう。▲こぶ賣いやく、こなたは御仁體と見受けてござる。私がやうな者は、おつれには似合ひませぬ。かうお先へ参ります。▲アドいや、これ、總じて世には似合つたつれもあり、又似合はぬつれもある。是非とも同道申さう。▲こぶ賣それならばお供致しませう。▲アドさあく、おぢやれ。▲こぶ賣畏つてござる。▲アドやあさて、ふと詞をかけたに、早速同心のしてくれられて、これ程嬉しい事はをりない。さて、わごりよに始めて會うて、頼みたい事があるが、聞いておくりやらうか。▲こぶ賣いかにも、わたくしに似合ひました御用ならば、うけたまはりませう。▲アド無心を云へば、早速聞いてくれうとあつて満足いたす。まづ一禮を申す。▲こぶ賣これは迷惑でござる。▲アドいや、別の事でもない。某は、人あまた使ふものなれども、今日は方々へつかはして、一人も人が無いゆゑ、見らるゝ通り、自身太刀を持つておぢやる。これが、わごりよに持つて貰ひたいと云ふ事でをりやる。▲こぶ賣いかにも畏つてござるが、さやうの結構な太刀は、見た事もござらず、まして持つた事はなほござりませぬ。これは御免されませ。

ていどきつと  
これはざれごと  
一刀に手をかけ  
て囁したるを冗  
談也といふ

▲アド いや、結構なとおしやれば、迷惑いたす、わるい太刀ぢや程に、持つておくりやれ  
 ▲こぶ賣 是はどうござつても御免されませ。▲アド さては侍に一禮まで云はせて、ていど  
 お持ちやるまいか。▲こぶ賣 いや、持ちませう。▲アド なんぢや、持たう。これはざれごと。  
 氣にかけずとも、持つておくりやれ。▲こぶ賣 こなたのおざれごとは、いやなおざれごと  
 でござる。▲アド さあく〜おぢやれ。▲こぶ賣 心得ました。▲アド これ〜、そのやうな太刀  
 の持ち様があるものか。手に持つておくりやれ。▲こぶ賣 手があきませぬ。▲アド それ〜  
 左の手があいてある。▲こぶ賣 これはかう、肩をかへる時いまする。▲アド すれば、こち  
 らの手が遊んである。▲こぶ賣 これもかう、肩をかへる時いまする。▲アド これは昆布が  
 あるによつてぢや。どれ〜、そのこぶを買うておまうせうぞ。▲こぶ賣 それは忝なうご  
 ざります。▲アド さあく〜おぢやれ。▲こぶ賣 参ります。▲アド 是はいかな事。それは進上  
 太刀の持ちやうぢや。身にひつ添へてお持ちやれ。▲こぶ賣 心得ました。▲アド おぢやるか。  
 ▲こぶ賣 参ります。▲アド これはいかな事。それは子をだいたやうな持ちやうぢや。そなた

がつきめ一餓鬼  
めとて斬つてか  
かる也

は、眞實太刀の持ち様を知らぬさうな。みどもが教へておまうせうぞ。▲こぶ賣 それは忝  
 う〜ざる。▲アド 總じて、自身の太刀は、左にもち、主の太刀は、右に持つものぢや程に  
 右に持つておくりやれ。▲こぶ賣 私はおまへの内の者ではござりませぬ。▲アド 内の人では  
 なけれども、頼む上からぢや程に、持つてくれさしませ。▲こぶ賣 なるほど心得ました。  
 ▲アド さて、この上でまだ無心が有るが、これも聞いておくりやらうか。▲こぶ賣 この上で  
 ござる。いかやうな事なりとも、仰せられませ。▲アド いや、別の事でもない。若し道で近  
 附に逢うた時、そなたを内の者のやうに云はうが、答へておくりやらうか。▲こぶ賣 何が  
 さて、うけたまはりませう。▲アド なんぢや、聞いてくれう。某がつかふ者を太郎冠者と  
 云ふ。太郎冠者と云はゞ、答へておくりやれ。▲こぶ賣 畏つてござる。▲アド やい〜太郎冠  
 者来るか。▲こぶ賣 はあつ。▲アド ひつついて来い。あはよよよ。▲こぶ賣 さても〜、腹の  
 たつ事でござる。がつきめ。遁さぬぞ。▲アド あよ、ざれ事をするな。いや〜、そちにそ  
 れを持つたしておくによつてぢや。さあく〜、その太刀をおくせ。▲こぶ賣 なんの、おくせ。

あくあぶない  
太刀を振きて向  
へば也

仕儀一具合也都  
合也

▲アドあよあぶない。これはなんとするぞいの。▲こぶ賣なんと、これがよいか。最前の様に云うたがよいか。たつた一打にするぞ。▲アドあよ、あぶない。これはまづなんとするぞいの。▲こぶ賣なんとするとは。そのさいて居る物をおくせ。▲アドこれか。▲こぶ賣なかなか。▲アドこれはやりたうはあれども、侍の一腰をはなす事はならぬ。▲こぶ賣おくしやるまいか。▲アドあよ、やるてに。これく。▲こぶ賣柄の方からおくせ。▲アドやりやうが氣に入らずは、おかうまで。▲こぶ賣何、おくすまいか。▲アドあよ、はてさて、やると云ふに。これくあぶない。▲こぶ賣やい。▲アドなんぢや。▲こぶ賣この昆布を賣れ。▲アド侍の昆布を賣つた事はない。▲こぶ賣何、賣るまい。▲アドはてさて賣ると云ふに。やいく、昆布買へく。▲こぶ賣やい。▲アドなんぢや。▲こぶ賣そのやうに云うて、皆様が召すものか。なるほど慇懃に賣れ。▲アド慇懃に賣ると、その太刀や刀を返すか。▲こぶ賣それはその時の仕儀によらう。▲アドそれならば賣らうが、さりながら昆布の賣りやうを知らぬ。賣つて聞かせ。▲こぶ賣いかにも賣つて聞かさう。よう聞け。▲アド心得た。▲こぶ賣昆布召され候

へ。こぶめされ候へ。若狭の小湊のめしのこぶを召し上げられ候へくと、かう賣れ。▲アド心得た。昆布めされ候へく。若狭の小湊のめしのこぶを召し上げられ候へく。さあく返せ。▲こぶ賣なんの返せ。この度はまた諂節に賣れ。▲アド賣らでかなはずは、賣つて聞かせ。▲こぶ賣心得た。うたひぶしこぶめせく、おこぶめせ。わかさをばまのめしの昆布、若狭の浦のめしのこぶと賣れ。▲アド心得た。前の知ぐうたひぶしに賣る。さあく返せ。▲こぶ賣なんの返せ。▲アドこれはなんとする。▲こぶ賣今度は淨瑠璃節にうれ。▲アドこれも賣つてきかせ。▲こぶ賣心得た。つれてんく、てれくてん。まづこれが三味線の心持ちや。こぶめせく、おこぶめせ。若狭の小湊のめしのこぶ。つれてんく、てんと賣れ。▲アドこぶろえた。前の如く淨瑠璃節に賣る。さあく、かへせ。▲こぶ賣なんのかへせ。今度は小歌節にうれ。これも賣つてきかせう。昆布めせく、おこぶめせ。わかさをばまのめしのこぶ。めしのこぶ。この、しやつき、しやく、しやつきく、しやつきしや、と賣れ。▲アドさやうに賣つたらば、その太刀や刀を返すか。▲こぶ賣その時の仕儀によらう。▲アドそれなら



にじかふむつた者一武士とて二字蒙つたる者の意か

よるこぶ一喜ぶに昆布を掛く

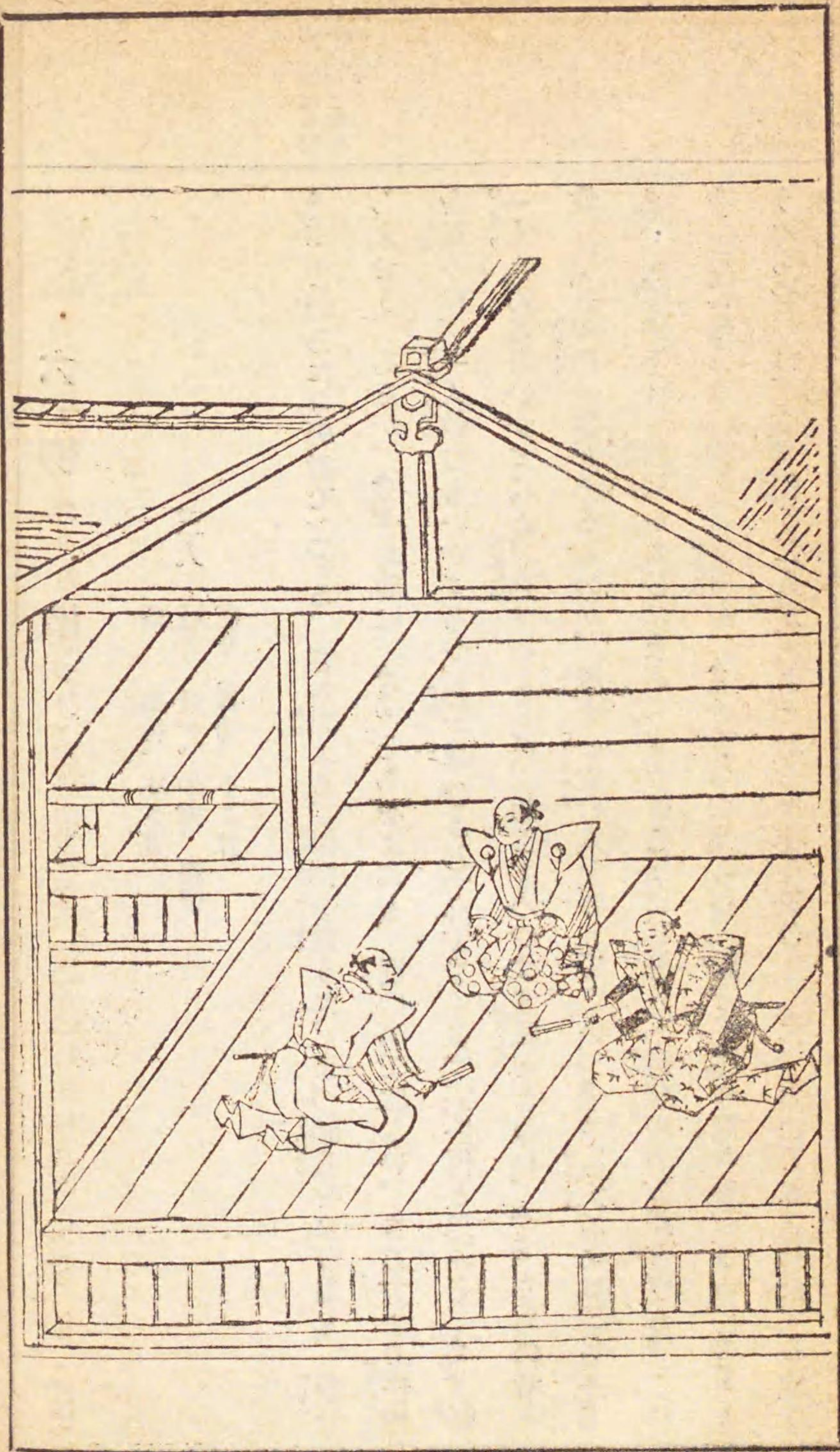
ば賣らう。前の如く小うたぶしに賣る。▲こぶ賣やい。▲アドなんぢや。▲こぶ賣にじかふむつた者をいつまでなぶらうぞ。某が行末繁昌と賣つたらば。この太刀や刀を返さうぞ。▲アドそれはまことか。▲こぶ賣まことぢや。▲アド眞實か。▲こぶ賣眞實ぢや。▲アド一定か。▲こぶ賣一定ぢや。▲アド謠やらく、數知らずの君が御代のよろこぶや。▲こぶ賣何とよろこぶと。かへすまいぞ、この太刀。これがほしいか。▲アドあの横著者。やるまいぞく。

六 柳 樽

三人 殿 長袴、小き刀  
冠者 冠者、半袴、腰帶  
庄介 長袴、小き刀

柳樽一漆塗の細長き酒樽也祝事に使用す

▲このあたりの者でござる。さる方より、柳樽を貰うた。まづ冠者をよび出し、談合しませう。あるか。▲冠者 お前に。▲このそちをよぶも、別の事ではない。さる方より柳樽を貰うた。一人飲むもいかぢや。誰ぞ呼びまして飲まうと思ふが、何と思ふぞ。▲冠者 御一人まるるもいかぢやと思召す事ならば、おこころやすう私とまるれ。▲このうちの者と飲うで、面白い事があるものか。誰ぞ心安い人を呼うでこい。▲冠者 畏つてござる。▲このえい。▲冠者 あゝ、誰殿をよびにまるらうぞ。ことに、身共へ御懇のお方がござる。これをよびに参らう。物も。案内も。▲庄介 誰ぢや知らぬ。誰ぞ。▲冠者 冠者でござる。▲庄介 ようおぢやつた。▲冠者 頼うだ人が、よそから柳樽を貰ひました。おいでなされますやう



にと申されまします。▲庄介おれはつひに行た事がないほどに行かれまい。▲冠者 私にねご  
 んごろを、よく知つてゐられます。おいでなされて下されい。▲庄介それなら参らうか。  
 ▲冠者さらばござりませい。▲庄介わごりよ案内に、さきへ行け。▲冠者さらば、案内のため  
 参ります。ござれ。これにお待ちなされい。▲庄介心得た。▲冠者申し、歸りました。  
 ▲との冠者戻つたか。誰様を呼うで来た。▲冠者庄介様を呼びまして来ました。▲とのあれは  
 酔狂をする人ぢや。▲冠者それならば、戻しまうせう。▲とのいや、呼うで来て往なき  
 れはせまい。さりながら、そばへ使ふ者がない。▲冠者某をつかはしられい。▲とのおの  
 れめは躰がないところで、使はれぬ。▲冠者教へてつかはしられい。▲との何事も身共が云  
 ふやうにせい。▲冠者 畏つてござる。こなた様の教へらるやうに致しまうせう。▲との  
 こちへ通せ。▲冠者 畏つてござる。▲とのなう、こちへ通らしられい。▲庄介心得た。只今  
 は御使 忝うござる。▲との早々おいで、過分にござる。冠者、さかづきを出せ。▲冠者冠  
 者さかづきを出せ。あまは何事も主の云ふごとく口まねをす  
 る。をさめにうちこかしてはいるなり。

琵琶借座頭一  
名伯養

七 琵琶借座頭

三人 伯養 頭巾、下袴、水衣、腰帶  
 勾當 角帽子、衣、下長袴、腰帶  
 琵琶主 長袴、小刀

檢校一官官也勾  
當座頭の上は位  
ナ

▲はくやうこのあたりの座頭でござる。やがて、檢校様たちの寄合がある。某の頼うだ者も出られます。琵琶が損ねた、借りて来いと申さるよ。参り、借りて参らう。貸して下さるればよいが、何とあらうぞ。これぢや。お案内も。ござりまするか。▲びは主案内とは誰ぢや。▲はくやう某でござる。▲びは主何と申して来たぞ。▲はくやう某の師匠坊が、やがて檢校衆の寄合に出られますが、琵琶が損ねましてござる。こなたのびはお借しなされて下されいと申さるよ。▲びは主近頃やすい事。貸してやらう。▲はくやう忝うござる。▲勾當これは、このあたりの勾當の坊でござる。近日檢校たちの寄合に、某も、出よとおしやる。琵琶の絃がきれた。こよによい琵琶を持った人がある。これを借りに参



推参―無禮

はくやう―履く  
様に伯養を掛く

らう。ものもく。▲びは主たれぢや知らぬ。誰そ。▲勾當 勾當の坊でござる。▲びは主よう  
 ござつた。▲勾當 ちと御無心がござる。近日檢校たちのよりあひに、某も参るが、琵琶の  
 絃がきれました。こなたの琵琶を貸して下されい。▲びは主 やすい事ぢやが、早、伯養に  
 貸してござる。▲勾當 あいつめは琵琶は入るまい。それがしに貸して下されい。▲はくやう い  
 やく、わたくしが借つてござるぞ。▲勾當 やい、伯養。おれが借る。おのれ推参な。  
 ▲はくやう そなたはわがまよな事を云ふ。▲勾當 憎いやつの。▲冠者 これく、その如く云う  
 ては、どちらへも貸すことはならぬ。とかく何でも勝負をして、勝の方へ貸しまうせう。  
 ▲勾當 勝負には歌をよみませう。▲はくやう 申し、勾當の坊が歌をよまれたらば、某も  
 よみませう。▲びは主 さあ、よましられい。▲勾當 庭中に齒缺の足駄ぬぎすてて、はくや  
 うなくて谷へほうかす。▲びは主 さあ、よめ。▲はくやう 酒もりの座敷へ人の呼ばざれば、  
 犬や勾當門にたよすむ。▲勾當 おのれ、犬にたとへたか。にくいやつ。▲はくやう 足駄にた  
 とへたか。▲びは主 このとほりでも埒あかぬ。▲はくやう 今度は相撲とりまうせう。▲勾當 あ

いつがとらば、とりませう。▲びは主 さあ、お手つ。▲勾當 伯養がにけるく。▲はくやう 勾  
 當が逃げらるよ。▲びは主 身共が手をとりに組ませうぞ。お手つ。▲はくやう どこへ。負くる事  
 ではない。▲勾當 おのれに負けうか。▲はくやう なう、それがしぢや。やあ。▲勾當 や  
 あ。▲はくやう お手つ。勝つたぞ。▲勾當 どこへ。おれをこかして。やるまいぞ。

### 八 因幡堂

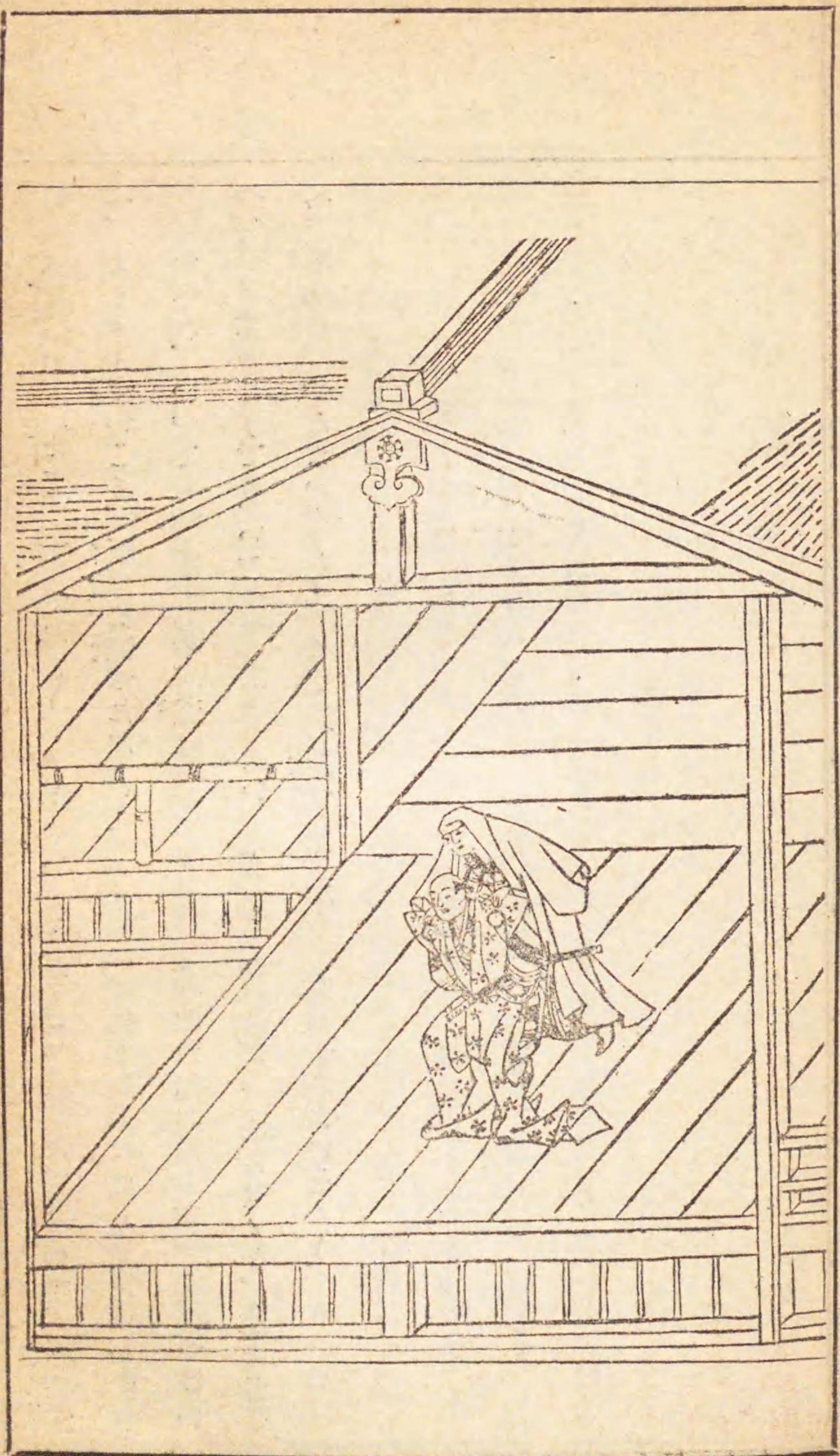
二人

男 長袴、小さ刀  
女 びなん、箔、さげ帯、かづき

去つて一離縁すること

因幡堂一京にあり平等寺と云ふ薬師如来を祀る

△男 これは、このあたりの者。某の女は大酒飲ゆゑ、去つてござる。因幡堂へ参り、女房の事を、通夜して、御夢想次第に持ちませう。参る程にこれぢや。拜みまして、通夜仕らう。△女房 妾が男めが、妻の事を、因幡堂へ参り、御夢想次第に致さうと申すと聞いた。去られたは苦しうないが、心がにくい。さればよく寝た。やいく、西門に立つたを女房に持てよ。△男 はあく、忝やく、まづ西門へ行て見やう。さればく、これにござる。申しく、御夢想のお妻か。△女房 つまぢやと云うてうなづく。△男 もはや追付宿へお供申しませう。某が乃負うて参らう。負はれさしられませい。是でござる。おりて、そのかづき取らせられませい。△女房 いやまづ、盃事しませう。△男 飲みて女にさす。ひきうけく。△男 また大酒飲ぢや。もはや納めませう。そのかづき取らせられう。いやでもおうでもかづきを取



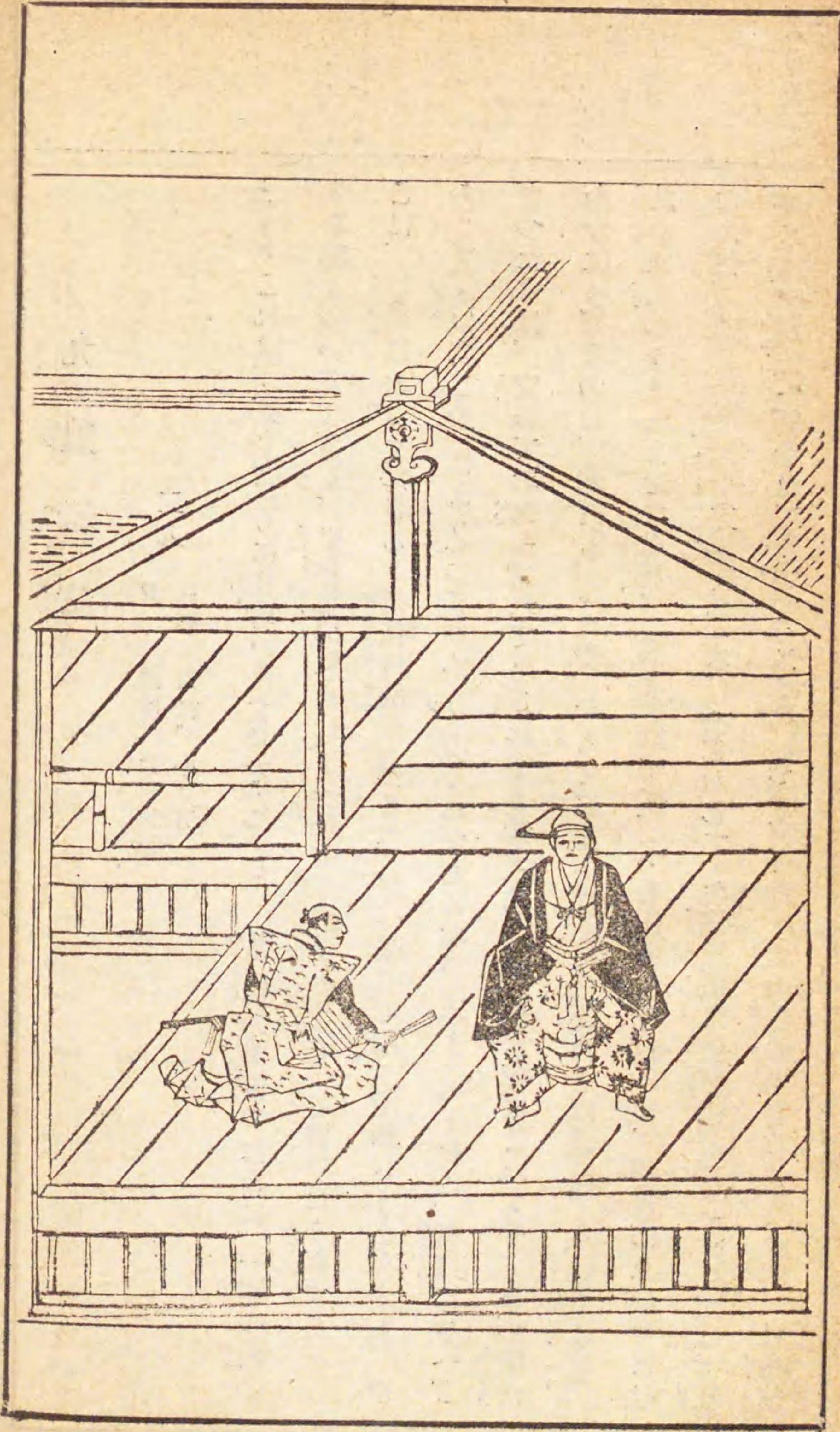
らねばならぬ。平にお取りやれく。▲女房やいくをとこ。わらはをさつて、因幡堂へ、ようく妻のこと、祈念に籠つたなく。▲男われは何しに來たぞ。▲女房何しにきた。おのれ、いやでも御夢想ぢや。添はねばならぬ。▲男おれはおぬしがやうな者はいやぢや。▲女房どうでも、いごかす事でもない。▲男あよかなしや。ゆるせく。▲女房どこへ。卑怯者。やるまいぞく。▲男まづ談合してから。▲女房やるまいぞく。

九魚説法

一人 僧 頭巾、衣、珠敷  
旦那 長袴、小刀

お目くださるゝ  
目をかけらるゝ  
かはう一乞はろ  
の詛  
作事 普請  
意 氣の毒 迷惑の

▲與平治 これは、このあたりに住居いたす者でござる。某親の追善のために、一間四面の堂を建立致いてござる。堂供養のために、一座の法談をも、述べて貫ひたう存する。ここに、某にお目くださるゝ御住持様がござる。是へ参りて頼うで参らうと存する。やあさて、内にござればようござるが。日頃それがしにお目を下さるゝ程に、御内にさへござつたらば、定めてお出なされて下されうと存する。や、参る程にこれぢや。まづ案内をかはう。ものも。案内も。▲僧や、おもてに案内がある。案内とは誰ぞ。え、與平治殿。此中は久しう見えませなんだ。▲與平治 此中は、ちと作事など致いて、それゆる参りませなんだ。▲僧それは御尤でござる。▲與平治して、お住持様は御内にござりますか。▲僧住持は此中田舎へ行かれて留守でござる。▲與平治 それは氣の毒な事でござります。只今参



ります事、別の事でもござりませぬ。私、親の追善のため、一間四面の堂を建立致いてござる。堂供養のため、一座の法談をも述べて貰ひたう存する。御内にござりませいで氣の毒に存じます。はや御布施の用意も致いてござる。▲僧その様な事を聞かれたらば、一しほ残多う存ぜらるよでござらう。▲與平治さてもく、氣の毒な事でござる。え、たれかれと申さうより、お前おいでなされて下されませ。▲僧なるほどまゐりませう。暫くそれにお待ちなされませ。▲與平治心得ました。▲僧なうくうれしや。はや御布施の用意もしたと云はるよ。このやうなうれしい事はござらぬ。さりながら某は、經陀羅尼は存ぜず、法談は知らず。御布施はほしよ。これはまづ、なんとせう。や、某せがれの時分潜邊にすんで、魚の名をあまた存じてゐる。これをとりあつめ、法談のやうに申しなし、御布施をとつて歸らうと存する。▲與平治これはおこしらへが出来ましてござりますか。▲僧私が參れば、内に留守がござりませぬによつて、留守の義を申し付けてござる。▲與平治これは御尤でござる。いざお出なされせ。▲僧お前からござれ。▲與平治參りませ

陀羅尼呪文のこと





十首

引

八人

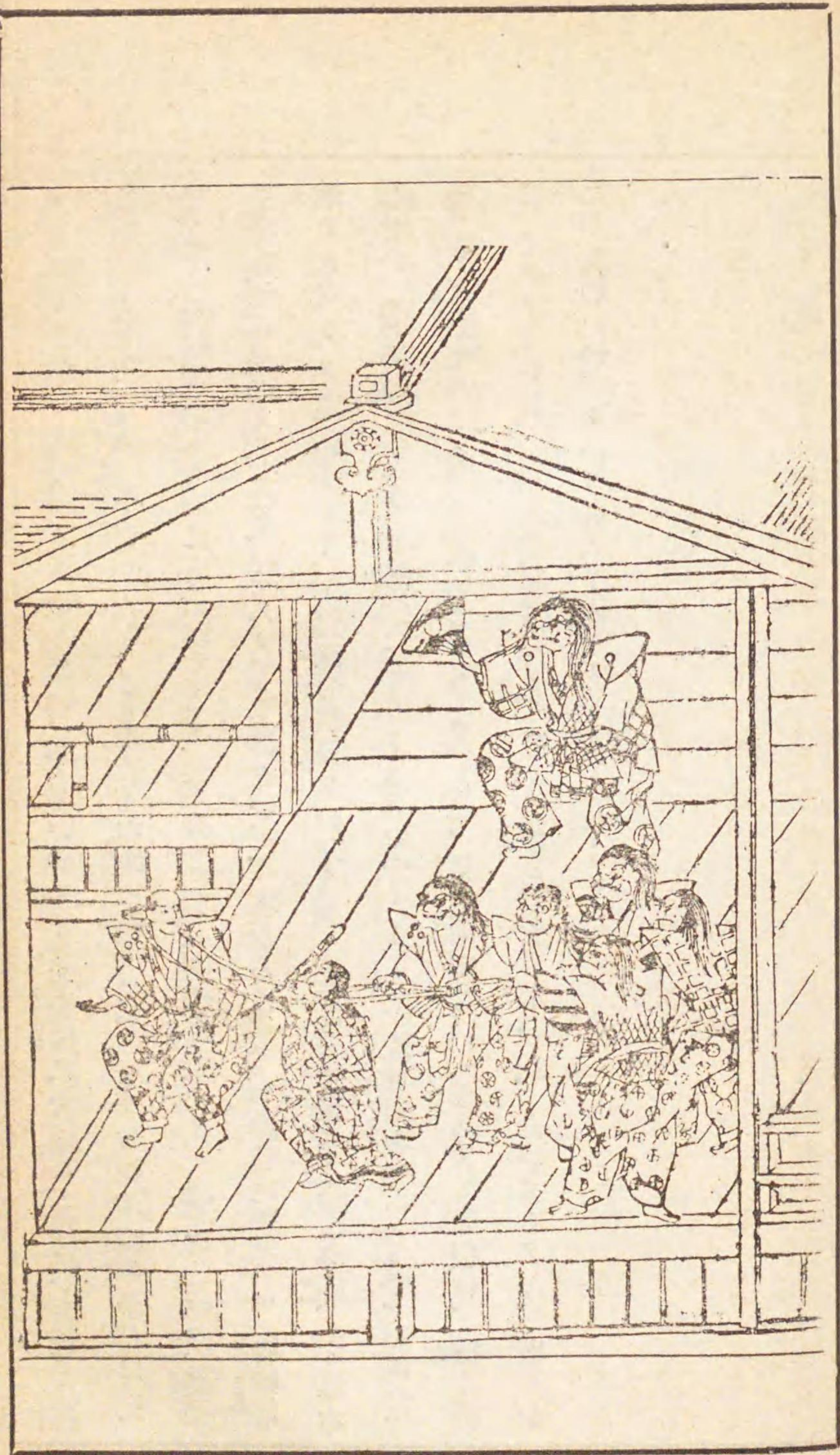
八郎 括り袴、太刀、腰帶  
鬼 半姫、腰帶  
姫 かつら、乙面、箔、さげ帯  
鬼 五人、半袴、腰帶、赤頭、面

▲八郎 鎮西の八郎爲朝とは、某が事ぢや。おれ程の力は世にござない。鬼が島へわたり、鬼どもと力くらべして、寶物どもを取つて參らう。いかな鬼も、おそらく力は及ぶまい。

▲鬼人臭いが、異な事ぢや。おのれは何者ぢや。▲八郎 娑婆の者ぢや。▲鬼 よい所へ來た。取つて食はう。姫に生きた人を食はせぬ。連れて來て、食ひはじめをさせまうせう。姫

姫。▲姫 なんぞ。▲鬼 來い。よい食物がある。あれ、食ひはじめに食へ。▲姫 わんく。あふ、こはやく、嚇しをる。▲鬼 にくいやつ。なぜに食はれぬ。▲八郎 とがもない者を、食はうとおしやるは無理ぢや。勝負をして負けたらば、いかにも食はれまうせう。勝つたらば寶物を取らう。▲鬼 聞えたく。いざ來い。勝負に何をするぞ。

聞えたり分つたの意



▲八郎 腕押を致さう。▲鬼 さあく来い。▲八郎 いやく、お姫様に食はるゝ程に、お姫と勝負しまうせう。▲鬼 尤ぢやく。さあくお姫、腕押せい。▲姫 おれは腹押がしたい、▲鬼 親のそばで、入らぬこと云はずとも、腕押せい。▲姫 あ痛やく。▲鬼 おのれは、姫が手をなぜにきつうしたぞ。そろくしはせいで、痛がるに。▲八郎 勝負に勝つた。寶物を取りませう。▲鬼 いやく、まだ餘の勝負せい。▲八郎 今度は臆押致さう。▲鬼 姫、すねおしせい。▲姫 あ痛く。▲八郎 勝つたぞ。▲鬼 いやく、今一度首引をせい。▲八郎 心得た、▲鬼 姫、首引せい。▲姫 いやでござる。▲鬼 まづ、父次第にせい。そろくと引け。噓す程に、そろくひけ。鬼どもみなく出よく、姫がかたが弱いわ。えいさらく。姫がたがよわいわ。えいさらく。

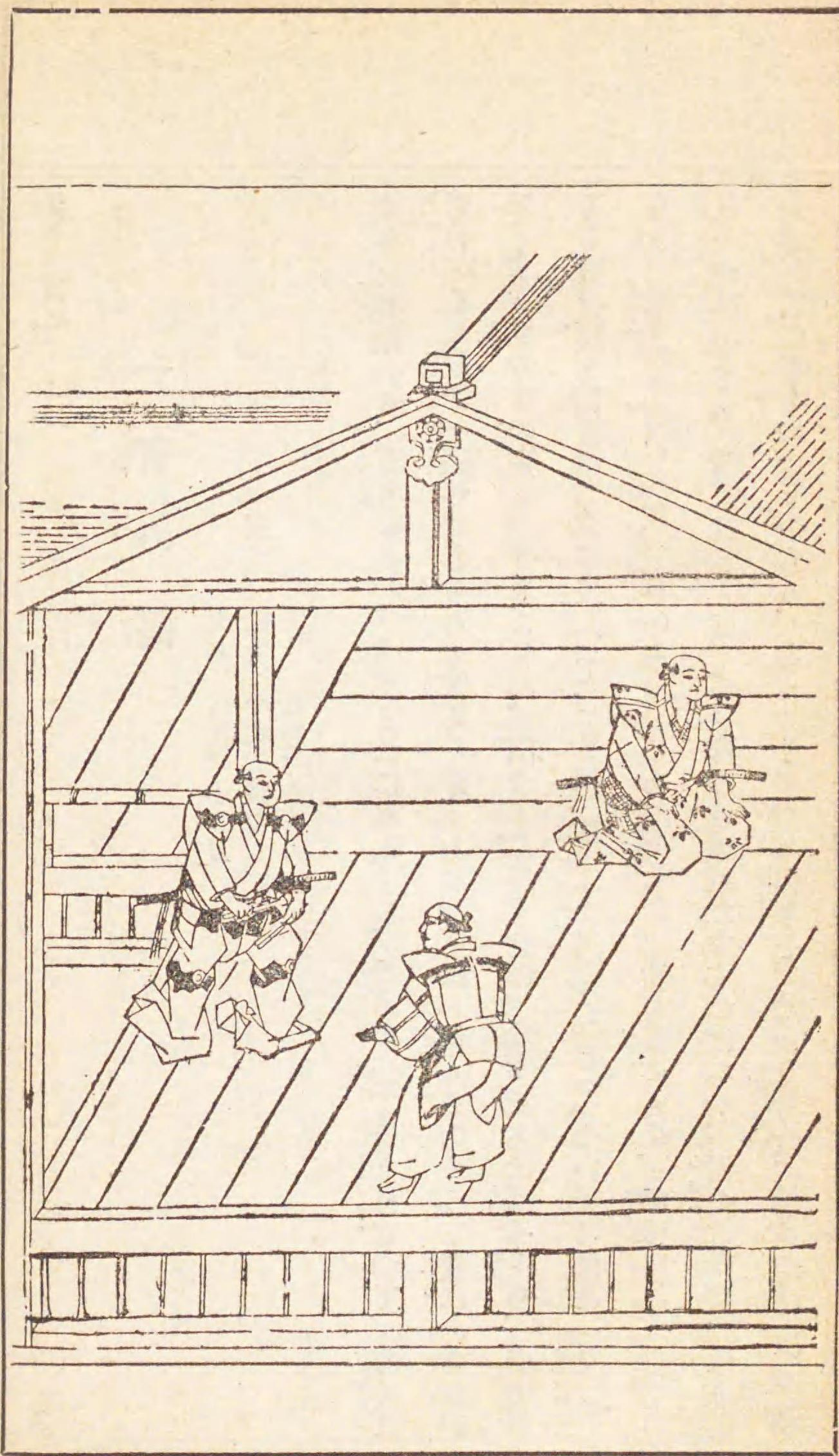
卷之二

一 寶の槌

三人 大名 長袴、小き刀  
冠者 半袴、腰帶  
すり 長袴、小き刀

▲大名 大果報の者、冠者ゐるか。▲冠者 これにゐます。▲大名 やがて皆々打寄つて、眼前に奇特のある寶物を競べさしらるゝ筈ぢやが、おれが所に、何もそのやうな寶はあるまいぞ。▲冠者 さやうの寶はござりませぬ。聞きも及びませぬ。▲大名 そちは都へ上り、奇特のある寶を買つて參れ。▲冠者 畏つてござる。都へ上る。うれしや、ついでに都を一見仕らう。都へは著いたが、寶のありどころを知らぬ。賣り買ふもの、呼ばはつて通る。某もよばはらう。寶買はう。▲すり 都に住居致たすつばぢや。田舎者が寶買はうと云ふ。この者をぬいてやらう。なう。▲冠者 何事ぞ。▲すり 其方は何事を呼ばはるぞ。

ぬいて一だまし  
て也



▲冠者 寶を買ひたい所で、呼ばはり申する。▲ナリさてく、其方は仕合のよい人の。某が  
 寶屋の亭主く。▲冠者 會ひ申したがよい仕合。寶買ひませう。▲ナリ 賣りませう。▲冠者 見  
 せて下されい。▲ナリ 畏つた。田舎者ぢや。ぬいてやらう。これく寶見さしませ。  
 ▲冠者 これに奇特があるか。▲ナリ この寶は、隱簀、隱笠、打出の小槌、三つの寶のうち、  
 この槌をもつて打ち出せば、ほしいものが出申する。▲冠者 證據が見たいまで。▲ナリ やす  
 い事。其方のほしい物打出してごらうぜ。▲冠者 脇差うちだませう。▲ナリ 唱へる事があ  
 る、教へ申せう。やぐ。▲冠者 おほえた。蓬來の島なる鬼の持つた寶は、隱簀、隱笠、打  
 出の小槌、諸量無量、じよくくわつしきこくにくわつたり。▲ナリ 脇差が出たわ。▲冠者 出  
 ました。證據のためぢや。これを某が貫ひませう。▲ナリ 進するぞ。▲冠者 代物は何程ぞ。  
 ▲ナリ 萬疋ぢや。▲冠者 買ひませう。乃ち代物を三條の大黒屋にて進ぜう。▲ナリ 受取りませ  
 う。▲冠者 さらばく。うれしやく、よい寶を買ひ取つた。この山申さう。冠者が戻つ  
 てござるく。▲大名 何と、寶とよのへたか。早く見せてくれい。▲冠者 寶ごらんなされま

せい。▲大名これは入らぬ。寶見せい。▲冠者寶とはこのこと。かくれみの、かくれ笠、この打出の小槌で、ほしい物を打出します。この脇差を打出して、證據に取つて来てござる。▲大名打出の小槌とはこの事か。さらば、何ぞ打出せ。▲冠者お望次第でござる。▲大名さいく馬が入る。うちいませ。▲冠者心得てござる。蓬萊の島なる鬼の持った寶は、かくれ籠、かくれがさ、うちでのこづち、諸量無量じよくくわつしこくにくわつたり。▲大名出たか。▲冠者馬が出ますが、この馬には物を食はぬやうに、口をつけますまい。▲大名出にくからう。口を付けて打ち出せ。▲冠者前の如く云うて、打ち出すと云うて、馬が出ませうが、道の速いやうに、足をたんとつけませう。▲大名つねの馬のやうにして打ち出せ。▲冠者この馬に馬道具添へて、つい乗るやうにして、打ち出す程に、そのまゝ乗つてござらうじませい。▲大名こしらへてゐるぞ。▲冠者蓬萊の島なる鬼の持った寶は、隠籠、隠笠、打出の小槌、諸量無量じよくくわつしこくにくわつたり。▲大名さあ乗つたぞく。▲冠者馬ではござらぬ。冠者でござるく。▲大名憎いやつの。やるまいぞく。

さいく度々

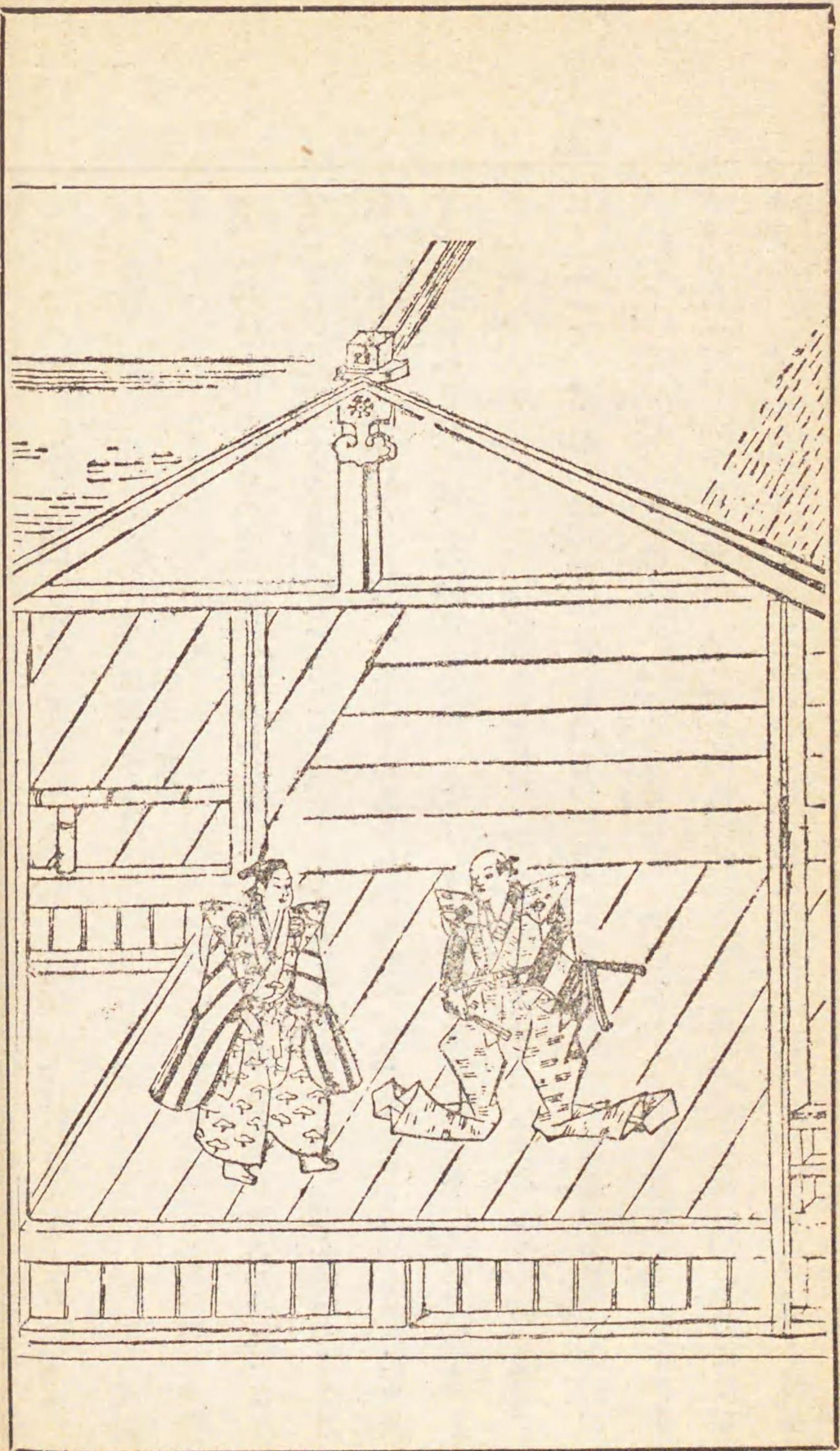
こしらへて度々

二 伊呂波

二人 親 長袴、小き刀 子 半袴、腰帶

▲親これはこのあたりの者。忤が成人した程に、手習をさせうと思ふ。居るか。▲子なんでござるぞ。▲親そちも成人したところで、手習をしたらばよからう。▲子心得てござる。教へて下され。▲親いろはにはへとちりぬるをわかと云へ。▲子そのやうに、立板に水流すやうに教へられては、おほえませぬ。そろくと教へて下され。▲親心得た。い。▲子とうしん。▲親何事を云ふぞ。▲子蘭をひけば、燈心ができます。▲親ろ。▲子かい。▲親なにと云ふぞ。▲子船には權が添うたものぢや。▲親走り智慧な。是は高野の弘法大師様のなされた、いろはと云ふ物ぢや。▲子弘法様の四十八にならしられますか。▲親たど何事も某が教へて云ふやうに云へ。▲子親ぢや人の教へらるゝ様にさへ云へば、手習になりまするか。▲親なかく。何事も云ふやうに、教へる様にさへすればよいぞ。▲子それは

走り智慧先走り



云ふませう一刊  
本に従ふ

やすい事ぢや。こなたの教へらるゝやうに云ふませう。▲親いろはにほへと云へ。▲子いろはにほへと云へ。▲親さうではない。いろはにほへとばかり云へ。▲子さうではない。いろはにほへとばかり云へ。▲親まだ、走りぢゑなやつ。▲子まだ、はしりぢゑなやつ。▲親にくいやつ。口まねをしるか。▲子憎いやつ。口まねをしるか。▲親あゝ腹だちや。▲子あゝ腹だちや。▲親おのれを何とせう知らぬ。▲子おのれを何とせう知らぬ。▲親腹のたつ。まづかうしたがよい。▲子腹のたつ。まづかうしたがよい。お手つ。

三名取川

二人

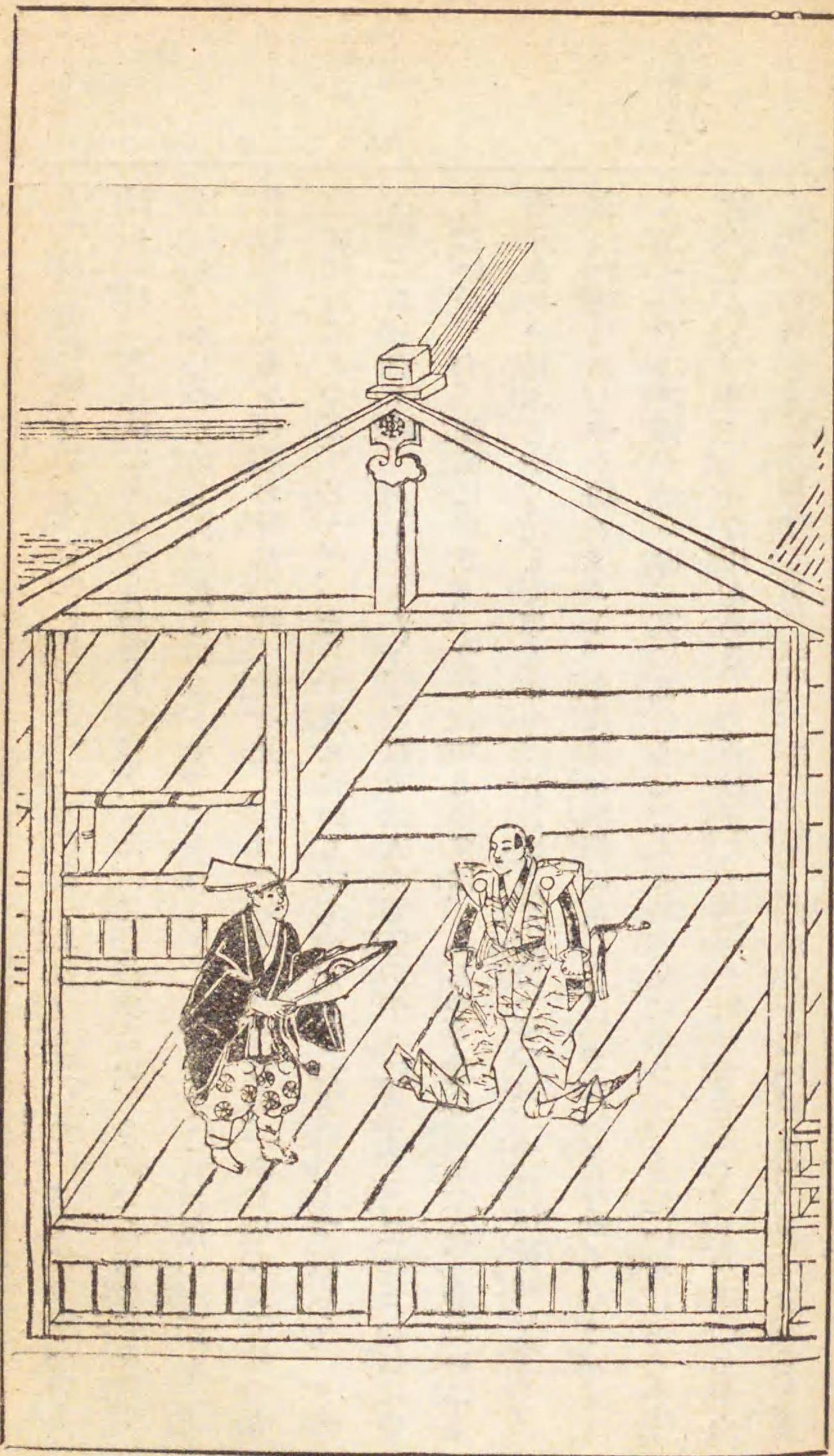
僧 頭巾、衣、括り袴、腰帶、珠數、笠  
何某 長袴、小さ刀

次第一 誦ぶし

戒壇一僧侶に戒を授くる壇也古くは東大寺などあり後には専ら延暦寺也

はりがへーかけがへ

次第僧 戒壇踏んで受戒して、く、わが古寺にかへらん。詞これは遠國方の者でござる。某が國の習で、戒壇の踏まぬは、出家のやうに申さぬによつて、このたび戒壇の地をふみ、受戒まで致いてござる。名を付いて下らうと存じて、さるお寺へ参りてござれば、大兒と小兒と、手習をなされてござる。おそばへそろく参りて、私は田舎者でござる。未だ、定まる名がござらぬほどに、名をつけて下されいと、申してござれば、大兒のきたい坊とつけられてござる。はりがへの名も、つけて下されいと申してござれば、小ちこのふしやう坊とつけられた。その上御念が入つて、衣の袖にきたい坊、小兒のお手でふしやう坊と、書き付けて下された。急いで國許へ歸らう。や、さて年月の念願でござつたに、この度願成就いたし、このやうな嬉しい事はござらぬ。さて、最前の名は



ひたもの申して  
一専ら口に唱ふ  
る意

どんぎやうは  
勤行なるべし

もの坊、あれは、き坊、え、きたい坊であつたものを、忘れうと致いた。さてはりがへの名  
がもの坊、あれはなんとやら坊であつたが、え、思ひだすまい。さいぜんの書付を見や  
う。え、ふしやう坊であつたものを、すでに忘れうとした。さてこれに氣の毒がある。  
若しそちが名を何とお尋ねの時、袖を見て、きたい坊でござるの、ふしやう坊で候のと  
云はれぬによつて、どうぞ、そらで覺えたいものぢやが、ひたもの申して參らう。きた  
い坊にふしやう坊、くくくく。これでは人が氣達のやうに申す。耳にたよぬ様に申  
したいが、や、謠節に申さう。きたい坊と申すは、ふしやう坊の御事なり。きたいふし  
やうきたい坊ふしやう坊とぞ申しけり。これは重疊の謠になつた。今度は舞節に申さう。  
きたい坊にふしやう坊くくく。今度は小歌節に申さう。きたい坊にふしやう坊く  
く。是では道抄が參らぬ。某に似合うたどんぎやう節に申さう。きたい坊にふしやう  
坊くく。是に大きな川がある。これは上にもあつた川かぢやまで。上が降つたか水  
が濁つた。まづ急いで渡らう。川にてこさてく、にがくしい事ぢや。まづ急いでまる

権現一熊野三所  
権現とて本宮新  
宮那智也  
光源氏の古云々  
一源氏物語賢木  
の巻に源氏の歌  
あり一ふりすて  
てけふはゆくと  
も鈴鹿川八十瀬  
の波に袖はぬれ  
じや一御息所の  
返歌もあり  
安の川一野洲川  
のこと

らう。何やら落したやうにもあるが、何も落しはせぬが。珠數あり、笠まり、扇あり、  
身共が名を忘れた。あれはもの坊、え、思ひだすまい。さいぜんのやうに、拍子にかよ  
つて申して見やう。もの坊と申すは、なんとやら坊のことであつた。書付を見やう。南  
無三寶名を流した。遠うは參るまい。最前の所へ行て、抄はうと存する。こよであつた。  
舞流ははてじ水の面く、底なるおれを抄はう。われはまた、戀をする身にあらねども、  
うき名をながす腹たちや。地川はさまざま多けれど、伊勢の國にては、天照大神の住み  
たまふ、御裳濯川もありやな。熊野なる音無川の瀬々には、権現御影をうつしたまへり。  
光源氏の古、八十瀬の川とながめ行く、すぐか川をうち渡り、近江路にかよれば、幾瀬  
渡るも安の川、洲股、あじか、ぐんぜ川、側は淵なる片瀬川、思ふ人によそへて、阿武  
隈川もこひしや。つらきにつけてくやしきは、あひそめ川なりけり。墨染の衣川、衣の  
袖をひたして、岸かけの柳の眞菰の下を、おしまはしくて抄ひあけく、見れば雑魚  
ばかり、わが名は更になかりけり。わが名はさらになかりけり。さてもことの外のさこ

洲股一墨俣川とも書く今は長良川の別名なれども木曾川の下流を云ふ  
 あじか一足近川とも阿志賀川とも書く木曾川の分流也  
 ぐんぜ川一郡上川か上之保川(長良川の上流)のこと  
 阿武隈川一磐城を流る逢ふ意につゞけたり  
 あひそめ川一筑前太宰府にある藍染川也逢初の意に用ゐる  
 衣川一陸中  
 非時一午後の食事  
 名取川一陸前  
 御假名一假名は通稱

ぢや。非時の汁にしたらばよからう。▲何某これは何某でござる。これく御坊、この所は殺生禁斷の所ぢやに、なぜ殺生めさる。▲僧殺生はいたさぬが、この川は何と申す。▲何某名取川と申す。▲僧向の在所は。▲何某名取の在所。▲僧こなたの御假名は。▲何某名取の何某でおぢやる。▲僧さては、最前の名をきやつがしてやつた。この方へ取らうと存する。私 は田舎者でござる。はるく上つて、付けて貰うた名でござる程に、最前の名を下されい。▲何某そなたの名が何と云ふやら存せぬ。▲僧さいぜん、この川の名は名取川、こなたの御假名は、名取の何某ぢやと仰せられぬか。▲何某何某ぢやによつて云うたが、それが何と。▲僧すれば、こなたが取らせられいで、誰が取らう。慈悲になりませう。下されい。▲何某希代な事をおしやる。▲僧そのきたい坊と申すが、私が名でござる。とてもものに、はりがへの名をも下され。▲何某さいぜんのは、ふと申し合せて仕合はりがへの名は存せぬ。▲僧この名を云はねば、どつちへもやらぬ。▲何某さてく、不祥な所へ來かよつた。▲僧そのふしやう坊と申すが、わたくしが名でござる。▲何某ふしやう

してやつた一取つたの意  
 希代一不思議  
 不祥一不吉  
 を云々一以下曲にかゝる

坊と申すが、そなたのはりがへの名か。▲僧をよ、それぞろよ名取殿。きたい坊にふしやう坊。く。二つの名をば取り返し、本國さしてかへりけり。



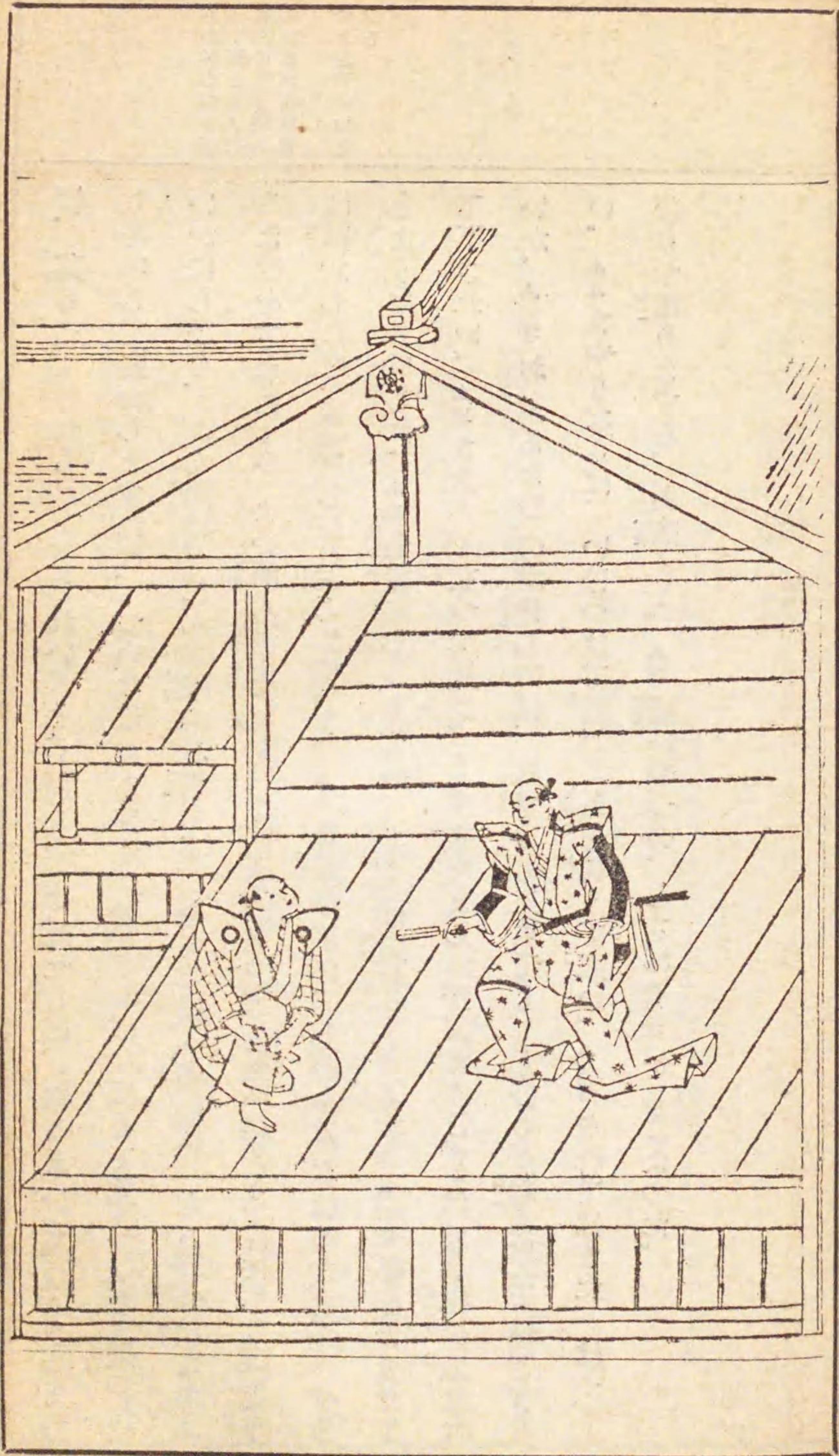
四痺しびり

二人

主 長袴、小さ刀  
冠者 半袴、腰帶

作病—假病に同

▲主 あたりの者。冠者あるか。▲冠者 お前に居まする。▲主 やがて客がある。淀鯉を買ひに行  
け。▲冠者 畏つた。▲主 早う戻れ。▲冠者 心得ました。夜も曉も、鯉を買ひにまるれくと  
おしやるは、定の事、たゞ作病をして参るまい。あ痛くくく。▲主 冠者は何とし  
た。▲冠者 親のゆづり置かれ申した痺がおこつて、あ痛やく。かなしやく。▲主 何  
と、しびりがきれたと云ふか。▲冠者 親の時より、よそへゆきともないと思へば、そのま  
ま起ると云はれましたが、俄にしびれがきれてござる。▲主 よく休め。▲冠者 畏つた。▲主  
思ひつけた。某の仕りやうがある。何とをちご様より、俄なれどもふるまひにまるれ、  
乃ち冠者をも呼ぶと云うて使が来た。おれは参らうず。冠者はなるまいと云うて返事せ  
い。▲冠者 なう、だんな様。▲主 何ぞ用か。▲冠者 申し、をちご様へおふるまひにお出なら



いかにしびり云  
云一痺と云ふ抽  
象的の物を擬人  
したるが滑稽也  
すきと一すつき  
りと

ば、某も召し伴れられて下されい。▲主しびりがきれたらば、なるまいぞ。▲冠者ことわ  
りを申して聞かしますれば、ついなほりまする。▲主さらばなほして見よ。▲冠者畏つた。  
いかにしびり、よく聞け。だんな殿のお供して、をぢご様へ参れば、なる程結構なおふ  
るまひを下さるよ。よい酒も澤山に飲む。此度の事ぢや、なほれく。ほい。▲主返事  
は誰がしたぞ。▲冠者しびりでござらう。▲主奇特な事の。しびりはなほるか。▲冠者すき  
とようなり申した。▲主名譽なしびりぢや。よくば追付行く。立て。▲冠者手をひきたて  
て下されい。▲主さあく立つて見よ。▲冠者立ちましたが、ようござる。▲主痺の氣はな  
いか。▲冠者おふるまひのお供しては、五里でも三里でも、しびりが起る事ではござな  
い。▲主さやうならば、いひつけて置いた魚を買うて来い。▲冠者それではまた、はや、し  
びりが起りまする。あ痛く。▲主憎いやつの。しされ▲冠者かしこまつた。

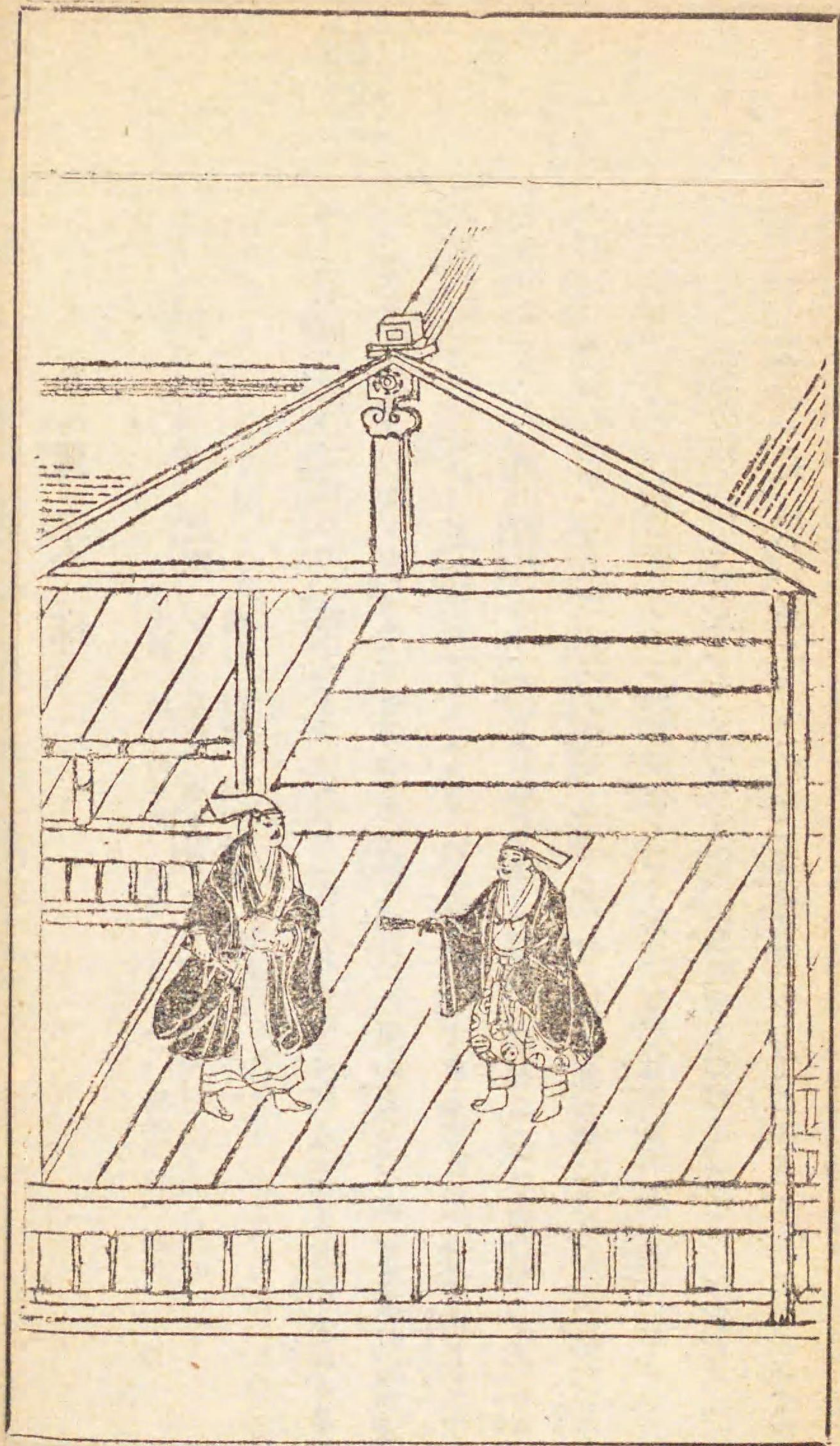
五 悪 太 郎

三人 太郎 始め括り袴、頭巾、うちかけ、棒持、後、頭巾、十徳  
をぢ 長袴、小き刀  
僧 頭巾、衣、珠數、鉦

酒に酔ひて云々  
元來判注にす  
べき語なるべし

▲あく太郎 酒に酔ひて出るあく坊のごとく。をぢご内におぢやるか。▲をぢまた悪太郎がき  
た。▲太郎 お見舞申しまうする。▲をぢそのやうに酒に酔ひて、氣の毒ぢや。酒をとまれ。▲太郎  
御意見かたじけない。とまりませう。▲をぢよい合點ぢや。すきととまれ。▲太郎 明日から  
とまりませう。酒の暇乞に、一盃下されい。▲をぢ暇乞ぢや程に、ふるまひ申さう。い  
ばい飲む。▲太郎 もはや、さらばく。て寝る。▲をぢさいぜん悪太郎が酒にゑうて去んだ。道  
にかな寝ませう。見に参らう。されば餘念もなく寝てる。仕様がある。坊主にしてお  
きませう。悪坊の如く坊主にして、そちが名を南無阿彌陀佛とつける。さやうに心得く。  
太郎目さまし。▲太郎 これはいかなこと。この様に釋迦如來のしておかしられたものであ

悪坊の如く云々  
これ同上



らう。▲僧南無阿彌陀佛く。▲太郎さてく、はやく某の名を知つて、何者やら呼ぶが。

▲僧なむあみだぶつく。▲太郎やあく。▲僧其方は何者なれば、某の

名號を唱へれば、返事をめさるぞ。▲太郎某は悪太郎と云ふ者ぢやが、酒に酔ひ寝たれば、

この如くにしておいて、おれが名を南無阿彌陀佛と、付けるといふと思つたれば、目が

さめた。其方が呼ぶによつて返事をする。▲僧其方は何も知らぬ。西方十萬億の阿彌陀佛

といふお佛がまします。名號を唱へてあれば、死してのち、極樂といふ所へ往生するに

よつて、愚僧も諸國修行して念佛を申しまうする。▲太郎仔細あることぢや。某も其方の

弟子となつて、お供して諸國へまゐりたい。連れて下されい。▲僧やすいこと。つれだち

申さう。▲太郎この容態をうたうて參らう。ふし今よりうき世の事を思ひきつて、只一すぢ

に阿彌陀を頼んで念佛申し、修行にいざや出でうよく。

阿彌陀佛一無量壽佛又は十二光佛など譯す

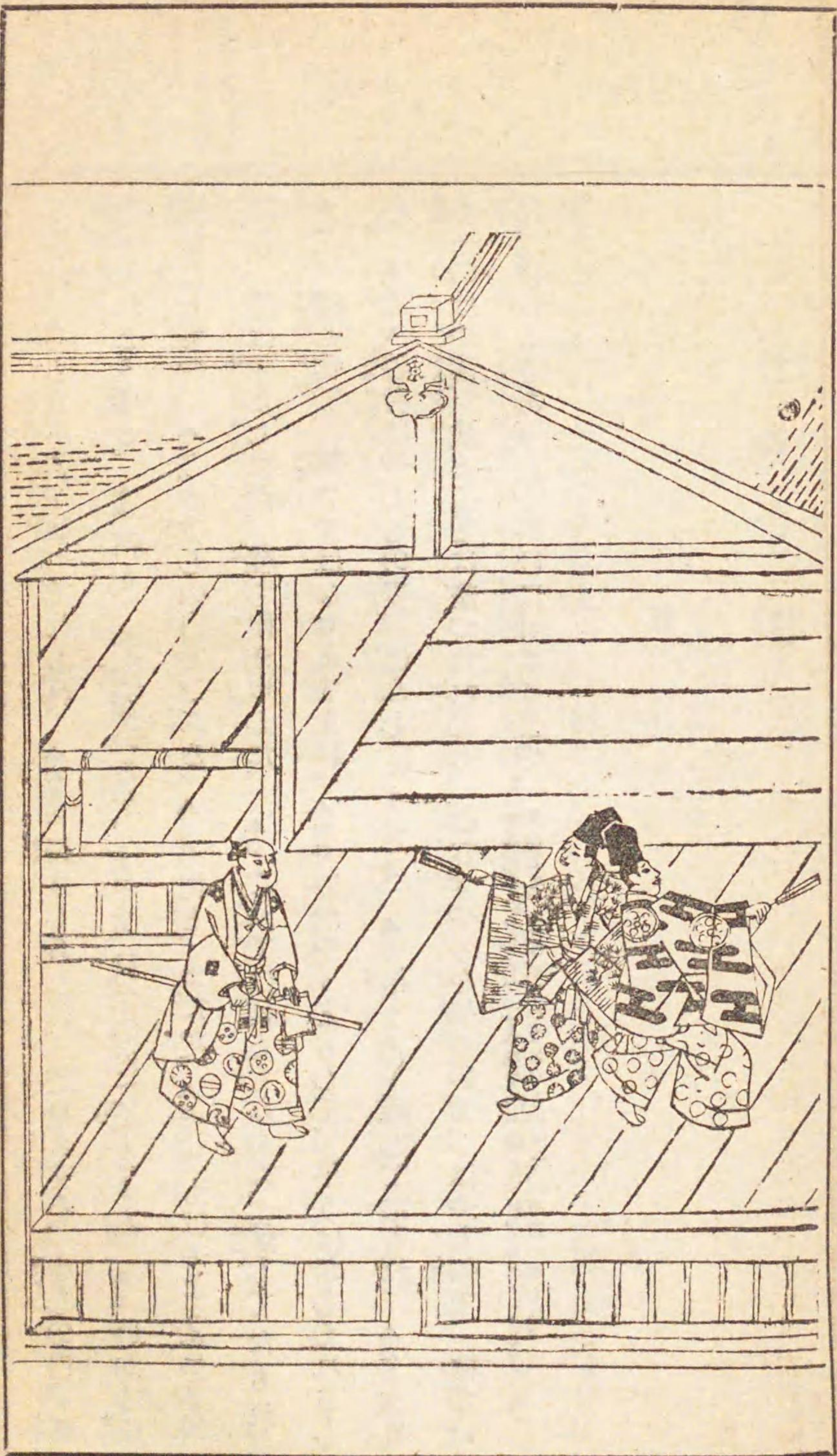
早漆一名塗附

六 早 漆

三人

男 烏帽子、上素襖、下半袴、腰帶  
伴れ 同じく  
塗師屋 羽織、半袴、腰帶

▲男 人の御存じの者。年の暮ぢや。歳暮に参らう。申し、ござるか。▲つれ 何事でござるぞ。  
 ▲男 歳暮の禮に、いざござるまいか。▲つれ なかく、お供申さう。▲男 さあ、ござれ  
 ござれ。▲つれ 参るく。▲ぬしや このあたりに住む塗師屋ぢや。町へ参らう。早うるし、  
 日本一の早漆々々。▲男 申し。ぬしやが参つた。こなたの烏帽子も某がゑほしもはけた。い  
 ざ談合して塗らしませう。▲つれ 一段ようござらう。▲男 これく。▲ぬしや 何でござるぞ。  
 ▲男 この烏帽子をぬりたいが、何と、ならうか。▲ぬしや 某は日本一の早漆でござる。塗り  
 直して進じませう。▲男 何と、早う出来申するか。▲ぬしや そのまよ、著ながら塗り直  
 して進じませう。▲男 さらば兩人ながら頼みたい。▲ぬしや 心得ました。これへ寄らし



られい。▲つれさあく塗つてたもれ。▲ぬしや任さしられい。塗ります。少しの内、風呂へ入れまうする。▲男何と、手間がいるか。▲ぬしや只今の内に干ます。▲男いかう窮屈なことぢや。▲ぬしや少しの内でござる。▲つれ何と、まだか。▲ぬしやもはやようござる。はあ、漆は干しましたが、綴ぢ附き申した。▲男これでは何ともならぬ。離してたもれ。▲ぬしや離し物で、離さずはなりますまい。▲つれいかやうともして、早うはなしくれさしめ。▲ぬしや追付はやしもので、はなしまうせう。▲男早うく離してたもれ。▲ぬしや日本一のはや漆、塗ることは塗つたれども、はなすやうを知らないで、はやし物で、はないた。けにもさあり。やよ、けにもさうよの。

四五返もはやして、二人のなかへ權をいれ、いろくしまひして、ほつばいひろるひと云うて、三方へこくる。

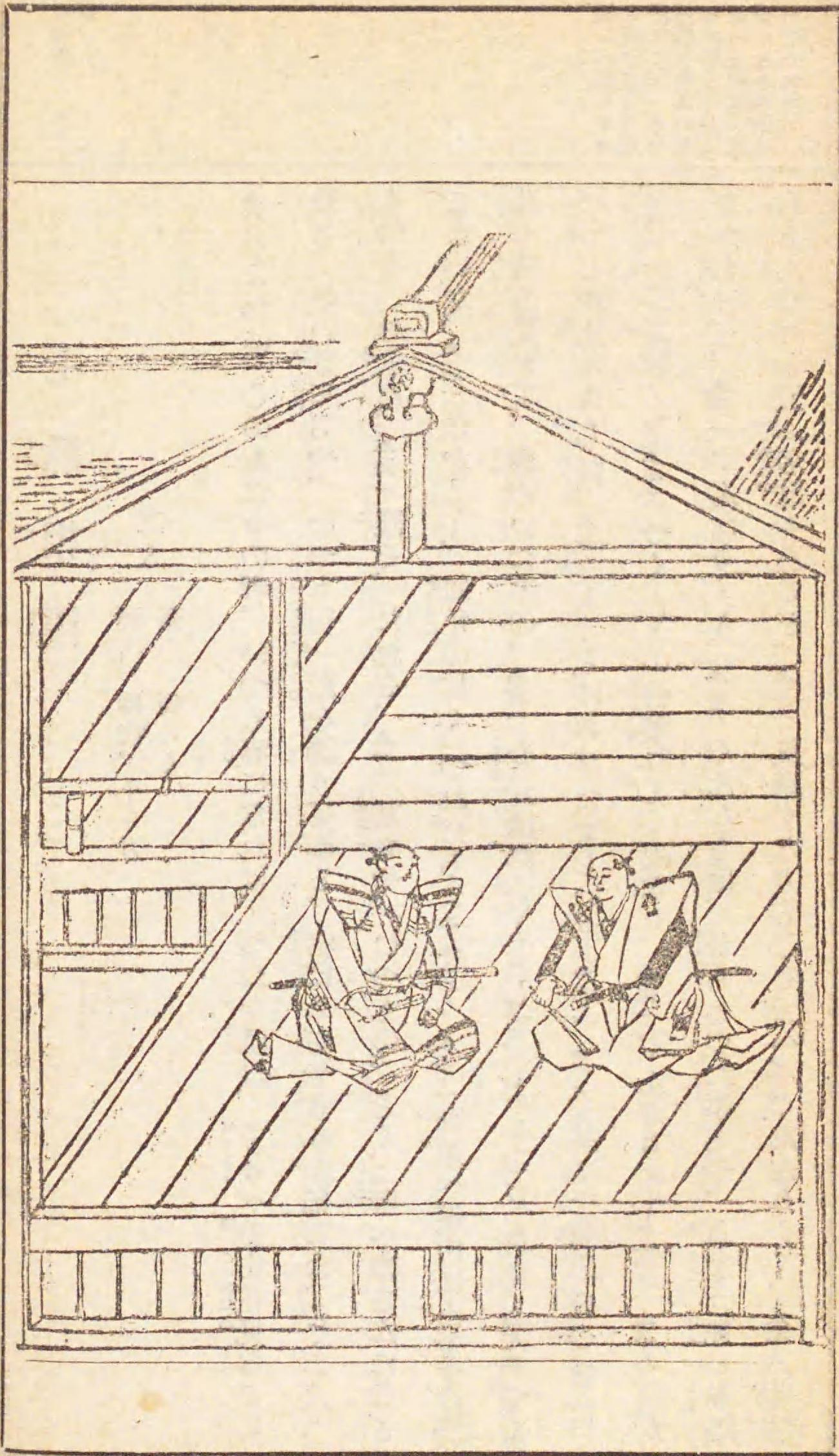
歌相撲一人名士

七 歌相撲

二人 平八 長袴、小さ刀 孫一 同じく

▲平八これは、このあたりの者。いつも春になれば、つれを誘ひ、方々へ遊山花見などに参る。好い日和ぢや。いつも孫一殿を誘うて参る。宿におぢやらうか知らぬ。ことぢや。ものも。お案内。▲孫一誰そ、たれぞ。▲平八某ぢや。いつものごとく、野へゆさんにござるまいか。▲孫一なかく、毎年の如く、つれだちまうせう。▲平八野邊へ遊山に出でては、草も青う見えて、春めいた事の。▲孫一心がはれぐとして、ようござるぞ。▲平八つくづくしが生えました。▲孫一まことにおびたごしい事ぢや。▲平八某は一句思ひつけた。▲孫一聞きませう。▲平八つくづくの首萎れてぐんなり。▲孫一ぐんなりく。笑ふ。▲平八何がをかしいぞ。▲孫一ぐんなりく。▲平八ぐんなりは、昔もあつた事ぢや。眞葛が原に風さわぐんなりと云ふ名歌もあるぞ。▲孫一風騒ぐなりとこそ云へ。ぐんなりく。▲平八異なる

眞葛が原に云々  
一騒ぐなりを撥  
音にて云へち也  
慈圓大僧正の歌  
にて新古今集に  
出づ上句は「我  
戀は松を時雨の  
染めかねて」



難波津に云々  
この歌古今集序  
に見ゆ王仁が仁  
徳天皇をよそへ  
て詠める歌とい  
ふ

事を笑ふ人ぢや。▲孫一これはしやくやくが出たわ。▲平八芍薬の花はみごとなれども、歌  
 によみませぬの。▲孫一歌によみましたともく。難波津にしやくやくの花ふゆごもり、  
 今をはるべにしやくやくの花と、詠うでござる。▲平八その歌某も知つた。咲くやこの  
 花ふゆごもり、今を春べと咲くやこの花でこそあれ。しやくやくのはなく。笑ふ。▲孫一そ  
 の方は笑ふか。▲平八笑はいでなんとせうぞ。をかしやく。▲孫一そのやうに笑はど、相  
 撲を一番まるらう。▲平八相撲取りには来ぬ。野遊山に参つた。▲孫一でも、そのやうに笑ふ  
 からは、ぜひともし相撲を取りまうせう。▲平八その方と取つても、あまり負くること  
 でもあるまい。所望ならば一番まるらう。▲孫一さあく、一番取りまうせう。▲平八お手  
 つ。勝つたぞく。▲孫一一番とつては知れぬ。今一番とれく。

八 鷄にぼり

聾じこ

三人

舅なう 長袴、小き刀  
冠者かむり 半袴、腰帶  
聾じこ 烏帽子、素襖、袴、小き刀

▲しうとこれはこのところの大名。けふは聾入がある。太郎冠者あるか。▲冠者お前に。  
▲しうと今日は聾殿のおいでぢやほどに、お出の時分、此方へ申せ。えい。▲冠者はあ。▲むこ  
これは花聾でござる。今日聾入致さうと存ずる。舅はこれでござる。ものも。▲冠者や、た  
そ。どなたでござる。▲むこむこです。▲冠者はあ。これへお通りなされませ。▲むこ心得  
た。うたむ聾は舅のうちに行き、く、お座敷までは、歴々なりとて、かよりのもとにぞ  
立つたりけり。くわつくく。うたむ舅はこれを見るよりも、廣縁より飛んで下り、羽  
だたきしてぞ立つたりけり。▲冠者申し、何事でござりますぞ。▲しうとやい、總じて聾の  
恥はぢは舅の恥しうせ、舅の恥しうせは聾の恥じこ、構かまへて笑わらふな。▲冠者はあ。▲また前のとほり、には  
構かまへて一必ず也。庭かまりー蹴鞠けまりの



こくわつこくくく。やるまいぞく。心得たく。

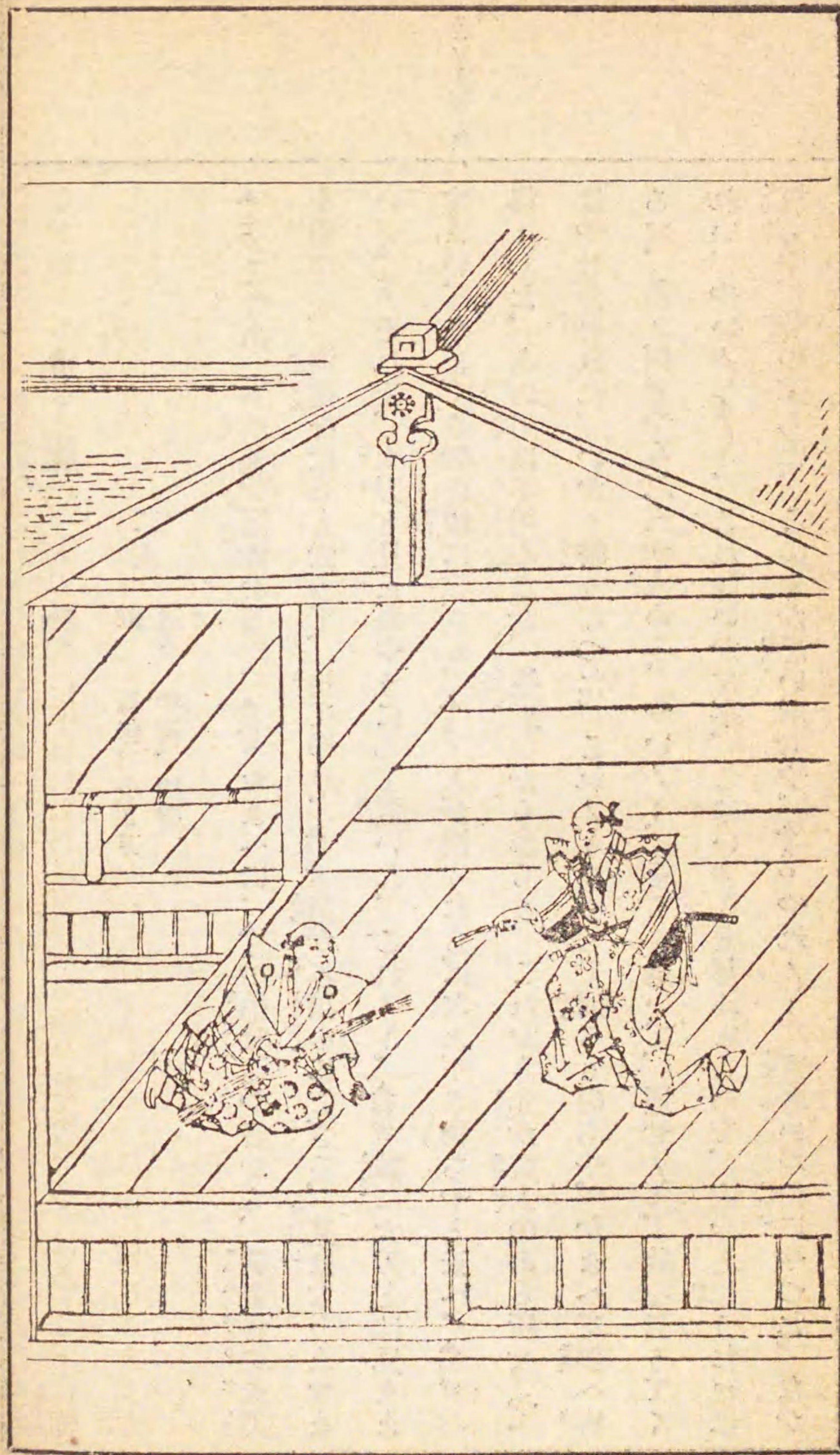
九 腥 物

二人 殿 長袴、小き刀  
冠者 半袴、腰帶

▲このあたりの者。冠者をるか。▲冠者おまへに。▲この伯父ぢや者から、黄金作の太刀を借つた。返進を仕ると云うて、持てゆけ。▲冠者道が不用心にござる。某はなりますまい。▲このそれで、太刀と見えぬやうにして置いた。これく。▲冠者誠に太刀とは見えまい。なまぐさ物の様にござる。▲この人が問うたらばなまぐさ物ぢやと云へ。▲冠者心得ました。あの道は不用心ながら、迷惑ながら参らう。これから先が盗人のある所ぢや。はや日が暮れた。いかう暗うなつた。これく用心して通るものぢや。かまへて側へ寄るな。あゝ何者やら二三十人ある。やいく、そこを退いて、通せく。物を云うてくれい。やいくく。これはいかな事。こはいくと思ふところで、人かと思つたれば、枕ぢや。肝つぶした。この先が悪い所ぢや。▲このやれく、冠者めを使にやつた。なか

類 なまぐさ物一魚





なか参る事はなるまい。太刀を人に取られぬ内に、後から参り見ませう。はあ、こゝに怖しがつて獨言を云うてる。嚇ませう。▲冠者 南無三寶々々々、化物がある。あゝ大佛のせいより夥しい。▲とのがつきめく。▲冠者 あゝ悲しやく、助けて下され。▲とのおのれが持った物は何ぢやぞ。▲冠者 これは黄金作の太刀ではござらぬ。腥物でござりまする。▲との いやく、腥物ではあるまい。偽いうたら仕様があるぞ。▲冠者 あゝ、ありのまゝ申しませう。助けて下されい。黄金作の太刀でござる。▲との 其太刀そこに置いて行け。▲冠者 畏つてござる。則ちこなた様へ進上申します。命の義をお助けなされませい。▲との 命助くる。早う去ねく。見るなく。▲冠者 あゝ、見ませぬく。やれく、こはやく。急いでかへりまうせう。ござるかく。▲との 冠者 歸つたかく。色が悪うをかしい顔ぢや。▲冠者 好いお目かなく。なうく、怖しいめに會ひました。冠者 ひとり拾はせられた。▲との 何とした事に會うたぞ。▲冠者 大佛あたりへまると、四五十人して某をとりまはして、おひはぎどもが。▲との して、なんと。▲冠者 常々の手柄のほどを見せ

冠者ひとり拾はせられた一殺さるべきもの助けたりたれば然か云へる也

一文字—眞直のこと

まうせうと思つて、眞中へ取込められながら、おれをえ知らぬか、頼うだ者の御内に隠れもない冠者、一人ものがすまいと申してござれば、長刀の、槍のと申して、手にく持つてかゝる。中にもとびがねに、近頃迷惑仕つて。▲とのとびがねとは。▲冠者かうくかまへて、つうくとおこすものよ。▲とのそれは弓であらう。▲冠者されば、弓をおこしましてござる。槍も長刀も切り折つてござる。▲この手柄をしたな。▲冠者その持つた物は何ぞと申すところで、これは黄金作の太刀ではない、なまぐさ物ぢやと申したれば、それをおこすまいか、射殺せと申すところで、やるまいとは思へども、こゝで死すれば犬死ぢや、主の用にたよねばならぬ、是非に及ばぬ、乞食に取らしたと思ふと申して、四五十人のなかへやつて一文字にかへりました。手柄を致してござる。▲このあの臆病者、その太刀を取つたは某ぢや。▲冠者こなたはいつはりを仰せらるよ。▲このおのれめは、大佛よりおびたごしいのなどと云うてこはがる。おれが、がつきめ。びつくりする。それ見よ、今もびつくりするわ。▲冠者落武者と申すは、薄の穂にもおちると申すが、定ぢや。おびた

てらどーきつとつ  
そのつれ—其様な事

だしいめにあひました。その上ぢやとところで、びつくりと仕つた。▲このたしかに證據があるが、いつはりを云ふ。▲冠者證據はござるまい。▲このていどか。▲冠者なか。▲このこれく、これぢや。▲冠者申しく、富貴なお方ぢや所で、このやうな物を數を持つてござると存する。▲このまだそのつれ云ふか。憎いやつの。▲冠者あゝ免させられい。▲このどいへ。やるまいぞく。

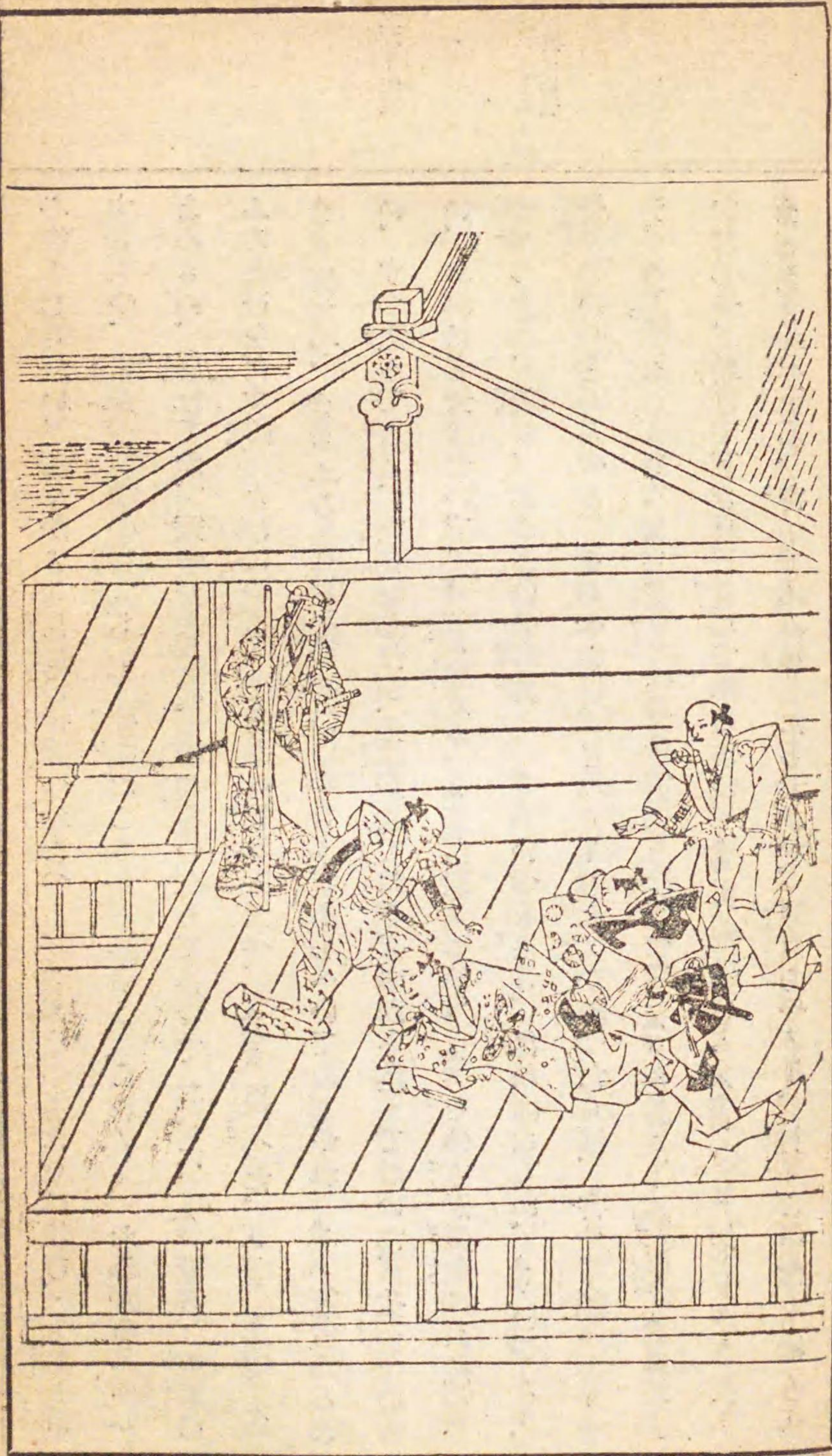
十乳切木

七人

太郎 上素襖、下半袴、腰帶  
 女房 びなん、箔、さげ帯  
 主 長袴、小さ刀  
 冠 半袴、腰帶  
 客三人 長袴、小さ刀

伊勢講 伊勢参  
宮の講社

▲主 この在所の者。伊勢講の當にあたつた。皆々呼びませう。冠者。▲冠者 お前に。▲主 伊勢講ぢや。皆々お出なされませいと、申して呼びに行け。▲冠者 心得ました。どれから参らうぞ。どなた様へから参らう。申し、ござるか。▲客 誰ぢや。冠者か。▲冠者 もはや皆々様にお出なされて下されいと申さるよ。▲客 どれくもこよ許へ来てぢや。早つれだちて参らうと云へ。▲冠者 やがて待ちまする。▲客 心得た。皆々様呼びにまるつた。ござれく。只今お使過分にござる。▲主 揃うて御出、満足つかまつる。通らしられい。▲客 さあ、どれくもこちへ寄らしられい。▲主 今日は太郎めに知らせぬ。さやうに



立花一生涯

話がしまぬ一話  
が熱せぬ也

心得さしらしい。あれがさし出るに迷惑つかまつる。▲太郎このあたりに住む、太郎と申す者ぢや。誰が伊勢講の當人ぢや。使をおこさぬ。参らう。これく、おれが所へ使がまるらぬ。忘れてか。冠者が失念か。掛物をいがめてかけておいた。▲主冠者、太郎にふるまひをだす時、よびにやらう。あちへ行けと云へ。▲冠者、畏つた。▲太郎、太郎々々。▲太郎、何ぢや。▲冠者、ふるまひの時、呼びにやらう。あちへいておぢやれ。▲太郎、冠者知るまい。すつ込うで居よ。立花をしたが、誰が立てたぞ。つかみ込うでおいた。次第がわるい。おれにと云はせいで。▲主、太郎々々。▲太郎、何でござる。▲主、その方が座敷にゐれば、話がしまぬ。後に。ふるまひの時出よ。▲太郎、いつも出る。出ねばならぬ。▲客、いやく、皆々のいやとおしやる。そちへいけ。どれくも太郎が参つたらば、寄つて踏みまうせう。▲客、好うござらう。▲太郎、皆々はおれをなぜに嫌ふぞ。▲客、さあく。▲客、皆々太郎、あよかなしや。助けて下され。重ねて参るまい。▲客、おのれく。▲太郎、ゆるして下されく。▲太郎が女房、妾が男を、寄つてふみ殺したと云ふか。腹だちやく。男、このなりはく。

はたせー殺せの  
意

▲太郎、かなしやく。もはや参るまい。助けて下されく。▲女房、妾が来たわく。▲太郎、女房ども、何と思うておぢやつたぞ。▲女房、そのやうに踏まるよものか。▲太郎、いやく、ふまればせぬ。雪駄の紋所をつけて下された。▲女房、おのれ、はたせく。▲太郎、女房どもは命をたくさんさうに、おれはならぬ。其方頼む。はたしてたもれ。▲女房、はたしに行かぬか。もはや宿へよせぬぞ。女のはたしに行くと云ふことがあるか。▲太郎、それならば、はたしに参らうが、一人はゆかれまい。▲女房、おれもつれだち申す。▲太郎、その方が行けば、きつぱりと、はたしに行くぞく。▲女房、この刀をさいて棒を持つて、先へゆけく。▲太郎、誰が所へ参らうぞ。市助が所はこぢや。▲女房、押入つて、はたせく。▲太郎、市助様はお宿にか。▲女房、めと云へく。様と云ふ事があるか。▲太郎、つつと氣のはやい人ぢや。まづ待たしめ。▲市助、留守々々。▲太郎、留守ぢやわいの。るすはしやうことがない。内に入るならば、こみ入り、この棒で臍を薙ぎ折つて、腹へ上つて踏み殺してやらうもの。腹だちや。▲女房、よく云はしました。文七が所へ行け。▲太郎、心得た。文七はこぢや。▲女房、早

くはたせく。▲太郎 文七様は、内にござりまするか。ござるか。▲女房はらだちや。文七めはうちにゐるか。出よ、はたすと云へ。▲太郎 いやく、氣い短い人ぢや。▲文七 留守留守。▲太郎 又留守ぢや。おのれめ、内に居る事ならば、その儘刀で手も足も、切つてのけまうせうもの。▲女房 よう云はしました。▲太郎 もはやない。この有様を、いざ誰にうたうて宿へ歸らう。▲女房 それがよからう。▲太郎 こよやかしこ、訪へどもく、皆々留守にてせひやな。諍果てての棒乳切木と云ふ事も、かゝる事にてあるやらむ。▲女房 いとほし人ぢや。負うて往なう。

せひやな―是非無やか  
乳切木―太く長き杖

卷之三

一 竹生島詣

二人

大名 長袴、小き刀  
冠者 半袴、腰帶

▲主 これは、このあたりに住居致す者でござる。某一人召使ふ下人が、此中暇も乞はいで、何方へやら參つてござる。聞けば、夜前罷歸つたとは申せども、未だ某に目見えを致さぬ。あまり腹の立つ事でござるほどに、今日きやつが私宅へ立越え、たばかり出いて、きつと折檻の加へうと存する。まづ急いで參らう。やあさて、憎い事でござる。某に暇の義を申してさへござらうならば、いか程なりとも取らせませうに、にくい仕合でござる。や、まるる程にこれぢや。某が聲を聞き知つて、留守を使ふでござらう。作聲を致して呼び出さうと存する。ものも。案内も。▲冠者 やら奇特や。夜前罷り歸つたを、はやど

奇特―不思議



なたやら御存じあつて、表に案内がある。案内は誰ぞ。▲主ものも。▲冠者どなたでござる。▲主しさり居る。▲冠者はつ。▲主や、俄の慇懃迷惑いたす。お手あけられい。▲冠者これは何とも迷惑に存じます。▲主おのれは此中誰に暇を乞うて、いつかたへ行てあるぞ。▲冠者さればその義でござる。御暇の義を申さうとは存じてござれども、一人召使はるよ下人の義でござれば、申上げたりとも、やはかお暇をくだされまじいと存じて、忍うで竹生島詣を致いてござる。▲主やら珍しや。一人召使はるよ下人が、竹生島詣をすれば、主に暇を乞はぬ法ですか。▲冠者はつ。▲主えい。▲冠者はつ。▲主憎いやつの。忽ち折檻の加へうと存じて、これまでは立越えてござれども、竹生島詣をしたと申せば、一つは天女へのおそれもあり、この度はゆるさうと存ずる。やい。▲冠者はつ。▲主忽ち折檻を加へうと存じて、これまでは來たれども、竹生島詣をしたとあれば、一つには天女へのおそれもあり、この度はゆるす。そこをたて。▲冠者それはまことでござるか。▲主弓矢八幡助くるぞ。▲冠者やら心安や。▲主さて今の間は、窮屈にあつたか。▲冠者いつもの御氣色と

竹生島—琵琶湖  
中に在り景行天  
皇の時湧出せり  
と云ふ  
天女—竹生島に  
は辨財天を祀る  
女神也

いから一層なる意

ちくちく一啼聲を父々の意に取る  
こかあ〜一啼聲を子かあの意に取る  
むざとした事取りとめ無き事

は、變かはらせられてござるによつて、すはお手打てうちにもあひますかと存じて、身の毛けをつめて居りました。▲主さうあらう。身みもいつもよりも腹はらが立つた。以來いらいをたしなめ。▲冠者畏かしこつてござる。主▲さて身共みどもは、つひに竹生島ちくせいじまへ参らぬが、いかい参まゐりか。▲冠者されば、まあり下向ひがうの人、峰みねから谷たに、谷たにから峰みねへ、おしも分けられた事ではござりませぬ。▲主何がなに天女てんによの御事おんごぢやもの、さうあらうとも。さてめづらしい事はなかつたか。▲冠者別に珍づらしい事もござりませなんだが。申し、私は只今ただいままで、雀すずめと鳥からすとは別の鳥とりかと存じて居りました。▲主それはどうした事ぢや。▲冠者まづ参りまする道みちに、大木たいぼくがござつた。片枝かたえだには雀すずめかとまります、片枝かたえだには鳥からすかとまつて居りましたが、雀すずめが鳥からすの側そばへまゐりて、ちよ〜と申してござれば、鳥からすが雀すずめをきつと見まして、こかあ〜と申してござる。すれば、疑うたがふ所もない親子おやこでござる。▲主さて〜汝なんぢはむざとした事をいふ。雀すずめのちよと囀さへづり、鳥からすのこかあと鳴なくは、皆面々みなめんめんの囀さへづりやうぢや。それが、自然しぜん同じ木おきなにとまり合あはせたとあつて、親子おやこであらう事わ。そのやうな事ことでなしに、珍めづらしい事はなかつた

親子であらう事わ一反語也親子ならずの意  
こびたもの一かはつた物  
かいる一判本のまゝ  
くちなは一蛇のこと

秀句一口合也洒落也

か。▲冠者まだめづらしい事がござりました。▲主それ〜、それを聞きかうと云ふことぢや。▲冠者神前しんぜんの傍かたはらに、大きな芝しばがござつた。これにこびたものが集あつまりました。▲主何がなに集あつつたぞ。▲冠者まづ、龍たつ。▲主龍たつ。▲冠者犬いぬ。▲主犬いぬ。▲冠者猿さる。▲主猿さる。▲冠者かいる。▲主蛙かえる。▲冠者くちなは。▲主くちなは。▲冠者この者共ものどもがあつまりてござる。▲主これは早速さつそく不審ふしんがあるわ。世よの世話せわに、中なかのわるいものを犬いぬと猿さるとのやうなと云ふが、中なかのわるい體ていは見えなんだか。▲冠者いや、別べつに中なかのわるい體ていも見えませんが、この者どもが集あつつて、何なにぞ談合だんがふを致すと見えまして、立たち様さまに、秀句しゅうくを申して立ちましたが、これがなかく〜面おも白い事ことでござりました。▲主それは何と云うたぞ。▲冠者まづ龍たつが申しますは、各おのこれにござれども、私は所用しよよう御座候おんざしやうによつて、この御座敷おんざしきをたつですと申してござる。▲主なんぢや、龍たつが秀句しゅうくに、この御座敷おんざしきをたつです。たつです〜。龍たつが秀句しゅうくに、たつですはでかいたな。▲冠者でかしましてござる。▲主さて何がなに云うた。▲冠者犬いぬが申しますは、各おのこれにござれども、私は夜話よはなしに参まゐるほどに、この御座敷おんざしきをいぬるですと申してござる。▲主い

ぬるです。犬が秀句に、いぬるですは、でかいたな。さて何が云うた。▲冠者 猿が申しますは、各これにござれども、私は内容を得ましたによつて、この御座敷をさるですと申してござる。▲主 さるです。きやつは云はうやつぢやわ。人間半分の智恵を持つたと云ふ程に、秀句ほどの事を、云ひかねはせまいが、きやつが所への内容はたれぢや。▲主 ところが、▲冠者 それが、しれものでござる。▲主 さて、何が云うた。▲冠者 かいるが申しますは、おのおのお立ちなされた程に、私もこのお座敷をかいるですと申してござる。▲主 かいるです。きやつが小さいなりをして、大きな者にも負けじ劣らじと、目をしよほくとして、かいるですは、でかいたな。さて、何が云うた。▲冠者 いえ、もはやござりませぬ。▲主 まだ、何やらあつたやうなが。それく、くちなは。▲冠者 まことに、くちなは。▲主 くちなはが秀句は、さぞ、生長い秀句でござらう。▲冠者 これはいかなこと。人の話で承つたれば、くちなはの秀句を、はつたと忘れた。なんとしたものであらう。▲主 やい、くちなはは何と云うた。▲冠者 くちなはもでかしましてござる。まづ、きりよくと輪に

物と一曖昧に詞を濁らす也  
やくたいもなら  
一塔もなら

なりまして、鎌首をもつたてまして、各これにござれども、私は夜話に参るによつて、このお座敷をいぬるですと申してござる。▲主 いぬるです。くちなはが秀句に、いぬる。いぬ。これは犬の秀句ぢや。くちなはの秀句を、早う云へ。▲冠者 くちなはのしうくは、物と。▲主 何と。▲冠者 石藏の中へ、ぬらくですと申してござる。▲主 あの、やくたいもない。しさり居る。▲冠者 はつ。▲主 えい。▲冠者 はつ。



八幡や一はた名八幡はたの前まへ

二八幡や一はた名八幡はたの前まへ

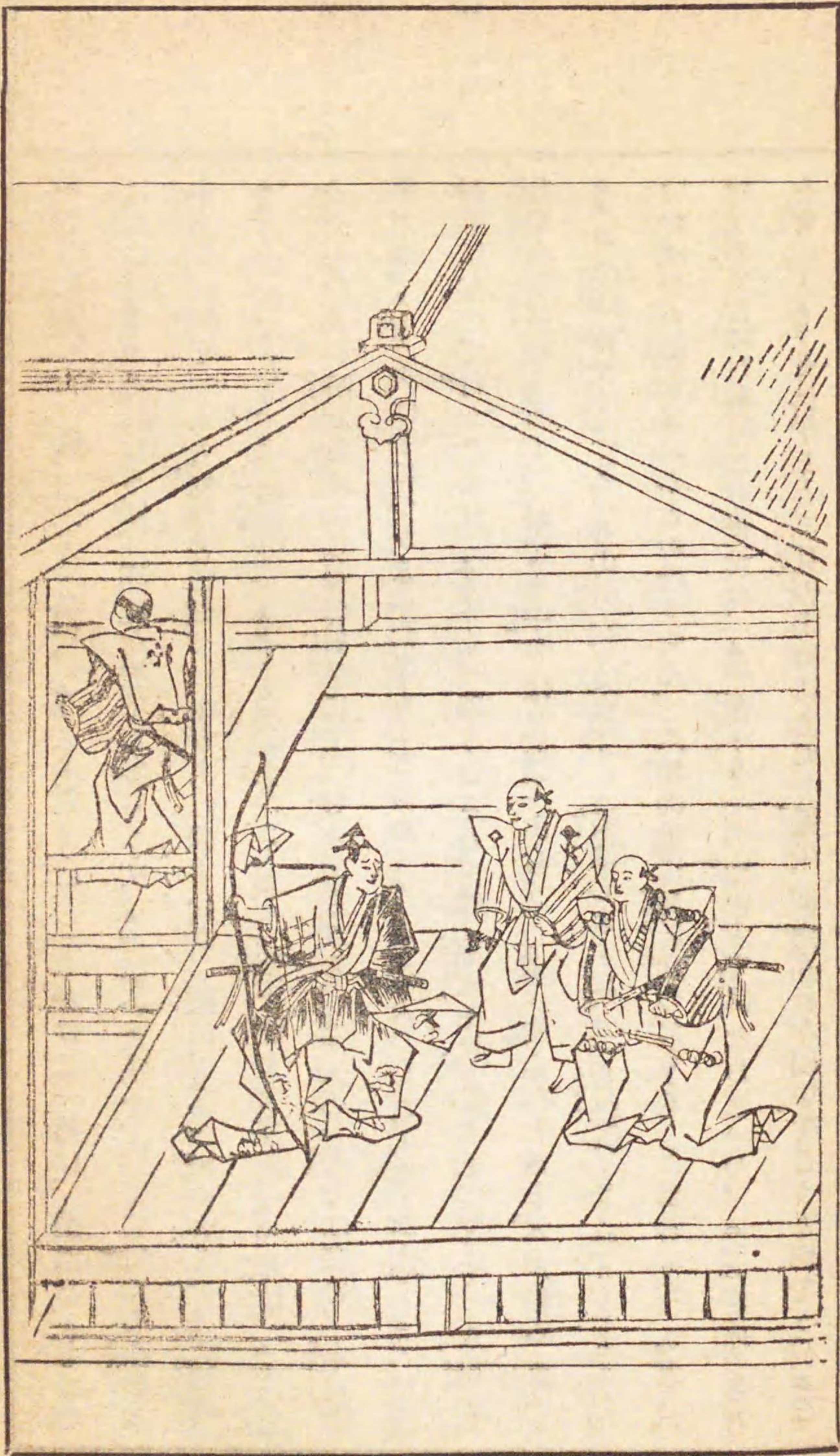
四人

男おとこ 烏帽子、素襖、袴、小刀、弓持  
男おとこ 長袴、小刀  
男おとこ 同じく  
冠者かむかひ 半袴、腰帶

八幡や一はた名八幡はたの前まへ

引いて一はた幕に隠かくずるため札しやくを引ひ取る也

▲しうと八幡やの在ざい所しよの者もの。美人びじんの一人ひとり娘むすめを持もつた。一藝いげいある人ひとを、聳せむにとりまうせうと、高札たかふだをあけた。▲冠者くわんじや冠者くわんじやるるか。▲冠者くわんじやお前まへに。▲しうと高札たかふだについて、聳せむのわせたらば、こちへ云へ。▲冠者くわんじや畏かしこまつてござる。▲むここのあたりの者もの。やはたの里さとに、美人びじんのひとり娘むすめをもつた人ひとがある。一藝いげいある者ものを聳せむに取とらうと云うて、高札たかふだを打うたれた。まづ某かが引ひてござる。このあたりに萬能まんのうた足たらうた人ひとがある。参まゐり、一藝いげい習ならうて、聳せむ入いたさう。何なにと教おしへてたもればよいが、これぢや。お案内あんないも。▲男おとこ誰たぞ。どなたぞ。▲むこ某かでござる。▲男おとこ何なにと思おもうて來きたぞ。▲むこ只今ただいま参まゐること、別べつの事ことでもござらぬ。八幡やに、一藝いげいある者ものを聳せむにとらうと申まをして、高札たかふだがありました。某かの、則すなはち高札たかふだを引ひいてござる所ところで、何なにぞ一



はちこ弓雀小の類か

手元手際

藝習ぎじゆひに参つた。教へて下されい。▲男 そのやうに、通りがけに一藝は、習はるとものではない。▲むこそれならば、高札を立てて参らうか。▲男 引いた物を、立てに行くも面倒な事ぢや。何ぞ、ちと前かどに知つた事があればよいが。鼓つづみは。▲むこいやく。▲男 鞠まりは。▲むこいかなく。▲男 鐵砲てつぱうは。▲むこ人のをきいてさへ、胸むねが躍やぶりまする。▲男 弓ゆみは。▲むこ弓こそちひさい時ときからはちこ弓の射手いいてにて、好きでござる。▲男 いや、夫それではない。本弓ほんきゆうの事ぢや。▲むこ夫は手てにつかまへた事もござらぬ。▲男 思おもひよつた。弓も貸かしてやらう。弓の射手いいてになつて行かしませ。▲むこまづ忝かたじけなくうござる。▲男 手元てもとを見ませうと云うて、水鳥みづどりか、翔鳥かじどりを所望しよぼうせう所で、射あても中あたりはせぬであらう。▲むこ側そばあたりまで矢やが参るまい。▲男 その時とき皆々みなみな笑はう。その方が、まづく笑わらはしますな。一首詠しゆよみまうせうと云うて、いかばかり神かみもうれしとおほすらん、八幡やわたの前に鳥居とりゐ立つたりと、よまませ。▲むこいかなく、詠よむ事はなりません。▲男 頭かしら字じを一つ宛づついうてはなるまいか。▲むこそれ、なりません。▲男 それがしも、見物けんぶつの内うちにまじり居ゐて、そばから、頭かしら字じを云うてやらう。▲むこ

放生川ほうじやうがは石清水いししみず八幡宮やわたみやの下を流る

石いし一首しゆを間違まちがふ

それならば、ようござつて下されい。某それがしは早参はやまゐる。▲男 心得こころえた。▲むこやれくうれしや、一藝習いちぎじゆうた。早はやう参り聲こゑにならう。これぢや。お案内お案内もく。▲冠者かむろ誰たぞ。どなたでござる。▲むこ高札たかふだのおもてについて参つた。▲冠者かむろ聲殿こゑどのか。▲むこなかく。▲冠者かむろ申し、むことのお出いででござる。▲しうと高札たかふだの通とほり一藝いちぎござるか、問とへ、▲冠者かむろ畏かしこつた。申し、一藝いちぎたざるかと申まさるよ。▲むこ弓ゆみを仕つかま。▲冠者かむろ弓ゆみを射いると仰おほせらるよ。▲しうとお手際てぎはを見みてござる。あたり近い放生川ほうじやうがはへ参れば、水鳥みづどりも翔鳥かじどりもある。お供とも申ましたいと云へ。のやそ通とほる。▲むこなかく、おとも申ましまるりて、手元てもとを見ませう。▲冠者かむろなかく、おともなされませうと仰おほせらるよ。▲しうと放生川ほうじやうがはへおいでなされうと仰おほせらるよ。満足まんぞくに存ぞんずる。▲むこ何がさて、参りまうせう。▲しうとこれく、あの三さんつまるる真中まんなかを射いさしられい。▲むこ心得こころえました。射射て見みませう。と笑わらふ。▲むこ申し、笑わらふまいく。石いしが浮うかみました。▲しうとやあく、何なんとく。▲むこ一首しゆうかみました。▲しうと何なんと。▲むこいかばかり。▲しうと面白おもしろい。▲むこ神かみけにおしやる。▲しうと何なんぢや。▲むこ神かみもうれしとおほすらん。

▲しうといかばかり神かみもうれしとおほすらん。▲むこやはちがはらで。▲しうと何なんとく。▲むこ  
 やはたのまへに。▲しうと出来できてござる。これく、今いまのあとは。▲むこ今いまのあとは、やはた  
 のまへに。▲しうと出来できてござる。これく、今いまのあとは。▲むこ今いまのあとは、やはたのまへ  
 に。▲しうとそれは合あ点てんぢや。そのあとは。▲むこ三度さんども同じおなじ。▲しうと八幡やわたの前まへにく。▲むこ胴どう  
 龜かめこたく。▲しうととつとと去いなしめ。

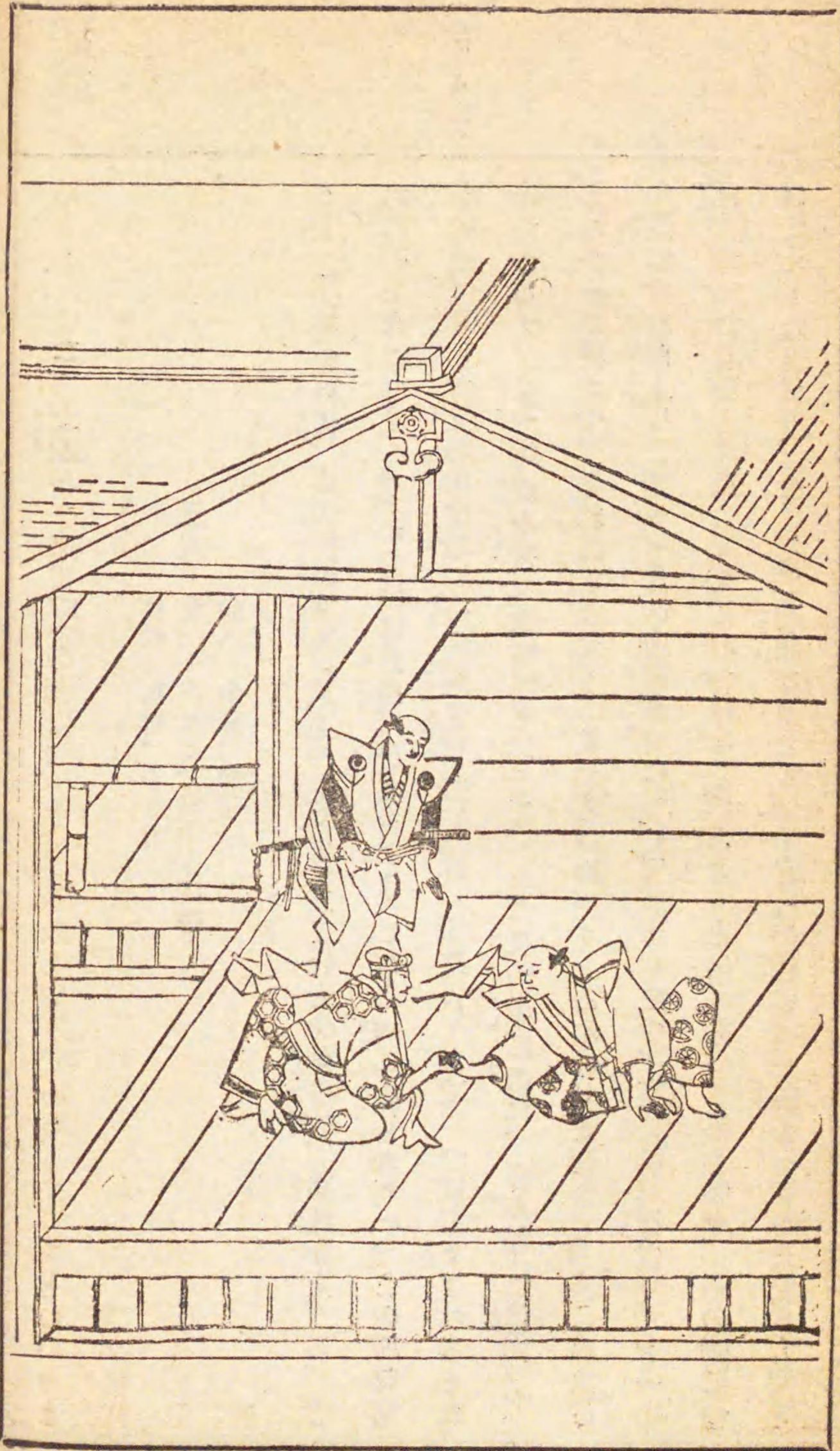
連尺一荷物にんぶつを附つけて負おふ具

一の棚たな一先頭せんとうの店

三連尺

目代 長袴、小き刀  
 三人 女 びなん、箔、さげ帯  
 商人 半袴、腰帯

▲目代この所の目代。この所御富貴ごふつきにつき、新市しんいちを立ていとおんごごの御事故ごじこ、高札たかふだを上あぐる。こ  
 れに打うちまうせう。▲女わらはは此邊このへんにひとりすまひして、酒さけを賣うる者ものぢや。この所御富  
 貴ごふつきゆゑ、新市しんいちが立たち申まする。一の棚たなを領りやうじたらば、すゑぐまで、つけて下くだされうとお  
 ほせらるゝ。妾わらわ一の棚たなを持もちませうと思おもうて、まだ夜よの中うちに出でた。参まゐる程ほどに市場いちばぢや、  
 これが一いちの棚たなぢや。これに居ゐませう。夜よがあけぬ。ちとるねむりませう。▲商人しやうじんこれはこ  
 の邊へんにすむ商人あまうぢでござる。この所御富貴ごふつきについて新市しんいちが立つ。高札たかふだに、何なになりとも一いち  
 棚たなについた者ものを、すゑぐまでおつけなされませうとの事ことぢや。早はやう参まゐり、一の棚たなにつ  
 いておきまうせう。今いまこそこの體ていなりとも、子どもこどもの代だいには、綾錦あやにしきを賣うりませうも知ら



ぬ。これはさて、女が早う来て、一の柵についてゐる。致しやうがある。まづ、ちとねいりま  
うせう。▲女やいく。▲商人はあ。▲女おぬしは、おれが柵のさきになぜ居るぞ。▲商人目代  
殿かと思つて肝つぶした。おれが一のたなについてゐる。▲女おぬし退かぬか。引きたて  
うぞ。▲商人これは何事をするぞ。▲女女ぢやと思つて、にくいやつ。▲目代やいく、兩  
人は何事を云ふぞ。▲女妾がとうから参つて、一のたなについてゐます。あの男めが、  
わたくしの柵先にあとから参り、居るほどに、のけと申せば、のかぬ所で、かやうにやか  
ましう申す。目代殿、きつと仰せつけられて下されませい。▲目代あれが口をも、きいて  
からの事にせう。やいく、汝は何と。▲商人私が夜のうちから参り、一のたなについて  
ゐますれば、のけと、あの女が云ふによつて、のくまいと申す事でござる。▲目代證據の  
ない事ぢや。この上は、勝負をさして、勝つた者を一のたなに云ひ付けう。▲女申し、女  
は門開きと申して、めでたいものでござる、わらはをつけて下されい。▲目代いや、おれ  
がまゝにもならぬ。勝負をせい。やいく、何ぞ勝負、かちの方を、一のたなにつけう。

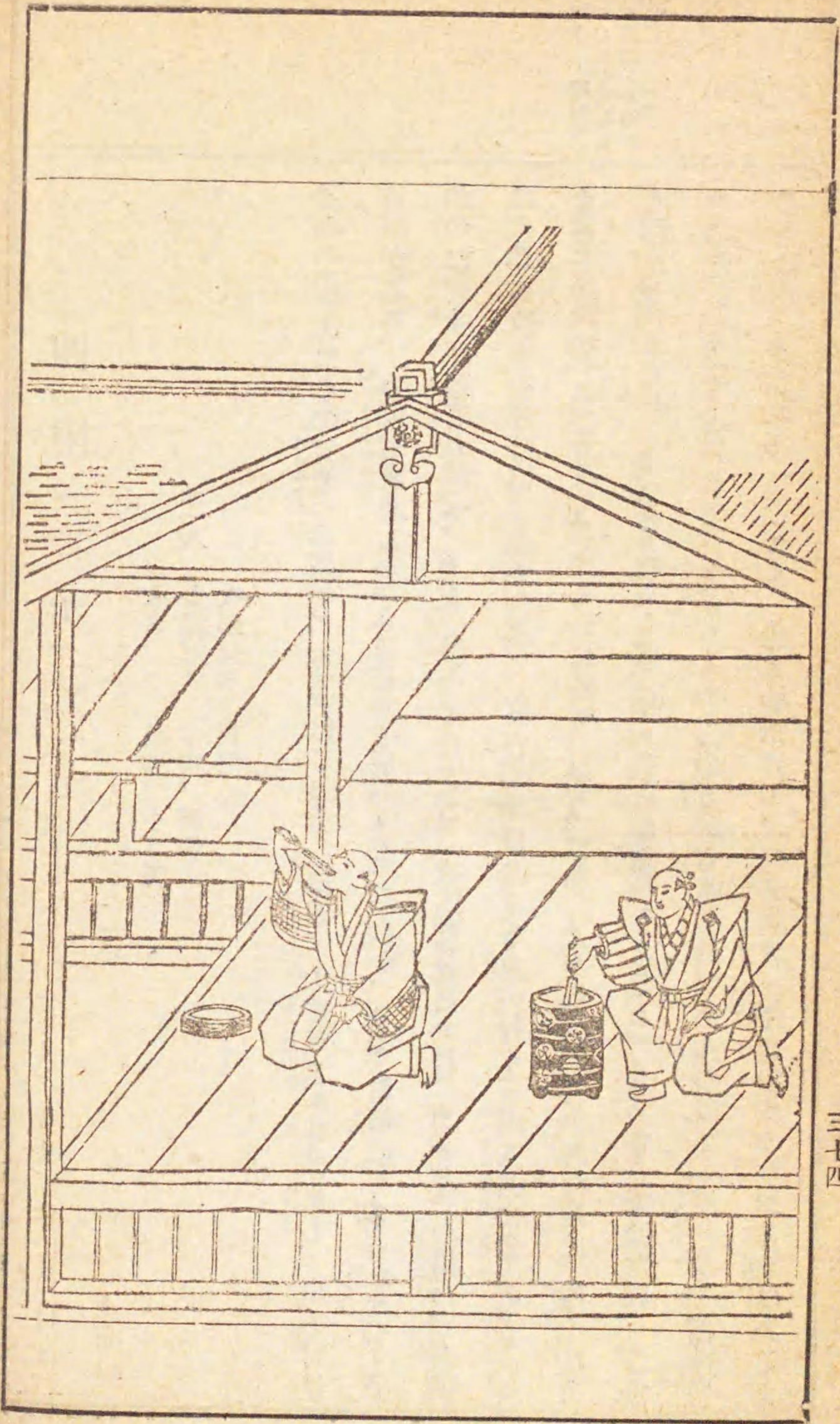
▲商人このめでたい市に、女は一のたなにつけられますまい。某をつけて下されい。▲目代  
 いやく、勝負でなければならぬ。▲商人某は腕押をさせう。▲目代やいく、腕押をせう  
 と云ふわ。▲女女ちやと思つて、うで押しを申すか。妾もいたしませう。▲目代さあく、  
 うでおし。兩人ながら、出てせい。▲二人心得ました。▲女勝つたぞく。▲目代やいく、  
 あまりぢや。何ぞ、ま一度勝負せい。▲商人脛押をいたしませう。▲目代さあく、すねおし  
 を今一度せい。▲女心得ました。▲商人かつたぞく。▲女今のは知れぬ。相撲をとりま  
 せう。▲目代一段よからう。さあ、すまふを取れ。▲商人畏つた。▲女お手つ。勝つたぞく。  
 ▲商人やいく、今一番とれく。追ひかけて  
 はいる。

四附子

三人  
 大名 長袴、小き刀  
 太郎冠者 半袴、腰帶  
 次郎冠者 同じく

▲大名このあたりの大名でござる。今日はさる方へ参る。太郎冠者を呼び出し、申し付け  
 る事がある。太郎冠者あるか。▲太郎冠者 是あ。▲大名ゐたか。▲太郎 お前に。▲大名 念なう早  
 かつた。次郎冠者も呼べ。▲太郎 畏つてござる。次郎冠者召すわ。▲次郎冠者 心得た。お前  
 に。▲大名 汝等呼び出すは別の事でない。今日はさる方へ行く。兩人共に留守をせい。  
 ▲冠者二人畏つてござる。▲大名 それに待て。▲二人はあ。▲大名 やい、このあなたに、附子があ  
 る程に、さう心得。▲二人 それならば、兩人共にお供致しませう。▲大名 さうではない。この  
 あなたに、ぶすと云うて、毒がある。この方から吹く風にあたつてさへ滅却する程に、  
 さう心得。▲二人 畏つてござる。▲太郎 やいく、次郎冠者、今日のやうなおるすはあるま

附子一毒物也、  
 ぶしとも云ひと  
 りかぶとの根に  
 生ず



いぞ。▲次郎をよ〜、そなたが供に行けば、みどもが留守をする。身共が供に行けば、そなたが留守をする。今日のやうな云ひあはせた留守はあるまいぞ。そりやあ。▲太郎何事ぢや。▲次郎ぶすの方から、風が来た。ことにてはなせ。▲太郎みどもは、あのぶすを見やうと思ふ。▲次郎やくたいもないことを。おけ。▲太郎あの方から吹く風が、あたらねば苦しくない。扇いでくれ。▲次郎心得た。▲太郎扇け〜。▲次郎心得た。ぬかるな。▲太郎ぬかる事ではない。さあ、紐は解いたぞ。さて、蓋をあけうほどに、扇け。▲次郎心得た。▲太郎さて、蓋をあけたぞ。身共はあの附子を見て来う。▲次郎一段とよからう。▲太郎やいやい、見て来たわ。▲次郎いか様なものぢや。▲太郎なんぢやは知らぬが、黒い物がどつみりとしてある。旨さうな物ぢやほどに、みどもは食うて見やう。▲次郎やくたいもない事を。おけ。▲太郎みどもは、ぶすに領じられたか、食ひたうてならぬ。行て食て来う。▲次郎みどもが居るからは、やる事はならぬ。▲太郎名残の袖をふりきりて、附子の側へぞあゆみ行く。▲太郎ぶすを食ふ。むよ。▲次郎やい太郎冠者。なんとした。▲太郎砂糖ぢや。▲次郎なんぢや。

どつみりとして  
―どろ〜として  
也  
領じられたか―  
取付かれたかし  
て  
名残の云々―曲  
にかゝる

牧溪和尚一宋人  
範無準の弟子  
大天目一茶の湯  
の茶碗

砂糖ぢや。▲太郎なかく。▲次郎どれく。▲太郎まづ食うてみよ。▲次郎心得た。むよ、まことに砂糖ぢや。▲太郎これを食はすまいと思つて、ぶすぢやの、毒ぢやのおしやつた。▲次郎汝ばかり食てよいものか。▲太郎それならば、ちとやらう。▲次郎そのやうに取らずとも、ちつと取れ。▲三人さてくうまい事かな。▲太郎ほう、よい事めさつた。頼うだお方の、ぶすぢやの、毒ぢやのおしやつたに、皆おくやつたと、頼うだお方のお歸りなされたらば申し上ぐる。▲次郎みどもが、おけと云うたに開けた。某がまつすぐに、申し上ぐる。▲太郎やいく、これはじやれ事ぢや。この言ひわけは、あの掛物をやぶればよい。▲次郎心得た。さらにく。▲太郎よい事めさつた。あれは頼うだお方の、牧溪和尚の墨繪の観音で、御祕藏なされたものを、あの様にめさつた。お歸りなされたら、きつと申し上ぐる。▲次郎破れと云うたによつて、やぶつた。みどもが申し上ぐる。▲太郎やいやい、これもじやれ事ぢや。▲次郎さて、この言ひわけどもは、何とするぞ。▲太郎この大天目を破れば、いひわけが立つ。▲次郎いかなく、また迷惑をさせうで。▲太郎身共も、手

わごれ一わごり  
よに同じ汝也

をかける。そちらを持って。▲次郎心得た。▲太郎ぐわらり。▲次郎ちん。▲太郎さて、おかへりなされたらば、泣いて居よ。▲次郎泣けばよいか。▲大名只今罷歸る。やいく、もどつたぞ。▲二人泣けく。▲大名心許ないが、何事ぢや。▲太郎次郎冠者申し上げ。▲次郎わごれ、申し上げさしませ。▲太郎お留守を大事と存じて、次郎冠者と相撲をとりましてござれば、次郎冠者は手とりでござり、私が小股をとつてこかしますを、こけまいと存じて、掛物に取付いたれば、あのやうになりました。▲大名これはいかな事。あれは、みどもが祕藏の観音を、あのやうにし居つた。▲次郎かへしさに、天目の上へ投げられました、あのやうに微塵になりました。▲大名これはいかな事。おのをなんとしたものであらうぞ。▲太郎かやうに大事の御道具を損ひまして、生けてはおかせられまいと存じて、附子を食べて死なうと存じて、下されたれども、まだ死にませぬ。▲大名おのれ等、今のまに滅却せうぞ。▲太郎一口食へども、まだ死なず。▲次郎二口食へども、死なれもせず。▲太郎三口四口。▲次郎五口六くち。▲二人十口あまり、皆になるまで食うたれども、死なれぬ命、めで

下されたれども  
一戴きたれども  
の意  
一口食へども云  
云一曲にかゝる

たさよ。なんほう。▲大名やい、そこなやつ。▲次郎はあ。▲太郎これは何としたものであらう。▲大名まだ、おのれはそれに居る。▲三人ゆるさつしやれく。▲大名やるまいぞ、く。

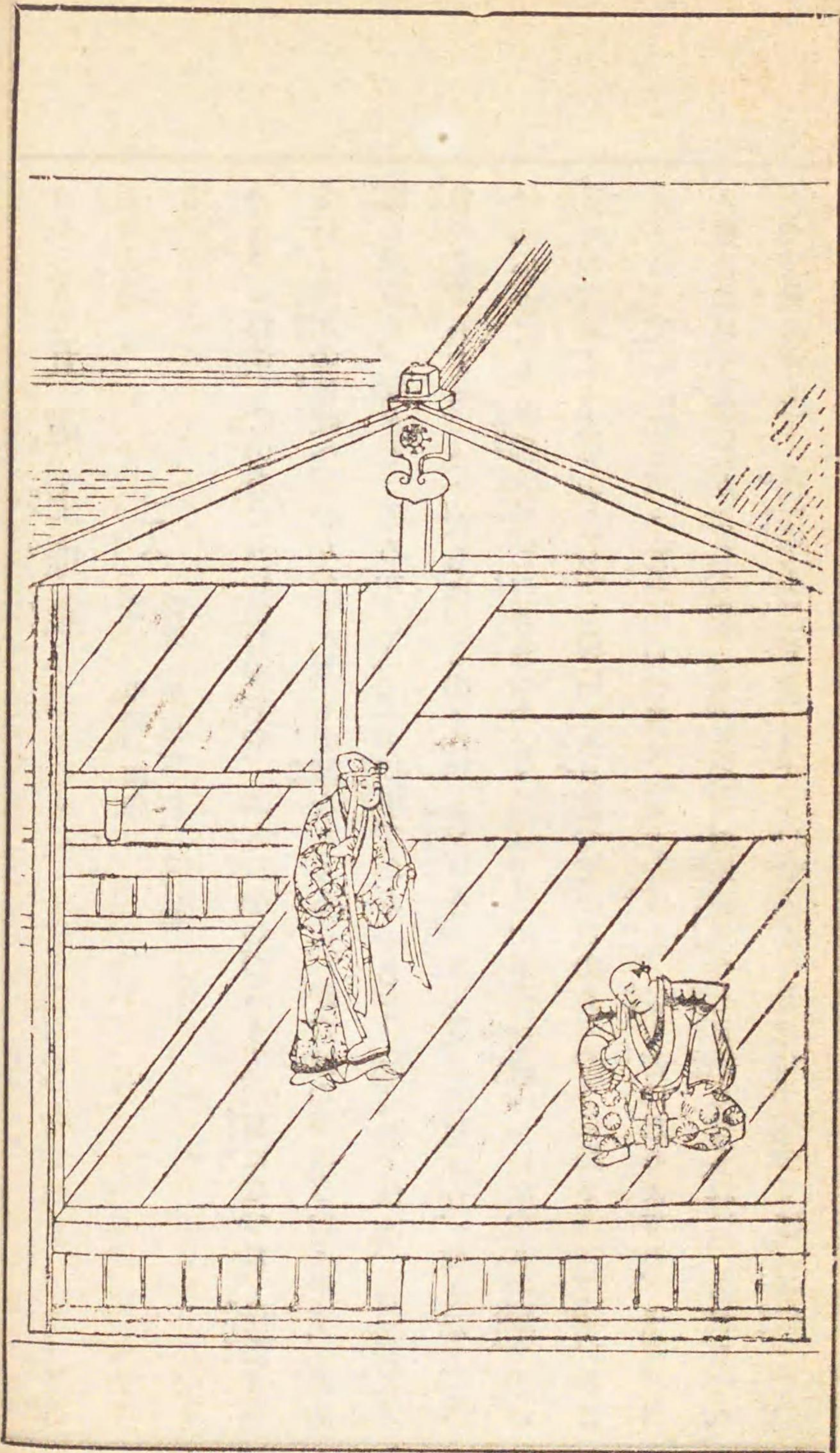
五 川上地藏

二人

盲 半袴、腰帶  
女房 ひなん、箔、さげ帶

▲目くらこれは、このあたりに住む者ぢや。ふと目をわづらうて、盲になつた。迷惑な事ぢや。川上の地藏へ、いかやうの事も祈請をかくるに、かなはぬ事はないと申す。目の願に参らう。女ども、ゐるか。▲女房何事でおぢやるぞ。▲目くらもはや、目の養生色々すれども、よくならぬ。この上は、神佛を頼んで見うと思ふが、何と思ふぞ。▲女房いかにも、神佛次第が、好うおぢやらう。▲目くら川上の地藏へ、いかやうの願をかけたもかなふと、人々のおしやる程に、七日籠つて、口のあくやうに致さう。▲女房いかにもく、尤でござる。こなたの目の見えぬ事が、朝夕、妾も苦になります。▲目くら目が見えねば、死んだがましぢや。▲女房まづ、お地藏様へ七日籠らせられい。おれもつれだつて籠りまして、湯茶でも進ぜう。▲目くらいやく、そなたが籠つては、子供をしや





わせたれ—わせ  
は来るの意ち  
すの略也

うやうがない。留守してたもれ。▲女房まことに、子供の爲ぢや。留守致さう。▲目くら追  
付まるる。やがて下向いたさうぞ。▲女房めでたく目があいて、戻らせられい。待ちます  
るぞ。さらばく。▲目くら女房どもは、殊の外格氣深い者で、一日も手ばなれしはせま  
いと思うたが、嬉しや、合點して、籠れと云ふ。急いで参り、祈誓かけて見まうせう。  
おれが因果なれば、是非もなし。わづらひならば、お地藏のおかけで、目のあく事もあ  
らう。夥しい参りさうな。これぢや。拜ませう。さらば籠りませう。はあく、あら  
尊や。あらたに御靈夢がござつた。はや目があきました。かたじけない。うれしや、う  
れしや。内々聞き及うだより、あらたなお地藏様ぢや。南無地藏く。かたじけない。女  
房共も、満足に思ひまうせう。子供もさぞく喜ぶであらう。▲女房こちの人は目が見え  
ぬところで、川上のお地藏様へ、一七日こもると申して、参られた。心もとなう存ずる。  
見舞ひませう。何と、口がお地藏様のお蔭であけかし。これはく、はや下向さしらるよ。  
▲目くらそなたはどこへ。▲女房きづかひに思うて見舞に参る。▲目くらようこそわせたれ。

お見やれ。目があいて、昔よりよい目になつたわ。▲女房やれく、嬉しやく、めでたい事や。▲目くらさればく、お地藏様の、あらたな御夢想で、そのまよ目が明かになつておぢやる。▲女房そなたは五六日も断食をしておぢやると聞いたによつて、いとしいとしや、瘡せ衰へて、ひだるからうと思つたが、殊の外色もよし、つやくして戻つたが、合點が參らぬ。▲目くら目のこの如くに、明かになる程の事ぢやとところで、ひだるうも少しもなし。なるほど、ひふもよいと思はしませ。▲女房いやく、只事ではない。がてんが參らぬ。▲目くら神佛のおかけぢやとところで、たゞ事ではない筈ぢや。▲女房おのれ、知らぬと思ふか。わ男め、内々聞き及うだ。誰そ、酒や肴、色々の物を持つて行て馳走してがあらう。▲目くらそなたより外に、誰が見舞ひまうせうぞ。わけもない事はしますな。▲女房腹だちやく。おれに隠し居つて、さいく寄合うて、知つたく。にくいやつのはらだちやく。▲目くらさてもく、無理な事いふ女房ぢや。弓矢八幡、わき心はないぞ。▲女房いやの空誓文や。ありのまよに、隠さずとも、云ひ居るまいか。▲目くらはあ

空誓文一個の誓約

そら目一うその目

はあ、又目がつぶるよ。かなしやく。▲女房おのれ、つぶれもせぬ目をつぶしたと云うて、だまさるゝ事ではないぞ。▲目くらだまさう事ではない。かなしや、眞實つぶれたわ。▲女房そら目をつぶすか。腹の立つことやく。何がつぶれうぞ。▲目くらいやく、どこがどことも見えぬぞ。ゆるせく。▲女房どこへ。やるまいぞ。▲目くらゆるせく。

六 盆山

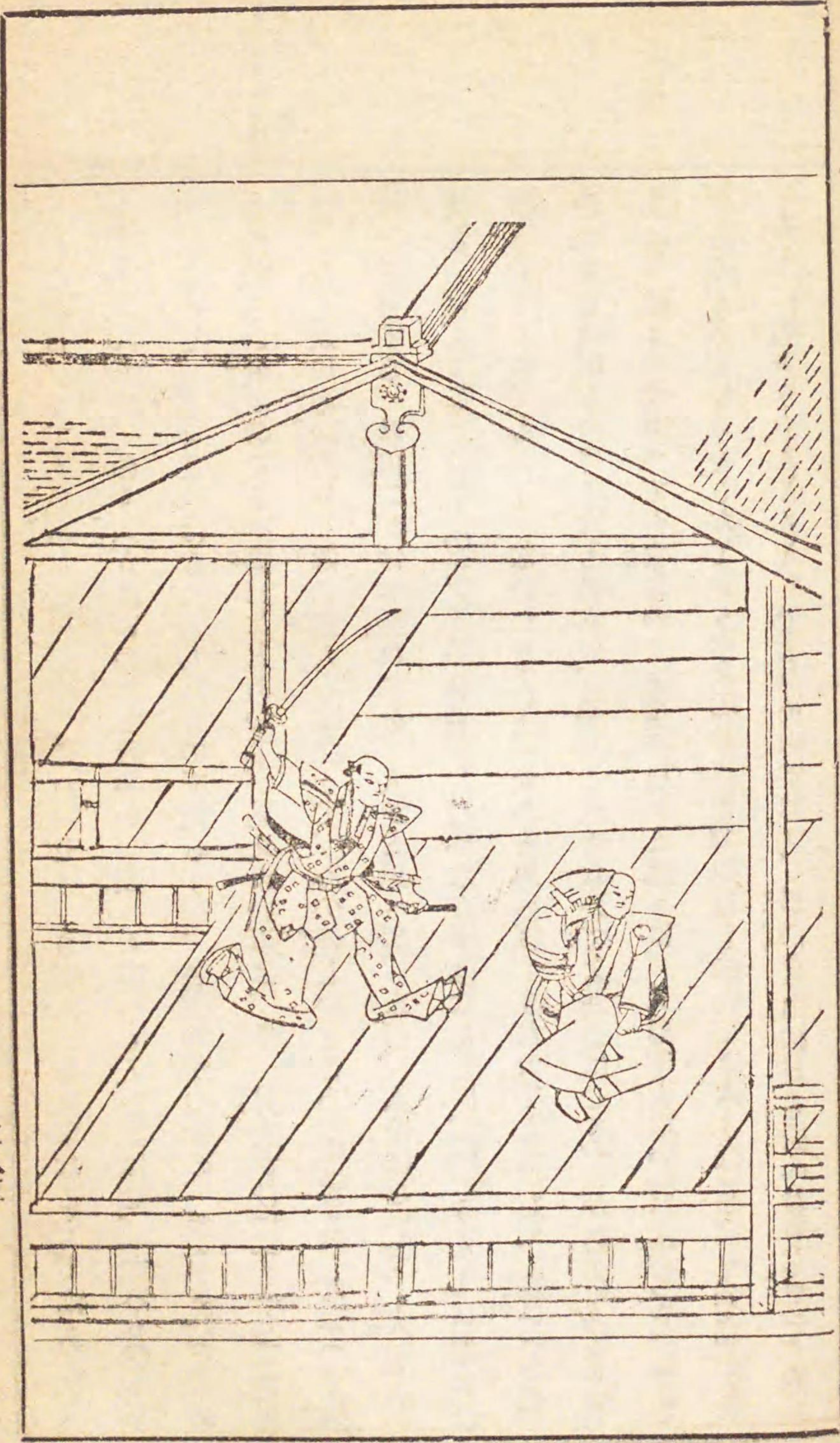
二人 源藏 半袴、腰帶  
權兵 長袴、小さ刀、太刀持

盆山―箱庭の類  
しわい人―音齋  
なる人

作事―造作

壺の内―庭のこ  
と

▲源藏 是は、このあたりに住居致す者でござる。某存じた方に、盆山をあまた持つてゐるよ。一つ所望致せども、しわい人でくれられぬ。あまりほしうござる程に、今晩忍び入つて、案内無しに取つて参らうと存ずる。やあさて、しわい人でござる。あの澤山な盆山の内を、一つなどくれられたとあつて、別の事もござるまいに、さてもく、しわい人でござる。や、参る程にこれぢや。これはいかなこと。此中作事を致されたと見えて、中々厳しうて、はいられぬ。裏へ廻つて見やうと存ずる。はあよ、表の屋作とは違うて、粗相な事でござる。この葦垣をさへ破れば、あなたは壺の内ぢや。まづ、葦垣を破らう。ざくく、めりくく。さてもく、鳴つたりく。何と、人は聞かなかぢやまで。いやく、人音もせぬ。さらばはいらう。さて、盆山はどこにある事ぢやぞ。や、



見えまい事は  
反語也見ゆるこ  
と

これにある。さても見事な盆山ぢや。これにせう。さてもく見事なことではあるぞ。  
 ▲權兵衛 なんぢや。ぬす人がはいつたと云ふか。表へも裏へも人をまはせ。一人もやる事  
 ではないぞ。▲源藏 これはなんとしたものであらうぞ。▲權兵衛 がつきめ、やるまいぞ。あ  
 のちひさい盆山のそとへ隠れたとあつて、見えまい事は。や、月夜かけにすかして見れ  
 ば、たしかに源藏ぢや。餘の盗人とは違つて、心の優しいところがござる。なぶつて返  
 さうと存ずる。盆山のかげへ隠れたを、人かと思へば、まづ、人ではないぞ。犬ぢや。  
 犬ならば、なきさうなものぢやが。▲源藏 これは、なかずはなるまい。びやうく。▲權兵衛 び  
 やうく。さてもく、ないたりく。犬かと思へば、また犬でもないわ。烏ぢやわ。  
 からすならばなきさうなものぢや。▲源藏 これもないてよろこばせう。こかあく。▲權兵衛  
 あはよはよ。▲源藏 さても喜ぶわ。▲權兵衛 烏かと思へば、又烏でもないわ。猿ぢや。さる  
 ならば、身せせりをしなてかう事ぢやが。▲源藏 これも啼いてよろこばせう。▲權兵衛 なか  
 うぞよ。▲源藏 きやくく。▲權兵衛 あはよはよ。最前から、何かと云へども、皆ことく

くまねをする。何ぞ、まねをせぬ事が申したいが。や、思ひだした。最前から何かと云  
 へども、皆某が目ちがひぢや。よう見れば鯛ぢやぞ。▲源藏 また鯛ぢやと云ふわ。▲權兵衛  
 鯛ならば、鰭を立てさうなものぢやが。▲源藏 これも立てずはなるまい。▲權兵衛 ありや立  
 てたわ。鯛はひれをたてて後は、必ずなくものぢや。なかうぞよ。▲源藏 これはいかな事。  
 鯛のないたを、つひに聞いたことがない。なんとしたものであらうぞ。▲權兵衛 なかずは  
 鐵砲で打殺すが。▲源藏 これは啼かすはなるまい。たひくく。▲權兵衛 あの、横著者。  
 やるまいぞく。